九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# 南方徴用文学研究 : 戦後における南方表象の問題を中心に

尹, 小娟

https://hdl.handle.net/2324/2236323

出版情報：Kyushu University, 2018, 博士（学術）, 課程博士
バージョン：
権利関係：

# 南方徴用文学研究——戦後における南方表象の問題を中心に

九州大学地球社会統合科学府
尹　小娟

平成三一年二月

# 目次


凡例

序章……1
1　問題設定……1
2　南方徴用文学に関する研究……2
3　各章の概要……6

第一部　陸軍報道班

第一章　北原武夫における南方徴用――「想念」をめぐって――……13
1　はじめに……13
2　「大東亜共栄圏」構想の受容……15
3　「想念」の行方――「カリオランの薔薇」に即して……24
4　おわりに……32

第二章　阿部知二における南方徴用――敵性国人と現地人への着目――……34
1　はじめに……34
2　戦時下における創作――『火の島』……35
3　オランダ人学者の保護……39
4　「猿踊」題材の戦中と戦後――「バリ島の記」から「猿」へ……45
5　おわりに……51

第一部まとめ……53

第二部　海軍報道班

第三章　海野十三における南方徴用――科学小説を視座として――……56
1　はじめに……56
2　科学者と愛国者、二つの顔から見る戦争……56
3　徴用中における分裂……61
4　戦後の反省と創作……67
5　おわりに……74

第四章　久生十蘭における南方徴用――前線の日常を描く――……76
1　はじめに……76

2　日常化した非日常……77
3　戦争の真の姿を追求……83
4　戦後改作――「内地へよろしく」と「風流旅情記」……88
5　おわりに……94
第二部まとめ……96
第三部　占領地視察
第五章　林芙美子における南方徴用――「ボルネオ・ダイヤ」から「浮雲」へ――……99
1　はじめに……99
2　女たちの南方――現実逃避の場所……101
3　南方表象化の二面性……103
4　恋愛小説から見る南方――野性と理性……111
5　おわりに……116
第六章　佐多稲子における南方徴用――一作家と一国民の間で揺れる――……118
1　はじめに……118
2　戦地慰問の屈折と南方慰問……119
3　女性解放思想の屈折と南方慰問……124
4　「罪」より「恥」……129
5　おわりに……137
第三部まとめ……139
終章……142
参考文献……146
初出一覧……151

## 凡例

○　引用に際して旧漢字は新字体に改め、ルビは必要でない限り省略した。傍点や傍線は特に断らない限り筆者による。

○　本文中の引用は「　」で括った。引用文中の筆者による補いは〔　〕を用いる。

○　作品名は「　」で表記した（ただし、書名を指す場合は『　』が用いてある）。雑誌・新聞名は『　』を用いた。

# 序　章

## 1　問題設定

本研究の目的は、昭和十年代の日本占領下における南方徴用文学を対象とし、従来の研究で看過されてきた戦後表象について考察することにある。題目に掲げている「南方」とは、太平洋戦争下に日本が占領していた南洋諸島と東南アジアを指す。

戦時下における作家の外地体験は、一九三八年に「国家総動員法」が公布される前の一九三七年八月から、出版社や新聞社が作家を中国戦線に送ったことを契機に始まっていた。作家たちの役割は、主に特派員として中国へ出かけ、事変のルポルタージュを書くことであった。しかし、本当の意味での作家徴用は、一九三九年七月十五日に発令・施行された「国民徴用令」が文学者にも適用されるようになった一九四一年十月からである。

南方徴用作家の文学とその活動に関する研究は、近年の『南方徴用作家叢書』[1]や『赤道報・うなばら』、『ジャワ年鑑』といった陣中新聞の復刻版[2]をはじめとする関係資料の刊行、『作家のアジア体験――近代日本文学の陰画――』[3]や『南方徴用作家――戦争と文学――』[4]などの研究が契機となって進捗している。また、神谷忠孝[5]は作家の南方徴用の背景、文化工作の内容、作家たちの対応など様々な方面から包括的な研究を行い、以降の研究に有益な情報を提示している。神谷は論文の末尾に「資料」として、一九四二年二月から一九四五年七月にかけての、南方徴用文学者たちが現地から送った報告文や小説、帰国後に書いた回想記、小説、詩などの書誌情報をまとめている。

戦時下の徴用文学をめぐっては、個別の作家・作品研究で、石川達三、高見順、丹羽文雄、火野葦平などの戦争協力の問題が問われる際に、徴用が焦点化されることはあった。しかし、いずれにおいても、徴用は基本的に戦時下の文学として論じられ、戦時体制における問題として対象化されてきた。確かに、徴用の実施は国民徴用令が発令・施行された

1　龍渓書舎。出版時間:ジャワ篇一九九六年十月、ビルマ篇二〇一〇年二月。

2　復刻版:『赤道報・うなばら』(龍渓書舎、一九九三年九月)、『ジャワ年鑑』(ビブリオ、一九七三年)。

3　芦谷信和、上田博、木村一信編(世界思想社、一九九二年七月)。

4　神谷忠孝、木村一信編(世界思想社、一九九六年三月)。

5　神谷忠孝「南方徴用作家」(『北海道大学人文科学論集』二〇号、一九八四年二月)。

一九三九年から日本が敗戦に至る一九四五年までの間である。また、作家の徴用についていうなら、一九四一年十月から一九四四年までの三年間の問題ということになる。そのため、徴用作品が戦時体制と不可分の戦時下の文学であることはまぎれもない。しかしそれだけに、徴用作家が徴用の所産として紡ぎ出した文学（行論の便宜から「徴用文学」という称呼を与えておこう）が論じられるとき、戦後という観点から十分に検討されてこなかったきらいがある。

〈南方徴用文学の戦後〉を閑却する姿勢には、少なくとも二つの問題がある。ひとつは、戦後になって改稿・改作されたテクストとの偏差から「戦時下の徴用文学」テクストの襞が見いだされる事例があること。もうひとつは、改作・改稿がみられない場合でも、その改作・改稿しないという態度や「戦時下の徴用文学」に対する姿勢や発言、さらに徴用体験を反映した創作などを通じて、各作家にとって「徴用文学」が持つ意味、また戦後の創作において「徴用文学」が果たした機能などを観測することが可能になることである。

上記の理由から、本論文が目指すのは、〈南方徴用文学の戦後〉という問題の設定であり、それを具体的なモデルとともに提示することである。

## 2 南方徴用文学に関する研究

昭和十年代の南方徴用作家及びその作品に関する研究の嚆矢は神谷忠孝「南方徴用作家」（『北海道大学人文科学論集』一九八四年二月）である。神谷は作家たちが徴用される経緯を明らかにしたうえで、南方での「文化工作」を詳しく紹介している。神谷によれば、文化工作の内容は大別すると、「対占領地宣伝」、「対軍隊宣伝」、「対敵宣伝」三つに分けられるという。さらに、作家たちがこうした文化工作にどのように対応していたのかという問題に関して、彼らの報告文や小説を四つの型に分類している。[6] また、海軍報道班員と陸軍報道班員の場合に関して、「各地を転々とし、現地の人とあまり接触しない海軍報道班員の書いたものより、半年以上にわたって現地に住みつき、ことばもおぼえた陸軍報道

6 「一つは、大東亜共栄圏の思想を信じ、体制側の眼によって都合のよい部分だけを報道するもの。二つめは、情報や伝聞による先入観を現地で確認して報道するもの。三つめは、現地の人と積極的に接触して直接的に情報を収集し、正確さを出そうとするもの。四つめは、自己の感性を頼りにして、心に触れたできごとを書いているものである」（「南方徴用作家」、一七頁）。

班員の書いたものの方が、内容に深まりがある。だから、異民族体験を伝えてくれるのは陸軍報道班員の方が多い」（一七頁）と指摘している。神谷論は具体的な作家と作品の研究はしていないが、南方徴用文学の基礎的研究として非常に意義がある。

都築久義は「作家の徴用」（『愛知淑徳大学論集』一一号、一九八六年三月）で尾崎士郎をめぐるフィリピンの宣伝班の実状を究明し、「昭南日本学園」を紹介したうえで、「シンガポールの宣伝班こそはその役割と任務を果し、日本軍の期待に見事に答えたといえよう」と指摘している。また、井伏鱒二「花の町」（『東京日日新聞』一九四二年八月一七日～十月七日）について、「軍に迎合したところもなく、時流におもねる気配も微塵もない」という従来の評価に対して、「花の町」は大本営の期待に応えるために書かれたもので、日本の占領政策に疑問を抱きながら「日本の占領政策を讃美した」と異論を唱えている。さらに、都築は尾崎士郎の「人生劇場・遠征編」を取り上げ、「宣伝部隊の実態やフィリッピンの実状を暴露的に描き出」し、「軍部へのおもねりも時局への迎合もない」と高く評価している。

個別の作家研究では、水上勲「阿部知二とジャワ徴用体験」（『帝塚山大学紀要』二三号、一九八六年一二月）で、阿部知二の徴用の経緯、他の徴用作家との比較を通して、阿部は「戦時下において、完全に自己を喪失しなかった」と評価している。また、戦後になって徴用体験を題材に創作した作品に、阿部の「美しい〝ジャワ幻想〟の系譜が見られる」と指摘している。ただし、戦後作品の分析については梗概の紹介程度で、戦時下の徴用体験と結びつけた考察はしていない。

以上見てきたように、一九八〇年代に展開された南方徴用文学の研究には少なくとも二つの特徴がある。ひとつは、徴用の経緯、宣伝班の文化工作の内容を中心に、作家たちが白紙徴用令状を受け取ったところから区役所に出頭し、南方に着く日程までを調査し、明らかにしていること。もうひとつは、個別の作家・作品研究は極めて少なく、具体的なテクスト分析が不十分であること。また、テクストの読解があったとしても、軍部に迎合したかを確認する程度であることである。とはいえ、先に挙げた三本の論文は、以降の研究につながる基礎的研究として様々な示唆を与えている。

一九九〇年代に入ってからは、個別の作家・作品の研究で作家の南方徴用体験が重要視されるようになる。芦谷信和・上田博・木村一信編『作家のアジア体験――近代日本文学の陰画――』（世界思想社、一九九二年七月）はアジア体験のある十名の作家を取り上げている。このうち南方を対象にした箇所では武田麟太郎、阿部知二、今日出海の三人を扱

っている。いずれも徴用の経緯と工作の内容に重点を置き、テクスト分析はほとんど見られない。木村一信が執筆した「阿部知二インドネシアへの旅――ヒューマニズムと逸楽――」は、上記の水上論を引き継いで官能美から戦後のジャワもの創作について触れているが、具体的な分析はしていない。また、武田麟太郎と今日出海は戦後になって南方徴用体験に関する作品は書いていないため、両者の戦後には言及していない。

川村湊は『南洋・樺太の日本文学』（筑摩書房、一九九四年一二月）の「「南」へ向かう文学」（初出:『別冊文芸・越境する世界文学』河出書店新社、一九九二年一二月）の章で「南方徴用作家」に言及している。川村は、戦後においても南洋体験を自らの思想形成や文学の主題としてねばり強く探求している作家の一人として阿部知二を取り上げ、「阿部知二の中にあるのは、西洋的なものと自己との対立の構図であって、それは自分の中の西欧的な知性と反西欧的と思われている未開の官能性、欲望から生み出される「あられもない空想力」との葛藤なのだ」（『南洋・樺太の日本文学』八一頁）と指摘している。ただし、川村が言及している作品は「死の花」（『世界』一九四六年七月）だけであるため、考察としては十分とはいえない。また、先にも述べたが、徴用体験を題材とした作品である以上、たとえ戦後の作品であっても戦時下の作品とのつながりを重要視すべきである。

神谷忠孝・木村一信編『南方徴用作家――戦争と文学――』（世界思想社、一九九六年一二月）は十三名の作家を取り上げている。神谷は序論で、「本書のねらいは、戦争、占領という状況の中で多くの文学者が自己の使命をどのように目覚し、いかに表現しようとしたかを探求することにある」（一三頁）としている。そのため、本書で扱っているのは作家の徴用中あるいは戦時下の作品がほとんどであり、戦後の作品は数行で触れる程度である。また、今後の課題として、「徴用文学者の戦後の文章を読むことで、戦時中に言えなかった本音を確認する作業が大事なこと」（一四頁）だと述べている。

二〇〇〇年代に入ると、歴史学の視点から南方徴用作家を捉えようとする研究が見られるようになる。歴史学者の河西晃祐は「徴用作家北原武夫・浅野晃・武田麟太郎の「インドネシア」――戦時期「南方」観の一考察」（『紀尾井史学』二一号、二〇〇二年三月）で、「リベラリスト」の北原武夫、「武装共産主義から「転向」した後に日本浪漫派に属」する浅野晃、「旧左翼的アナーキスト」の武田麟太郎の三名の作家を、「皇国思想」の摂取度合い、彼らのインドネシア人観、「大東亜共栄圏」の信奉度とインドネシアの位置づけ、宣伝班への評価という四つの軸で比較分析している。また、木村一信は作家の南方体験研究の集大成といえる『昭和作家の〈南洋行〉』（世界思想社、二〇〇四年四月）にお

ける「〈徴用〉の時代」の章で、阿部知二、高見順、北原武夫、庄野英二を取り上げている。内容から見ると、木村論には三つのねらいがある。第一に、客観的な事実としての作家の言説を網羅すること。第二に、作品が書かれた状況や背景を見極めること。第三に、作品が同時代の人々や社会に持った意味や影響と、それが現代の我々に対して持つ意義を判定すること。

以上のように、南方徴用作家に関する研究は、徴用の経緯、文化工作の内容確認を経て、個別の作家研究での徴用作品に対する研究が活発化してくるが、考察の対象は戦時下の作品が中心である。南方徴用が作家たちにとっていかなる体験であったかを総合的に検討するためには、戦後の作品を見逃すことはできない。なかでも、戦時下の作品を戦後になって改稿・改作した北原武夫「カリオランの薔薇」と久生十蘭「内地へよろしく」（改作後の作品名は「風流旅情記」）については、戦前版と戦後版を比較分析する必要がある。

さらに、同じ南方徴用とはいっても、戦況報道を目的とする「陸軍報道部」と「海軍報道部」のほかに、すでに平定された占領地への「視察」もある。目的の違いによって、人選の基準、徴用された作家の身分や背景、現地での任務も異なるため、それぞれの立場によって彼らの紡ぎ出す徴用文学も多様な様相を呈している。本論文で扱う北原武夫と阿部知二は「陸軍報道部」、海野十三と久生十蘭は「海軍報道部」、林芙美子と佐多稲子は「占領地視察」の例に当たる。なお、これらの六名の作家を選んだ理由は以下の通りである。

まず、「陸軍報道部」の報道班員として徴用された作家たちの中で、北原武夫と阿部知二は純文学作家であり、作品の文学性が高く、加えて戦時下から戦後にかけて徴用体験を作品化し続けていること。また、先に整理した先行研究では、戦後作品に対する、戦時下の作品との関係性や作家の文学創作の視点に基づく詳細な考察が不足しているためである。

次に、「海軍報道部」の海野十三については、彼の徴用体験を扱った論文が吉川麻里「海野十三の南方徴用体験――科学力の罠」（前掲『南方徴用作家』）の一本しかなく、久生十蘭の南方徴用体験に関するものは現時点では見られないためである。確かに、神谷[7]が指摘しているように、海軍報道班員より、長い時間現地に住みついていた陸軍報道班員の方が作品の内容に深まりがあるが、徴用文学の全体像を描き出すのであれば、海軍報道部も

7　前掲「南方徴用作家―戦争と文学―」。

見逃せない。また、海野十三と久生十蘭はともに雑誌『新青年』から出発した探偵小説家である。彼らが南方へ行き、南方をどのように表象したのかを明らかにすることで、戦時期の大衆文学の一側面がうかがえるだろう。

最後に、「占領地視察」のために徴用された林芙美子をめぐる先行研究は徴用期間の行程などを確認した実証的研究（例えば、望月雅彦『林芙美子とボルネオ島――南方従軍と「浮雲」をめぐって』（ヤシの実ブックス、二〇〇八年七月））が中心で、戦後に発表された一連の南方作品にはほとんど触れていないので、改めて検討する必要がある。また、佐多稲子の場合は南方体験と中国体験を合わせて論じ、戦争責任を追及するのが一般的であるため、佐多文学における南方体験の位置づけを全円的に描き出す必要がある。さらに、南方徴用文学と女性作家との関わりという視点からも、林芙美子と佐多稲子を取り上げる意義がある。

本論文は、「陸軍報道班」「海軍報道班」「占領地視察」という徴用形態に即した部立てを採っている。これは徴用形態の違いに基づく作品間の偏差を明らかにするためではなく、南方徴用文学を網羅的に捉え、戦後においても追求されるべき問題を内包している、南方徴用文学の多様性を明らかにするためである。

上記の理由から、本論文では先行研究を踏まえながら、六名の作家の戦時下の作品と戦後の作品、なかでも戦時下に発表された作品の戦後における改稿・改作の問題に注目し、各作家が戦後自らの南方徴用体験をどのように受け止め、いかなる思念を展開させたのかを明らかにする。

### 3　各章の概要

本論文は三部六章から成り立っており、その概要は以下の通りである。

第一章では北原武夫を取り上げる。北原がジャワでの見聞を記した『雨期来る』（文体社、一九四三年九月）には、ある画家と「大東亜共栄圏」に関して議論する場面が描かれている。「大東亜共栄圏」言説の、「アジアは一つ」と「内地と外地は区別すべきだ」という二重構造は、戦時下において、それを公表することには多少なりとも勇気がいったにせよ、少なくとも北原やその画家などの言論人にとっては暗黙の共有事項であった。この談論で注目すべきは、この暗黙の共有事項である本音が、北原の内側に、彼自身でも気づかないうちにある「想念」として棲みついていたことである。端的にいってしまえば、それは内面化されたナショナリズム的心性である。

また、北原の徴用体験ではもうひとつの「想念」にも注目したい。評論「薔薇について」（『文芸』一九四三年五月）で、北原は「薔薇の美しさを描くことが生命を賭するに足ることだ」として、政治的視点からは「空虚」と批判されかねない局面において、「生命を賭するに足ること」としての文学を「想念」として見出している。北原のうちに潜むナショナリズム的心性と文学の本質という二つの「想念」が徴用体験の核心だとすれば、その行方を問うことが徴用文学研究の大きな課題になる。北原の戦時下の小説「カリオランの薔薇」は一九四二年九月二〇日に陣中新聞『うなばら』に掲載された後、一九四三年に若干の字句の修正が施され、ジャワ従軍記『雨期来る』に収録された。さらに、戦後になって加筆、改稿されて『群像』（一九五一年一月）に掲載された。戦後版には大きな加筆が三箇所ある。その中でも注目したいのは、あるオランダ人男性が植民地で捨てた名称化されない泣き続ける赤ん坊や、その赤ん坊をあやすジャワの現地人女性、そして主人公「私」が内地で捨てた女と子供のくだりである。戦後版での大きな加筆を通して、北原は主人公「私」が忘却していた薔薇のように、世間で忘却された、植民地に残された女と子供たちの声を人々に届けようとする。戦前版と戦後版の二つの「カリオランの薔薇」は、徴用文学が何を塗りこめているかといった徴用文学の性格や構造、読み方を教えるとともに、外地で泣き続ける赤ん坊と女のつぶやきに対する戦後日本の「想念」を問うているといえる。

第二章では阿部知二を取り上げる。阿部の南方徴用体験を題材にして書いた作品には、戦時下の紀行文・エッセイ集『火の島――ジャワ・バリ島の記』（創元社、一九四四年七月）と戦後の小説集『死の花』（新文芸社、一九四七年九月）がある。これら二つの作品集に関する研究は決して多いとはいえない。特に『死の花』に関しては、水上勲「阿部知二とジャワ徴用体験」（『帝塚山大学紀要』二三号、一九八六年一二月）と木村一信「阿部知二の〈徴用〉体験――「死の花」の背景」（『昭和文学研究』二五集、一九九二年九月）のみである。しかも『死の花』に収録されている他の三篇の小説はあまり論じられていないのが現状である。しかし、『死の花』は、以下の二点から、南方徴用文学の非常に重要な一側面を描いているといえる。ひとつは徴用作家と敵性国人との関係であり、もうひとつは徴用作家と現地人との関係である。『死の花』に収録されている「死の花」、「罪の日」、「あらまんだ」、「猿」の四篇の中で、前の三篇にはいずれもオランダ人学者が登場する。主人公は彼らの悲惨な状況に同情し、自身の力が及ぶ範囲で彼らを救助しようとするが、結局徒労に終わってしまう。「死の花」に度々登場する「フランジパニ」という白い墓場の木の花は、いわゆる表題の「死の花」である。この「死の花」が象徴している

のはジャワという花園の死であると同時に、オランダ人学者たちの死でもある。この小説には、宣伝班員としての主人公が、軍当局と敵性国人の親友たちとの間に挟まれた無力が描かれている。

また、バリ島の村で「猿踊」という伝統舞踊を観た阿部の体験は、『火の島』に収録されているエッセイ「バリ島の記」と『死の花』に収録されている小説「猿」の題材となっている。前者が主として文化の視点に基づいて、バリ島の伝統舞踊を歴史や宗教の方面から紹介しているのに対して、後者は「猿のような男」を登場させ、彼が村の外でうろついていたときのみすぼらしさと、村で猿踊を踊っているときの生命力を描いている。こうしたジャワの自然と現地人の融合は主人公を震撼させる。それまでの主人公は、日本とバリ島が共有するいわゆる「東洋の心」を信じており、自分たちは同行する西洋人とは違い、バリ島の文化と通じ合っているのだと自慢していた。しかし、猿踊を観たその夜、主人公は夢を見る。植物、動物と人間とが調和している世界の中で、猿のような男がその中を飛びまわり、自分だけが排除されている。翌朝目が覚めると、主人公はすぐにバリ島から逃げ出して行く。同じ「東洋の土」とはいっても、南方にとって、主人公のような日本人はあくまでも外来の侵入者である。こうしたバリ島、あるいは南方への認識の変容は、戦時下の作品と戦後の作品を比較分析することではじめて浮かび上がってくるものである。

第三章では海野十三を取り上げる。一九四二年一月から五月まで、科学小説家・海野十三は海軍報道班員として徴用され、南方へ赴いた。四ヶ月間の徴用体験を題材にして書いた作品に、従軍日記『赤道南下』（大日本雄弁会講談社、一九四二年一二月）とエッセイ集『ペンで征く』（日本放送出版協会、一九四二年一二月）がある。戦後は徴用体験を直接的な題材にした創作がないため、海野の南方徴用に関する研究は極めて少ない。現時点では、吉川麻里「海野十三の南方徴用体験――科学力の罠」（『南方徴用作家』）のみである。吉川論では、海野が徴用体験を経たことで科学者としての立場を捨て、非科学的な精神論に走ったと指摘されている。しかし、海野の徴用前の思想や滞在中の出来事が作品の中にどのように反映されているか、また、直接的に描かれていない場合でも、徴用体験が戦後の科学小説の創作にどのような影響を与えたのかといった問題が依然として残っている。本章では『赤道南下』と『ペンで征く』だけではなく、戦前の作品と戦後の作品をも視野に入れ、それらの作品群を辿りながら、南方体験が海野自身にとって、また、彼の文学においてどのような位置づけにあるのかを探る。

一九二〇年代後半から作家として活動しはじめた海野は、科学者としての知識に裏打ち

された軍事小説で人気を博す。また、徴用前から軍とのつながりも持つようになり、海軍の作家徴用母体となる海軍外郭団体のくろがね会と深く関わる。徴用前の作品では、「戦争は科学力次第だ」という主張が繰り返し織り込まれている。徴用初期のオーストラリア陸軍との戦闘で日本は順調に勝ち続けたため、海野は日本の軍事力を信じ込んでいた。ところが、一九四二年三月末からアメリカ軍が新兵器をもって攻撃してきた。この頃から、海野の作品は「科学力」の代わりに海軍兵士たちの「精神上の強さ」を強調しはじめる。いずれの作品でも、結末では日本の勝利が描かれているが、具体的にどのような新戦略をとり、どのような新技術を利用してアメリカ軍を撃墜したのかに関する描写はほとんど見られない。このように、南方徴用の後半から、海野の科学者としての立場が捨てられ、科学者と愛国者という二つの身分に亀裂が生じはじめたといえるだろう。戦後、海野は一家心中を試みている。これは敗戦の失意によるものとも、自身の執筆活動への責任を感じてのこととも言われている。自殺は友人の説得により思いとどまり、その後はかつて以上に精力的に科学小説を書いている。戦後作品の特徴として、地球外知的生命（宇宙人）を扱ったものが多く（『火星探検』一九四五年一二月など）、科学力の重要性は依然として強調されている（たとえば原子力の多用）が、なかでも注目すべきは、いずれも最後は交渉による平和的な関係を結ぶことに成功することである。つまり、他者は「敵」から「共存できる仲間」へと変化しているのである。もちろん、これはGHQによる検閲の影響もあるかと考えられるが、海野自身の見解でもあると思われる。

第四章では久生十蘭を取り上げる。十蘭は一九四三年二月から一年間、海軍報道班員として南方に派遣された。十蘭はどういう経緯で南方に徴用されたのかについては現段階で未詳な点がまだ多く残っているが、今手に入れた資料から見る限りでは、南方に徴用されることは不思議ではない。徴用前はすでに一九四〇年七月に設立された国防文芸連盟の常任委員兼評議員を務めて、同年十月、師事していた岸田国士の大政翼賛会文化部長就任に伴い、同部嘱託となる（江口雄輔編「久生十蘭年譜」『定本久生十蘭全集　別巻』六四九頁）。南方体験を題材にした小説やエッセイを幾つか書いている。しかし、十蘭の徴用体験と徴用作品に対する研究は、まだなされていないのが現状である。そこで本章では戦時下の小説「内地へよろしく」（『週刊毎日』一九四四年七月二日号～一二月二四日号）と、この作品を戦後になって改作した「風流旅情記」（『小説と読物』一九五〇年八月）を中心に、十蘭の南方徴用体験について考察する。

二〇〇七年十月講談社によって単行本『久生十蘭「従軍日記」』が初めて披露され、従

来謎に包まれていた十蘭の南方徴用の実態が明らかになってきている。日記から「内地へよろしく」の創作動機は「戦争と南方建設に関係をもつ人々」が偶然に「飛行機に乗り合わせたこの宿〈縁〉を書く」ことであることがわかる。とはいえ、「内地へよろしく」は戦時下の小説であるため、「協力的な言説」が見られるのはいうまでもない。注目したいのは、作者による直接的な戦争賛美を避ける代わりに登場人物に語らせ、作者の本音はその背後に隠されていることである。同時に、十蘭の南方徴用作品では、戦争という非日常の生活がユーモア溢れる筆致で日常化されている。食物が不足し、命が危険にさらされている戦時下においても、苦しみの中で美や楽しみを求める海軍兵士たちの姿が描かれている。戦後、「内地へよろしく」を改稿して発表した「風流旅情記」では、小説の主題が変化している。

改稿する前の主人公は「前線と内地との間の架け橋」のような存在で、戦争中の前線と銃後の間の誤解を解くことに役に立っている。それに対し、改稿後の作品は「戦争にも兵隊にも関係のあることではない」「心象風景」を重んじる個人的な体験となっている。見逃してはならないのは、戦中・戦後を貫いて、十蘭の南方徴用作品の特徴、あるいは筆致が変わっていないことである。彼自身による、「悲壮悲痛の面だけを誇張して戦争を玩弄物視する態度は絶対に制止されねばなら」（「第〇特務隊　読者への言葉」一九四四年六月）ないという言葉が示しているように、十蘭の南方徴用作品は他の徴用作家と比べて、政治性よりも文学性が強いといえる。

第五章では女性作家の林芙美子を取り上げる。林の南方徴用体験は戦時下では作品化されず、一九四六年六月に発表された小説「ボルネオ・ダイヤ」（『改造』一九四六年六月）が最初である。その後、「麗しき脊髄」（『別冊文藝春秋』一九四七年六月）、「荒野の虹」（『改造文芸』一九四八年三月）、そして亡くなる二ヶ月前まで連載を続けていた「浮雲」（『風雪』一九四九年一一月～一九五〇年八月、『文学界』一九五〇年九月～一九五一年四月）が発表される。本章ではこれら四篇の作品を取り上げ、女たちの南方、南方表象化の二面性、恋愛小説からみる南方という三つの方面から、林の小説において南方がどのように表象されたのか考察する。「ボルネオ・ダイヤ」と「浮雲」の主人公はいずれも女性である。彼女たちは内地での生活から逃れるために南方へ赴くことを決心していることから、南方が女たちの〈逃げ場〉として描かれていることがわかる。しかし、小説の結末を見ると、彼女たちの南方行きは根本的な目的が達成されないままに終わる。南方は彼女たちにとって〈救いの地〉となるどころか、むしろ〈不幸の地〉になっているといえよう。

また、林の戦後作品における南方表象には、「自然と人間がたはむれ」る楽園としてのイメージと南方体験がもたらす不安という二面性が見られる。戦時下のボルネオを舞台とする「ボルネオ・ダイヤ」では、戦争の見通しが立たないことに登場人物たちが不安を抱くのに対して、舞台が戦後の日本に移る「麗しき脊髄」、「荒野の虹」、「浮雲」では、南方から引揚げてきた人たちが戦後の日本社会で厳しい現実に直面する。南方体験が彼らにもたらすものは戦時下に南方にいる不安だけではなく、戦後の日本に居場所がない自分、虚無感、戦没者に対する罪責感である。

さらに、「荒野の虹」と「浮雲」で林は、南方における日本人男性と女性の恋愛を通して、南方を人間の理性が失われるところとして表象している。理性が失われることが本能の目覚めかあるいは抑制かという点に関する認識の違いによって、ゆき子と富岡の南方体験に対する認識に差が生じ、これが小説を悲劇的な結末に導く根本的な要因になっている。

第六章は佐多稲子を取り上げる。戦時下に佐多は三回にわたって戦地を慰問している。一回目は、一九四一年九月六日から二九日まで「銃後文芸奉公隊」の一員として中国東北部（満州）で慰問と公演を行った。二回目は翌一九四二年五月、軍当局の計画で新潮社の『日の出』特派記者として約一ヶ月間、上海、南京、蘇州、漢口を慰問した。三回目は、それから四ヶ月後の一九四二年十月から一九四三年五月にかけて、軍の徴用による占領地視察のためにシンガポール、スマトラ、メダンへ赴いた。

戦後、佐多は戦地慰問による「戦争協力」の問題にこだわり、自らの戦争責任を剔抉することを課題とした。佐多の戦地慰問に言及した先行研究は、中国慰問と南方慰問を一つの全体として扱っているものがほとんどである。しかし、同じ戦地慰問とはいえ、中国慰問と南方慰問の内実は、戦況や佐多の状況によって違う様相を呈している。そのため、本章では佐多の南方体験を対象として、戦地慰問と女性解放思想への屈折の中で、南方体験がどう機能しているのかを探る。佐多は戦後、自身の中国慰問を振り返って、当時は「戦争の感傷性に溺れ」て、それを戦争協力とは思っておらず、「むしろ自分を危険なところまで運び、そこで兵隊と共に泣いてくるという経験の上で、一つの成すべきことを果したかの感じさえあった」（「自分について」一九五六年六月）と述べている。しかし、これが後の南方体験のときになると、状況は一変する。佐多がシンガポールへ赴いた一九四二年十月末にはすでに軍政が敷かれており、彼女自身も「まるで旅行者の見物に過ぎなかった」と振り返る。中国慰問時は戦争協力であると十分認識していなかったが、南方慰問時には戦争協力と彼女自身も認めざるを得ない状況であった。南方滞在期間の体験を題材に

書いた小説「挿話」（『新潮』一九四三年七月）と「髪の嘆き」（『オール読物』一九四三年九月）で、佐多は肌と髪の色から日本人の南方における絶対的指導者としての地位と優越意識を肯定的に描いている。南方体験によって佐多の屈折した心境が、本格的に戦争協力へと傾いたといえる。

また、佐多の女性解放思想も戦地慰問を通じて変容し続けた。本章では『女性の言葉』（高山書院、一九四〇年十月）、『続女性の言葉』（高山書院、一九四二年一二月）、先に言及した「挿話」と「髪の嘆き」を対象として、佐多の女性解放思想の変容について確認する。佐多は南方作品に至って、当時の国家総動員法下における女性能力活用政策に迎合するようになり、「日本婦人の美徳」は良い妻、良い母、夫に従順、働くなどの女性への期待となって変質を遂げたといえる。

そして、戦後に佐多が戦時下における自身の行為を振り返って作品を書く時、被害者に対する「罪の意識」よりもプロレタリア文学作家たちに対する「恥の意識」の方が強いことも、戦地慰問をめぐる葛藤と深く関係している。このように、戦後何十年にもわたって佐多を苦しめた戦争責任の問題は、佐多稲子という一人の人間が、戦争によって一国民とプロレタリア作家に引き裂かれた不幸な結末だったのである。

以上が本論文の構成と概要である。本研究の意義は、従来の南方徴用文学研究では看過されてきた作家と作品、特に戦後の作品に焦点をあてて、戦時下の作品と比較分析を行い、各作家における南方徴用体験の意味と戦後の創作において果たした機能を究明することにある。これによって、日本占領下における南方徴用文学の持つ新たな一断面が提示できると思われる。

# 第一章

## 北原武夫における南方徴用――「想念」をめぐって――

### 1　はじめに

中国との全面戦争に突入した状況下で「国家総動員法」に基づく「国民徴用令」によって一九四一年一一月、すなわち太平洋戦争が始まることになる一ヶ月前、文学者、音楽家、画家、映画・演劇人、さらに新聞記者などに「徴用令書」が届けられた。兵役の召集令状である「赤紙」に対し、徴用令書は白色だったため「白紙」と呼ばれていた。彼らは甲・乙・丙・丁の四組に分けられ、甲組はフィリピン、乙組はビルマ、丙組はマレー、丁組はジャワというかたちで南方に派遣されることになった。一九四二年一月二日、「徴用令書」を受けたジャワ派遣組の北原武夫、阿部知二、武田麟太郎ら文化人たちは、東京の品川駅から軍用列車に乗り込んだ。瀬戸内海を通って台湾の基隆、台北を経て、三月一日未明ジャワ島に上陸した。当初三ヶ月は要すると目されていた「ジャワ攻略作戦」は、九日間という短期間で蘭印軍の無条件降伏をもって終結した。

宣伝班の任務について、北原が派遣されたジャワの宣伝班班長であった町田敬二は、「占領の住民に対する宣伝宣撫、対国内報道はともかくとして「作戦軍将兵の啓蒙」という困難な一項目が伏在していた」[8]と述べている。つまり総括的には、（1）対占領地宣伝、（2）対敵宣伝、（3）対軍隊宣伝の三つの主任務があったことになる。より具体的には、（1）として日本語教育の普及、映画の検閲、演劇などが挙げられる。（2）の主な手段はラジオ放送である。たとえば、阿部知二は対オーストラリア向けの英語放送の原稿チェックに携わっていた。（3）は新聞発行を中心とする。ジャワ方面の場合、「皇軍将兵の士気鼓舞」を目的として、まず『赤道報』が一九四二年三月九日に発行された。第二二号（四月三日）から『うなばら』と改題され、一二月六日発行の第二三〇号をもって終刊となった。同年四月二九日にはインドネシア語新聞『アシア・ラヤ』の第一号が発行された。一一月には朝日新聞社がジャワ地域の新聞発行に関わることになり、一二月八日から『ジャワ新聞』の発行を開始する。翌年一月一日には、インドネシア語と日本語を併記したグラビア誌『ジャワ・バル』（ジャワ新聞社）が月二回のペースで刊行を開始した。

8　町田敬二『ある軍人の紙碑』（芙蓉書房、一九七八年一一月）一六七頁。

いずれもジャワ（インドネシア）方面に派遣された徴用作家の主要な活動舞台である。そうした舞台で活動した徴用作家の一人が北原武夫であった。一九〇七年生まれの北原は、一九四二年三月一日から一一月中旬までジャワに滞在し、『うなばら』や『アシア・ラヤ』の編集、アメリカ製映画の検閲などに携わった。

従来、リベラリストと目されていた北原は徴用前、戦争文学に関してどのように考えていたのだろうか。ここで、北原が徴用される三年前に「現代の開花――戦争文学に関して」という題で『文體』（一九三八年一二月号）に発表したエッセイを引いてみたい。

> われわれは事変発生以来、戦争を直接に見て来たために、果して幾人の文学者が寡然になることを知って帰って来たかを、現に見ている。そしてその一面に、戦争を直接に見て来たために、如何に多くの文学者が軽々しく昂奮して帰って来たかも、われわれは見ている。この後者の人々は、戦争に何を見て来たのか。彼等の多くは、そこに「大事件」を見て来たのであって、「事実」の世界を見て来たのではない。彼等の昂奮は、「大事件」を見て来たがための昂奮なのであって、それが戦争という形で表われているために一見厳粛に見えるようなものの、現前の事実の事件的な形（傍点北原――筆者注）に昂奮している点では、鉄道事故や大火災の如き一椿事の素朴な目撃者の昂奮と、質に於ても少しも異なってはいないのである。（『北原武夫文学全集　第四巻』講談社、一九七五年二月、七一頁）

北原はそうした人々を「素朴な現実主義的な人」と呼ぶ。彼らは目の前の「事実の世界」の迫力に圧倒され、「事実の世界」の本質は見ていない。北原によれば、「文学の迫真力（リアリティ）とは、眼に見えるように描くことにあるのではなくて、むしろ考えさせるように（傍点北原）描くことにある」（七一頁）という。では、北原は南方で何を見てきたのか。「大事件」であったろうか、それとも「事実」であったろうか。北原は徴用中に数多くの報告文を書いた。また、帰国後の一九四三年九月には、『読売新聞』『文芸』『文学界』『新潮』『改造』『うなばら』といった諸紙・誌に発表した文章をまとめて、単行本『雨期来る』（文体社）として刊行する。さらに、戦時下に『うなばら』（一九四二年九月）に発表した小説「カリオランの薔薇」を改稿し、『群像』（一九五一年一月）に発表する。これらの南方徴用作品のなかで、北原は何を考え、また何を「考えさせる」のであろうか。本章では、北原の徴用中及び帰国後に書いた報告文、そして「カリオランの薔薇」の戦後改稿について、北原における「大東亜共栄圏」構想の

受容を紹介したうえで、徴用文学の戦後という問題として検討してみたい。

## 2　北原武夫における「大東亜共栄圏」構想の受容

北原は「大東亜共栄圏」構想をどのように受けとめていたのだろうか。

「大東亜共栄圏」を宣撫する言説において反復されるのは、「同じアジア人」や「アジアは兄弟」といった表現である。そうした親密性を強調することが、徴用作家の文化工作の一つであった。北原も、そのような紋切り型の文章を書いている。「新生ジャワ」（初出『読売報知新聞』一九四三年八月）では、「蘭印軍」が「「日本軍は野獣だ、女子供は避難せよ」云々の三箇條から成る宣伝文を盛んに流布させてゐた」にもかかわらず、「いきなりジャワに敵前上陸した皇軍を、原住民がなぜそんなに歓迎したのか」と問いかけたうえで、次のように続ける。

> 今になつて沁々と僕は思ふのだが、人間が個人的に深く結びつく場合と同様、日本人とインドネシア人の間には何か民族的な直覚力のやうなものが潜み、それが皇軍上陸と同時に、触発されたのに違ひないと思ふ。
>
> ジャワの原住民は、深く日本人を信じてゐる。論理的な穿鑿や打算からではなく、何かもつと自然な気持ちから、日本人を崇敬してゐる。（木村一信（編）『南方徴用作家叢書12　ジャワ篇』龍渓書舎、一九九六年十月、八四頁。以下、『南方徴用作家叢書12』と略記）

「個人的に深く結びつく場合と同様」の「何か民族的な直覚力のやうなもの」という表現や、「自然な気持ち」という「自然」の強調は「同じアジア人」の変奏にほかならない。それは「大東亜共栄圏」言説における紋切り型の採用でもあった。ところで、北原は帰国後に刊行したジャワ従軍記『雨期来る』（文体社、一九四三年九月）に収録された「インドネシア人の性格」（初出誌不詳）で、彼らの「素直・素朴」について次のように述べている。

> 現在インドネシア人は、僕等日本人を崇敬し唯々諾々として、すべてのことに従つてゐるが、それを彼等が生来素朴で素直だからだと解したら、速断に失しはしないかと思ふ。いろいろの意味で原始的で程度が低いといふ点で、彼等がその心情の裡にまだ十分素朴であり得る可能性を保持してゐるとは言へよう。が、しかし、尠くとも僕が感じ得た限り、彼等は決して素直だとは言へぬ。（『雨期来る』一四八頁）

前後の文脈が異なるとはいえ、「新生ジャワ」で強調された「自然な気持ち」が、ここでは「決して素直だとは言へぬ」と否定されている。また、同じ「上陸」時の印象についても、「ジャワの話」（初出『新生南方記』一九四四年四月）では、微妙にニュアンスの異なる語り方になっている。

いざ敵前上陸してジャワの地を踏んでみて、僕等は驚いた。全く、予想を裏切られた。彼等が、僕等を嫌つてゐたからか、案に相異して憎んでゐたからか。いや、さうではない。彼等インドネシア人は、僕等を好いてゐた。それは、よかつた。が、彼等はあまりに僕等日本人を好きすぎ、中には、単に人間である僕等を神や仏のやうに思ひ、実際にもそのやうな形式を以つて僕等を遇した。そのことが、僕等を面喰らはせ困らせたのである。（『南方徴用作家叢書12』一二一頁～一二二頁）

ここでは「面喰らはせ困らせた」という表現だが、それから一週間後を描いた「ジャカルタ入城日誌」（初出『文学界』一九四三年二月）になると、沿道で日章旗を振って歓迎するインドネシア人について次のように述べている。

かういふインドネシアの子供や、それから先刻の農夫などが僕等に向つてするお辞儀や敬意の表し方は、セランの町でも実にしばしば出会つたが、僕はその度に、どういふわけか何か厭な不愉快な気がしていけない。（中略）何かそんな風が気がして有難迷惑といふよりはもう少し不快に近い気持なのだが、しかし、さういふ風なお辞儀に出会ふたんびに、特に子供に対しては、挙手の礼をしたり手を振つたりして車の中から答へる。（『雨期来る』六五頁）

ここでは、インドネシアの人々の歓待に対して、はっきりと「厭な不愉快な気」や「不快に近い気持」が記されている。「新生ジャワ」で強調されたインドネシア人と日本人の親密性から距離があることは確かであろう。それは一見すれば矛盾しているようにも見える。その距離や矛盾は何を示唆するのだろうか。

北原に「自然な気持ち」の交流への全面的な信頼があれば、「厭な不愉快な気」や「不快に近い気持」が派生する余地はあるまい。「厭な不愉快な気」や「不快に近い気持」の表現は、「自

然な気持ち」の交流といった記述が、北原による紋切り型の使用であったことを示唆している。こうした紋切り型の言説は、それを支える戦時下では「大東亜共栄圏」構想を支えるものとして強力に機能する。したがって、種々のテクストにおいても反復されている。しかし、状況と結びついた言説であるだけに、その状況を失ったとき、急速に退色することにもなる。北原のテクストにおいて、「自然な気持ち」を扱う言説と「厭な不愉快な気」を扱う言説の行方を問うことは、北原における「大東亜共栄圏」構想の受容の内実を問うことになるだろう。そして、「自然な気持ち」と「厭な不愉快な気」との間にある距離や矛盾を考えるうえでは、メディアとの関係も視野に入れる必要がある。

すでに記したように、「新生ジャワ」は一九四三年八月四日の『読売報知新聞』に掲載された。『読売報知新聞』とは、新聞統制で報知新聞社を吸収合併した読売新聞社発行の新聞である。周知のように、戦時下の新聞統制は言論統制の一つの表れであり、メディアを同調させて総力戦に組み込むことを目指していた。日本人とインドネシア人の親密性を焦点化する「新生ジャワ」が掲載されたのは、その新聞である。それに対し、「ジャカルタ入城日誌」の初出誌は『文学界』（一九四三年二月）である。ともに戦時下の検閲を受けたが、一般の出版物と新聞では検閲に差異がある。前坂俊之『太平洋戦争と新聞』（講談社、二〇〇七年五月）は、太平洋戦争下の言論統制は「それ以前の日中戦争下とは比較にならない厳重な言論統制」であったとして、「治安・警察関係」、「軍事、国防関係」、「新聞、出版関係」、「郵便、放送、映画、広告関係」に関する多くの法令や規則を指摘したうえで、次のように述べている。

> 以上、二六もの言論統制の法令があったが、新聞に限るとさらに、内務省差止事項、陸海軍・外務省による禁止事項、宮内省の申し入れ、情報局懇談事項、大本営発表、指導原稿でしばられているほかに、検閲も二重三重に行われ、情報局、内務省、陸海軍報道部、航空本部、警察庁検閲課でチェックされた。（三八九頁）

読者の多い新聞は、一般出版物より検閲が厳しい。それに比べると、『文学界』のような一般出版物の読者は限られる。そうしたメディアの差異も、発言を左右する一因になり得よう。同じ一つの場面を描く場合、検閲の厳しい新聞より、一般出版物の方が、本音を忍び込ませやすいとも言えよう。メディアの差異も、「自然な気持ち」と「厭な不愉快な気」との距離や矛盾を派生させる一因ではあるまいか。

「大東亜共栄圏」言説に対する北原の態度を考えるうえでは、評論「戦いの厳粛さについて」

（初出『三田文学』一九四四年四月）の次の一文も参照しておきたい。

八紘為宇という大精神は、言うまでもなく一つの思想である。（中略）多くの学者はそう解釈し、努めて表現を練り、論理を構築し、専ら思想としての態を整えようとした。が、何が出来上ったか。押しつけがましく記紀の文句を援用した見掛けだけは立派だが、説得力も迫真力もなく、況して戦闘力などは微塵もない空中楼閣が出来上った。（『南方徴用作家叢書12』一三四頁）

北原は「大東亜共栄圏」の目的を批判しているわけではない。批判しているのは「思想戦」という方法の説得力である。「思想」より「実践」を重んじる北原は、一人でも多くの敵を殺し、一機でも多くの敵機を撃墜する具体的行動が重要だと述べる。その北原は「大東亜共同宣言」について次のように語っている。

大東亜の共同宣言とは、言うも愚なことだが、その意味を宣伝し、世に広く知らしめれば知らしめるほど意義が深まり効果が挙るというようなものではあるまい。

（中略）

人類平等の平和とか幸福とかという言葉は、人間刻苦の厳しい事実から観念を抽象し、論理で捏ね上げて作り上げた砂上の楼閣に過ぎない。日本人は日本人のやり方でしか幸福にはなれないし、マライ人はマライ人のやり方でしか幸福にはなれまい。（『南方徴用作家叢書12』一三六頁～一三八頁）

「砂上の楼閣」という表現は「大東亜共栄圏」の理想に対する痛烈な批判になっている。ここから、北原が「亜細亜は一つ」「大東亜共栄圏」といった掛け声を一種の建前として捉えていた一面があるといえる。建前としての掛け声は、まさに掛け声として、一種の建前として受容されるだろう。そうした受容の一端は、北原がジャワでの見聞を記した『雨期来る』の「帰路」というエッセイにも表れている。日本とインドネシアの関係が話題になったとき、「一人の画家」が次のように語る。

「内地々々とよく皆は言ふんだけれど、僕はあれァ可笑しいと思ふね。ジャワだつて君、今は立派な内地だぜ。新聞だつて出てゐるし、地域的には外地かもしれないが、文化的

には君、立派な内地だよ。第一もう大東亜共栄圏といふかういふ時代になつてだね。今更内地とか外地とかさういふ区別をつけるといふそのこと自体が可笑しいぢやあないか。僕はさう思ふんだ。ねえ、さうだらう？」（『雨期来る』二四六頁～二四七頁）

「大東亜共栄圏」の「時代になつ」たから、「内地とか外地とか」の「区別をつける」のはおかしいというのは、いかにも正論である。しかし、その正論はあくまで建前に過ぎない。それは、「区別」が議論の対象になっているという、まさにそのこと自体が示している。「もう大東亜共栄圏」の「時代」で「亜細亜は一つ」というのも建前なら、「内地とか外地とか」の「区別」もないというのも建前なのである。それを聞いていた「僕」（北原）は、「いかにもこの人らしい意見」と感じる。それは画家が「大東亜共栄圏」の信奉者らしいというのではあるまい。むしろ、「可笑しいぢゃないか」「ねえ、さうだらう？」という画家の発言に、建前を建前で切り返すことで生じる皮肉にリベラルな響きを感じているのであろう。『雨期来る』によると、徴用期間で北原と付き合いのあるジャワ派遣宣伝班の「画家」は少なくとも、洋画家の南政善と漫画家の小野佐世男がいる。「一人の画家」は誰を指しているのかはここでは特定できないが、木村一信は「漫画家の〈ジャワ〉――小野佐世男をめぐって」（前掲『昭和作家の南洋行』）のなかで、小野の画について次のように指摘している。

総体として、小野の描き出したジャワの人人（ママ）の暮らしぶり、風俗、自然など（中略）は、歴史の貴重な一コマを写し出したものとなっているし、異文化を生生と捉えた芸術的資料とも言えよう。庶民的正義感にとどまるものではあっても、支配・非支配によって人間をわけへだてしないリベラルさ、自由さが、小野のそれらの絵の中からは感じとれるのである。（二七三頁）

ここで詳しく論じるつもりはないが、「支配・非支配によって人間をわけへだてしない」から、「一人の画家」は小野佐世男を指している可能性があると思われる。先に見たように、北原も、そうした建前の一面は熟知していた。そのため、「さうだね」と応じてもよかった。しかし、直後に北原を襲うのは次のような反応であった。

不意にある想念が僕の中に沸き上つて来た。それは、単に僕にとつても思ひがけなかつたばかりでなく、その当の僕自身の虚を衝くやうな力を持つてゐた。僕はそれで、自分

にもまだはつきりと形の掴めぬその想念を、一つ一つの言葉ごとに自分自身で手繰つてゆくやうにしながら、殆んど無我夢中の勢で言つた。「さうぢやあないね。僕はさう思はない。どんなことがあつても、内地はやつぱり内地だ。単に地域的な意味の内地ぢゃァなくて、外地に対立するものとしての内地だ。それァ東亜共栄圏といふ意味では東京もジャワも同じ一つの環としてつながつてゐるが、東京もジャワも単に同じ一つの環だといふんぢや意味はない。東京は東京として、つまり外地に対する内地として、さういふ意味でつながつてゐるものだし、またさういふ意味で僕等もつながなけれァならない。僕はさう思ふね。（『雨期来る』二四七頁～二四八頁）

右の引用文について、河西晃祐は「北原は「大東亜共栄圏」構想からも距離を保っていたが、その一方でインドネシアと日本の位置付けに関しては、植民地―宗主国に類する形態ととるべきだと考えていた」[9]と指摘している。実際、「東亜共栄圏と言ふ意味では東京もジャワも同じ一つの環」という表現は、画家の発言と同じ一種の建前である。しかし、その建前の背後には、「同じ一つの環だといふんぢゃ意味はない」という本音があり、「東京は東京として、つまり外地に対する内地として」控えるという構造がある。この発言は、建前としての「東亜共栄圏」とその背後に本音としての「本国と植民地」が控えていることを示している。「本国と植民地」関係を潜ませた「亜細亜は一つ」という「大東亜共栄圏」言説の二重構造は、「僕」のその後に続く発言からも明らかである。

このジャワを見てみ給へ、和蘭がこのジャワといふ土地をどんな風な具合に作り上げたかを見てみ給へ（中略）どんな山ン中に行つたつて自動車道路は開けてゐるし、住み心地のいい住宅やホテルは建つてゐるし、娯楽施設は完備してゐるし、それに役人や学者は本国より一流の人間が此方に来てゐるし、まるで君、ここは植民地どころか往生楽土だよ、もとの和蘭にとつては。それこそ内地も外地もあれァしない、寧ろ此方の方がずつと内地だ。そんな国は君、国家として決して一流ぢゃあないよ。だから和蘭といふ国は、こんなにあつけなくがらがらつと滅びちゃつたんだと僕は思ふんだ。本国と植民地、

9　河西晃祐「徴用作家北原武夫・浅野晃・武田麟太郎の「インドネシア」：戦時期「南方」観の一考察」（『紀伊井史学』第21号、二〇〇二年三月）二七頁。

といふ言葉が不穏当だとしたら、内地と外地といふものは、やつぱり何処までもさういふものとして存在していなきゃァ駄目だ。（『雨期来る』二四八頁）

「本国と植民地、といふ言葉が不穏当だとしたら」とあるが、「不穏当」なのは「亜細亜は一つ」という「大東亜共栄圏」の建前に抵触するからである。つまり「不穏当」であるだけに、隠された本音を語っているのである。こうした「大東亜共栄圏」言説の二重構造は、「亜細亜は一つ」と唱える人々に多かれ少なかれ共有されていた。先に見たように、インドネシアの人々の歓待に対し、北原が「厭な不愉快な気」や「不快に近い気持ち」を覚えるのも、この二重構造の自覚があるからであろう。その二重構造については、「本国」の側だけでなく、「植民地」の側でも、いっそう鋭く察知されたであろう。「外地」＝「植民地」の国々では、「大東亜共栄圏」の現実が歴史と時間の篩にかけられるとき、そうした二重構造性そのものが追及されることになる。

したがって、画家との談論で特異なのは、「大東亜共栄圏」言説の二重構造性と本音を示している点ではない。戦時下において、それを公表することには多少なりとも勇気はいったにせよ、少なくとも言論人にとっては暗黙の共有事項だったであろう。画家との談論で注目すべきは、そうした暗黙の共有事項である本音が、自分の内側に、自分でも気づかないうちに「想念」として棲みついていたという点である。この画家との談論の場面で、作者自身に発見があったとすれば、その点をおいて外にない。「僕にとつても思ひがけなかつたばかりでなく、その当の僕自身の虚を衝くやうな力を持つてゐた」と語られ、「自分にもまだはつきりと形の掴めぬその想念」と表現されるのを見れば、この「想念」は、「大東亜共栄圏」言説の二重構造という暗黙の常識それ自体ではない。暗黙の常識として対象化していた言説が、「自身の虚を衝くやうな力を持って」内面化されてしまっていたという事態のなかで、その内面化の経緯やありようの不透明さが「想念」として意識されている。

端的に言ってしまえば、自分でも気づかないうちに内面化されていたナショナリズム的心性である。ナショナリズム的言説を対象化しているはずの認識の背後にも潜在し、情報知のような認識だけでは、その奥行きを見極めることが難しい心性である。したがって、その「想念」は、「一つ一つの言葉ごとに自分自身で手繰つてゆくやうにしながら、殆んど無我夢中の勢で」語られなければならない。

北原に限らず、徴用作家という体験を通じて、その後の創作活動に繋がる発見があったとすれば、自分のうちにまぎれもなくナショナリズム的心性に通じる「想念」が潜んでいるとい

うことの発見であっただろう。

ところで、この「想念」という言葉に注目するなら、北原は徴用体験を通じて発見した、もう一つの「想念」を描いている。この場合も、ある些細なことを契機に、ある「想念」が突然に彼を襲うという点で共通している。以下に、もう一つの「想念」を確認するまでの経緯を含めて略述する。

徴用作家たちの宣伝班としての仕事は、日本語教育の普及、映画の検閲、演劇などである。作家がこうした文化工作をどのように評価していたのかは、彼の南方体験を考察するときに見逃してはならない一側面である。北原の文章によると、彼がジャワで携わっていた仕事は、映画検閲、新聞の編集、従軍記の執筆などであった。北原はこうした宣伝班の文化工作に対して批判的であった。「ジャワの文化工作」（初出『新潮』一九四三年三月）には次のようにある。

> 文化工作というものは、そういう種類の一つの専門の仕事であって、作家とか画家とか新聞記者とかという種類の人間（つまり今度徴用されて宣伝班というものを構成したところの僕等のような人間）がやるべきではなく、またやったところで大した効果は上りはしない。僕は自分でやってみて、実にそのことを痛感した。（『南方徴用作家叢書12』六三頁）

また、「現代精神の行方」（初出『文学界』一九四三年五月）でも、自分たちが行っている文化工作の効果についての疑いを、さらに明確に述べている。ジャワ戡定の直後、華僑と原住民とが仲良く手を握っているポスターを作らせたが、絵が抽象的すぎる、あるいは具体的すぎると言われ、不許可になった。それゆえ、北原は文化工作が「極めて至難な政治家の仕事」であり、画家や小説家にはできないのだと主張する。その北原は、帰還後の日本の状況について次のように語っている。

> ところが、内地に帰つてきてみて、身辺を見回してみると、僕等が現地でやりかけて止めざるを得なかつたポスター書きの仕事が、純然たる文学者の問題になつてゐる。（中略）本来は政治家の仕事であり、且つ巧くいつたところでせいぜいその成果の尻尾にぶら下ることしか出来ぬやうな仕事に、文学者が躍起となつてゐる。或はまた、かかる危急な国歩艱難の秋に当つて、凡そ日本の国民である以上国民として当然覚悟し挺身しなければならぬ筈の極く当たり前の覚悟が、今更らしく文学者の覚悟だなぞと言はれてゐ

る。

これはどういうことであらうか。（『南方徴用作家叢書12』八九頁～九〇頁）

北原が「ポスター書きの仕事」のような文学者の戦争協力に疑問を抱くのは、文学者の使命は文学に向けられるのではないかと主張したいからである。右に見た二つの引用文とほぼ同時期に書かれた評論「薔薇について」（初出『文芸』一九四三年五月）は、ジャワで見た薔薇の花の記述に始まり、その花に託しながら、自らの文学観を記している。宿舎の卓上に生けた薔薇の花をかなり長い間眺めている「僕」の中に、「ある強い激しい想念」がふと湧いてくる。

僕は思はずそれを自分の口に出して、一人でつぶやいたものだ。僕は、言ひ難い確信で、身体が疼くやうな気がした。――全くだ、冗談ぢやない。一輪の薔薇の美しさを描くことは男子一生の仕事に足るのだ、と。（『南方徴用作家叢書12』九六頁）

また、薔薇の美しさから次のように考えてもいる。

薔薇の美しさなどといふと、寔に空虚に聞こえる。殊に薔薇の美しさを描くことが生命を賭するに足ることだなどといふと、今日のやうな激しい実行の時代には一層空虚に聞こえる。作品の美的価値だけに専心する時ではない、実行の世界でも芸術家たる働きを示すことが今日の文学者の務めだ、などといふ言葉が白昼通用してゐる所以だが、実行の世界で芸術家たる働きを示すとは一体どういふことか。（『南方徴用作家叢書12』九九頁）

このように北原は、作家の生きているべき世界は言葉で築き上げた架空の表現世界だと主張する。「文化工作」のような実行の世界における作家の働きに対し、それは政治家の仕事であると疑念を示している。

ここには、戦後において政治と文学論争として顕在化する問題が、戦時下的な様態として先取りされている。政治的視点からは「空虚」と批判されかねない局面において、北原は「生命を賭するに足ること」としての文学を「想念」として見い出している。しかし、それは結果として「一輪の薔薇の美しさを描くこと」に過ぎない。そのため、「実行の時代には一層空虚に聞こえる」のであり、それだけに文学の言葉は「一つ一つの言葉ごとに自分自身で手繰つて

ゆくやうにしながら、殆ど無我夢中の勢で」語らなければならない。

徴用体験が作家にもたらしたものとしては、多くのものを挙げることができるであろう。北原の場合、自らの内に潜むナショナリズム的心性と文学の本質という二つの「想念」は、徴用という現実や「実行の時代」という状況から浮上してきた一面はあるにせよ、どのような状況においても作家とその創作の本質を問う問題である。徴用体験の核心が、そのような「想念」の発見や確認にあったとすれば、その行方を問うことは、徴用文学研究の大きな課題になるはずである。とくに戦時下から戦後への変化は、ナショナリズム的心性においても、また、政治と文学との関係から問われる文学の本質においても、それを問う地平が大きく変動している。そのとき、くだんの「想念」は、どう語られるのだろうか。

## 3「想念」の行方――「カリオランの薔薇」に即して

北原武夫の徴用体験と直接的に関わる小説として、一九四二年九月二〇日に陣中新聞『うなばら』に掲載された「カリオランの薔薇」と、敗戦から間もない一九四六年一月の『新生』に発表された「嘔気」がある。「カリオランの薔薇」は、初出に若干の字句修正が施され、ジャワ従軍記『雨期来る』（文体社、一九四三年九月）に収録された。さらに、戦後になって加筆と改稿がなされ、『群像』（一九五一年一月）に掲載されている。

ジャワを舞台にした「カリオランの薔薇」は、「私」が「カリオラン高原のホテル」に泊まっていた二日間の話である。ジャワの案内記を書くために来た「私」は、メラピの火山に憧れ、旅のスケジュールを変更して火山の中腹にあったホテルに泊まることになる。しかしながら、ホテルは古くて景色もあまり良くない。何よりも最も楽しみにしていたメラピの火山を眺めることもできないので、がっかりする。ホテルでは、マネージャーの「あまり綺麗とは言へない若い」混血人の姉妹と出会う。ある日、妹の配慮で、ホテルのジョンゴス（下僕）が「サルタン王宮」での踊りに招かれていた「私」に、「真紅の、大輪の薔薇」を持ってくる。彼女の「折角の餞け」である薔薇だったが、「私」は「気兼ねや恥ずかしさのため」に胸に挿す勇気が出ずに手に持ったまま赴く。宴が終わり、待たせてあった車に戻った「私」は、置き忘れていた薔薇の匂いに噎せ返る。ホテルに向かう途中、「私」は薔薇をくれた彼女のことを考え、半ば萎れて少しぐんなりとした薔薇を「急いで胸に挿し」た。

書誌については前述の通りであるが、北原は戦後改作版の末尾附記で次のように述べている。

本篇は曽つて昭和十七年十月頃、当時ジャワで発行されていた陣中新聞『うなばら』紙上に、同じ題下で、このうちの一部約二十枚に当たる部分を発表したが、当時軍の検閲のために書けなかった部分を加え、新たに書き改めたものであることをお断りして置きます。（作者）（初出『群像』一九四六年一月。引用は『北原武夫文学全集　第二巻』二九四頁）

「カリオランの薔薇」をはじめて『うなばら』に発表したのは一九四二年九月であり、右の「十月頃」とは恐らく北原の記憶違いである。しかしここでは、「当時軍の検閲のために書けなかった部分を加え」とある点に注目したい。右の文中には「陣中新聞『うなばら』紙上」とあるが、大きな本文異同がないため『雨期来る』所収本文（以下、戦前版）を採用し、『群像』掲載の本文（以下、戦後版）との異同を検討することで、具体的に何が加筆されたのかを確認し、検閲への配慮とその意味を探ってみたい。

細かな修正箇所を除けば、戦後版には大きな加筆が三箇所ある。

一つ目は冒頭で、島の案内記という仕事に対する不満を述べた部分である。

ジャワ全島をたった一人での自動車旅行、というと何か陽気で贅沢のようにも聞こえるが、軍からの命令でジャワ全島の案内記を書くためのこの旅行は、始めてみると興味のない土地でも詳しく見て廻らなければならないという徒労のみ多い疲れもあり、それに何処まで行っても果しなく変りのないジャワの風物の単調さも手伝い、一ヶ月以上も一人で見知らぬ熱帯地を経めぐっている孤独から来る旅愁が、それでなくとも大分前から募っていた内地への強い郷愁に煽られて、私の中で様様な思いごとを燻らせていた。（『北原武夫文学全集　第二巻』二七八頁）

この部分は、戦前版には「僕がただ一人でジャワ全島を旅行してゐる時のこと」（『雨期来る』二〇八頁）としか書いていない。前述したように、北原は宣伝班の文化工作が「極めて至難な政治家の仕事」であり、画家や小説家では効果が上がらないと批判しているが、それはあくまでも間接的な批判だと言えよう。それが戦後版では、「軍からの命令」「徒労」「疲れ」「風物の単調さ」「孤独」などの言葉が示すように、宣伝班の文化工作の徒労感が表明されている。そうした批判の直接性が「当時軍の検閲のために書けなかった部分」になるだろう。しかし、それ以上に注意していいのは、「興味のない土地」や「ジャワの風物の単調さ」といった表現

である。北原の作品のみならず、戦前の徴用文学に横溢していたのは、豊かな自然や興味深い風俗に満ちた南方への視線であり、それが邂逅の驚異や感動とともに生気ある描写とともに描かれていた。

ところが、戦後版では、そうした南方の自然や風俗それ自体ではなく、そこに注がれる視線そのものが生気を失ったものとして記されている。この差異から何が導かれるのだろうか。大きく二つの可能性が考えられる。一つは、戦時下の南方への生気を帯びた視線が、韜晦の所産であったという可能性である。もう一つは、戦後版の生気を失った視線こそ、戦後における韜晦の一つのありようという可能性である。しかし、これはどちらかを二者択一的に選べば済むという問題でもあるまい。戦前版の徴用文学における生気を帯びた南方への視線が、戦後において対象化されたとも見なされるし、かつて自己のうちから噴き出した「想念」が、そのようなかたちで凝固したとも捉えられるからである。

二つ目の加筆箇所は、ホテルで泊まった最初の夜に、子供の泣き声と子供をあやしている女の靴音を聞く場面である。戦前版には、この場面は全くない。ただ、翌日に友達からマネージャー姉妹の話を聞き、昨夜泣いていた子供をあやしていた女は、その妹の方だと気づいたと書いてあるだけである。それに対し、戦後版では、この場面を長々と詳しく描いている。

> 一体誰が、どんな女が、何のためにそんな歩き方をしているのだろう？　私は灯を消した部屋の中で、ベッドに横になったまま、恰度私の足の先の向いている方向に聞こえるその靴音に、なおもじっと耳を澄ました。すると、不意に、これもそう高い声ではなかったが、何かむずかり泣くような、弱々しくかすれた、明らかに赤ん坊のそれと分かる幽な泣き声が聞こえ、それと同時に、それに向かってなだめるようにしきりに何か言いかけている低い女の声が、水音のような静かさで、風の音の合間に切れ切れに聞こえて来た。（『北原武夫文学全集　第二巻』二八八頁）

この場面の加筆について、土屋忍は次のように指摘している。

> これは単に、後で知ることになる話――オランダ人男性に騙されて身籠るが捨てられ、それでもまだそのオランダ人の写真を飾っている「通常でない心の状態にゐる」現地女性の身の上話――との関連を示唆する一種の伏線として付け加えられた箇所だと思われる。（『南洋文学の生成訪れることと想うこと』新典社、二〇一三年九月、三〇四頁）

土屋論のように読めば、この加筆箇所は伏線の機能を持っている。しかし、この部分は単なる伏線というより、この小説のもっとも核心的な光景であり、本質的な機能を帯びている。戦時下の「実行の世界で芸術家たる働きを示す」のは「一輪の薔薇の美しさを描くこと」である、と北原は書いていた。そして、この「カリオランの薔薇」は、「私」が現地の女から与えられた「一輪の薔薇」を恥ずかしく思い、そのために忘れられ、半ば萎れた「薔薇」をもう一度胸に挿す話なのである。北原の「文学」が「薔薇」の挿話に託されていることは容易に看取される。そのとき一般的な文学論の文脈としてではなく、この小説の具体的文脈において「一輪の薔薇」は、何を象徴するのだろう。戦前版では、現地の女の好意といった不透明な印象しか残さない。しかし、戦後版でたどり直すなら、「一輪の薔薇」は、夜中のホテルで泣き続ける赤ん坊とそれをあやす女の影を揺曳させることになる。

北原は、戦争を遂行する「実行の世界」にとって、「一輪の薔薇の美しさ」とは「空虚」の代名詞に過ぎないと言う。そうした「実行の世界」においては、夜中のホテルで女が泣き続ける赤ん坊をあやす光景は、同じように、それを描くことに何の意味もない記述に見えかねない。せいぜい「伏線」扱いされるしかないような記述に見える。しかし、北原は、そういう「実行の世界」における「空虚」にこそ自らの文学を賭けていた。とすれば、その「空虚」をこそ注視する必要がある。

注目したいのは、夜中のホテルで泣く赤ん坊も、それをあやす女も、声や音は伝わるものの、その姿は想像されるしかないという点である。翌朝になって誰だったかは推測されるが、この場面では、あくまでも名称化されない不特定の対象である。「一体誰が、どんな女が、何のために」という表現などによって、読者も作中の「私」とともに想像行為を共有させられる点が、きわめて重要である。というのも、そうした対象は、小説のタイトルである「カリオランの薔薇」に通じるからである。カリオランは、小説の舞台になっている避暑地の名である。したがって、深夜のホテルで「私」が想像する女は、名称化するなら「カリオランの女」とでも呼ぶしかない。

「カリオランの薔薇」は、その「一本」が、「私」に羞恥を与え、「私」によって忘却される。さらにその忘却自体が、半ば萎びた「一本の薔薇」を見ることで想起され、そのときに「私」は、その「一本の薔薇」を胸に挿す。この「カリオランの薔薇」を「カリオランの女」と交響させるとき、どのような響きが聞こえてくるだろうか。カリオランのホテルの深夜の赤ん坊の泣き声、それを抱いて歩く女の足音と呟き。

羞恥と忘却された存在の想起としての「カリオランの女」は、日本人の「私」によって、戦場である「外地」の夜中のホテルで、泣き続ける「赤ん坊」を抱いて歩く名称を持たない一人の女として想像されている。そうであれば、この女は、特定の誰かではなく、カリオラン／現地／南方の女を表象する名称化されない女であり、そのことに積極的な意味がある。そして、「大東亜共栄圏」下の「実行の世界」にとっては、そのようなカリオラン／現地／南方の女こそ、ぜひとも忘却しなければならなかった「一輪の薔薇」であったろう。

このように見てくると、この場面は、やはり単なる伏線などではない。むしろ「一輪の薔薇の美しさを描くこと」に「文学」を見る北原にとって、この小説の試みの中心に位置し、きわめて象徴的にカリオランの薔薇／女が描かれていると言うべきである。夜中のホテルで女が赤ん坊をあやしているという、見ようによっては、とくに気にとめる必要もないことであるにもかかわらず、それにふれた私の心理が、「衝撃を受けたような気持ち」や「しいんと冷えてしまった」という過剰にも見える反応になっているのは偶然ではない。

赤ん坊？　私は、思いもかけず、衝撃を受けたような気持ちになった。誰とも、それからまた何者とも分からないけれども、もう間違いなく女と分るその靴音の主は、赤ん坊を抱いて歩いているのだ。こんな夜更けに、そして、それでなくとも冷え冷えと手足の冷えるこんな風の中を。何という無謀なことをする女だろう？

私は、つい先刻とはまるで違った注意深さで、闇の中になおも聞き耳を立てていたが、その私の心は、あたりの静かさと同じようにいつの間にかしいんと冷えてしまった。（『北原武夫文学全集　第二巻』二八八頁）

ここでも、強調されるのは「誰とも、それからまた何者とも分からないけれども」という名称化されない存在である。しかし、「間違いなく女と分る」その一人の女が「赤ん坊を抱いて歩いている」光景が、「こんな夜更けに」「こんな風の中を」という疑問符を潜在させた語り口を通じて、読者もそれを想像することを強いられる書き方になっている。

カリオランの薔薇／女は、「誰とも、それからまた何者とも分からない」無名性を帯びることで、いっそう忘却の対象となる。その忘却および忘却の想起に小説のアクセントが打たれているとするなら、そして、そのような存在に対する想像へと読者を誘うことにアクセントがあるとするなら、この名称化されない赤ん坊と女のイメージこそ、戦後版テクストの中心にある象徴的原景であり、後出の「オランダ人男性に騙されて身籠るが捨てられ」るこの妹の方の女

性や「私」自身が「或る若い女に子供を産ませ」た話は、むしろ、象徴的原景から派生する二つの具体的変奏の事例に近い。

二つの具体例のうち「私」の過去にまつわる話が、大きな加筆の三箇所目である。「私」は、小田中尉から、オランダ人男性に騙され妊娠し捨てられたこの妹の女性が、男の戦死後も、彼の写真を飾っているという話を聞く。そのとき「私」は「奇妙な、変に依怙地な、いじけた気持」、さらに「誰よりも私自身が情なく、そしてその上にどうにも救いようのない、暗い、陰鬱な気持」になる。そうした気持ちになるのは、次のような事情からであった。

それを聞いた私の方には、もう何処にも逃げ場のない、偶然の暗合という或る見えない何かの手で厳しく追いつめられたような、何とも言えない息苦しい思いで、その話はひびいたのだ。私は、その話の中の男がしたようにして、騙したわけではなかった。私は私の弱さと闘ったけれども、どうにもならずについそうなってしまったのである。けれども、結果としては、今のその話と同じように、妻にも友人にも知られないところで或る若い女に子供を産ませ、その女と子供との始末をまだはっきりつけないまま、宣伝班員の徴用令状が不意にやって来たのに、半ばは縋りつくような思いで、その時までは想像もできなかったこの遠い熱地にやって来てしまったのだ。（『北原武夫文学全集　第二巻』二九〇頁～二九一頁）

深夜のホテルでの「私」の過剰な心理的反応は、「私」の過去と関係していたことが判明する。深夜のホテルの赤ん坊の泣き声と女のつぶやきも、「偶然の暗合」として「ひびいた」のであろう。

この加筆部がない戦前版では、加害者としてのオランダ人男性と被害者としての現地の女性という図式が、きわ立つことになる。そうした図式化されたオランダ批判の要素は、植民地からの解放を唱える「大東亜共栄圏」下の徴用文学として機能する。いわゆる時局便乗的な作品とも言えるだろう。しかしながら、戦後版では、加害者の「私」も被害者の「若い女」も日本人であり、上記のような単純な図式は成立しない。批判の対象は、オランダではなく、「或る若い女に子供を産ませ、その女と子供との始末をまだはっきりつけないまま」という行為や姿勢そのものになる。戦前版では、検閲のため、「私」のこうした過去の話が「書けなかった」のは当然である。しかしながら、ここで加筆した第二箇所の、夜中に泣いている赤ん坊とその赤ん坊をあやす女の光景を振り返ると、北原の改稿の意図が一層明らかになっ

てくる。赤ん坊をあやす光景を描くのは特に意味がないように見えるが、内地での話を書き加えると、「私」がなぜその夜赤ん坊と女にそこまで注意を払っていたのかが判明する。言い換えれば、書かなくてもいいように見える内容には実際、書かなくてはいけない理由がある。戦時下の「実行の世界」において、「空虚」の代名詞としてしか扱われない内容が戦後になって書き加えられると同様に、戦前版で無名の忘却された赤ん坊と女は戦後版になって問われている。

自分の子供を産ませた女との関係から徴用先の南方に逃げた話は、敗戦直後の一九四六年一月に『新生』に発表された小説「嘔気」で語られていた。つまり、戦後版「カリオランの薔薇」は、戦前版に戦後すぐの「嘔気」を溶かしこむことで成立している。北原が、敗戦後すぐに、宇野千代との結婚生活の中で生じた、きわめて私秘的な事件を告白したことになる。事実の詳細は明らかにされていないが、少なくとも読者にとっては、そのように読むしかない条件や文脈の中で語られている。軍の検閲の有無にかかわらず、戦前版の徴用文学には、まったく不要な挿話である。のみならず、評論「薔薇について」で表明された文学の自己完結性の尊重から見ても、むしろ自己完結性の綻びとなってしまう。なにしろ、それは何とも始末のつかない出口の見えない話であり、自己嫌悪から何かを吐き出したい思いにかられながら、実際に吐き出す爽快感とは無縁の、重苦しい吐気だけを抱えこんでいる「私」の心の「破れ」が記されているのだから。その点から言えば、戦前版が評論「薔薇について」の文学論を投影した作品であるのに対し、戦後版は「薔薇について」の遺産を受け継ぐ一方で、それを破産させてもいる。「嘔気」には、「戦場での死」という「微かな弥縫策も破れ」という表現が見えるが、「嘔気」や戦後版「カリオランの薔薇」は、このスタイリッシュな作家が、あえて「弥縫」せずに「破れ」を「破れ」のままに示そうとした気配がある。その「破れ」から滲み出るものは何か。

「徴用令状」を逃避用のチケットとして南方に来た私だが、ついに「秘密」から逃れることはできない。

> その痛みと苦しさが、今だにそのことについては何も知らない筈の妻の心を考えることによって、風物も自然もまるで違ったこの熱帯地の環境の中にいても、今だに、どんな一瞬の間でも、私を安らかにはしていないのである。（『北原武夫文学全集　第二巻』二九一頁）

テクストの「破れ」から滲み出すのは、「熱帯地の環境」に身をおいても、「どんな一瞬の

間でも、私を安らかにはしていない」「痛みと苦しさ」である。それは「妻にも友人にも知られないところで或る若い女に子供を産ませ」、しかも、その「始末」からも逃げていることに由来する。ここでも女は、誰にも知られない女である以上、「或る若い女」と呼ぶしかない存在である。しかし、その名称化されない「若い女」は、きわめて私秘的で個人的な関係であるだけに、「どんな一瞬の間でも」忘れることができない。忘れようとしても、忘れようとすればするほど、「痛みと苦しさ」に襲われる。

「女と子供」についての私秘的な「想念」の記述が、テクストの「破れ」として感じられるのは、その「想念」の行方のなさに加え、それが「熱帯地の環境」を背景に描かれることと関わる。すでに見たように、この「熱帯地」には、夜中のホテルで赤ん坊をあやす女がいて、「一輪の薔薇」に比せられる女たちの姿が描かれていた。「嘔気」においても、作者自身を連想させる主人公（信吉）は、自分が好きになった現地の混血人女性アニイが、ほかの男ともつきあっていると知った夜、酒を飲み過ぎて嘔吐する。つまり、「何も知らない筈の妻の心」を心配しなければならないような自分の家族がいる「内地」では、それから逃れることが難しい。「或る若い女に子供を産ませ」たという「想念」に今も苦しんでいる男が、「熱帯地の環境」では、女から「一輪の薔薇」をプレゼントされ、それを平然と忘れたり、「内地」と同じ不始末を招くかも知れない現地の混血女に嫉妬したりする不均衡が、「破れ」の印象をいっそう濃くしている。「熱帯地の環境」で同じ不始末が繰り返されたなら、母親は、自分と同じ混血の赤ん坊を抱くことになるが、そのときも、この文化工作員の日本人は、「内地」と同じように「痛みと苦しさ」が伴う「想念」に苦悩するだろうか。

「カリオランの薔薇」の深夜のホテルで泣き続ける赤ん坊、その赤ん坊を抱いて何かを呟きながら歩きまわる女の姿は、私が「内地」で捨てた女と子供、「私」が「外地」で捨てるかも知れない女と子供、そして、その背景に潜む戦時の南方で同じような運命を引き受けた女たちと子供たち、それらの「暗合」の焦点である。そして、その「暗合」に潜む二重三重の光景が読まれるためには、小説の自己完結的な完成を破算させても、一種の「破れ」が必要であった。なぜなら、そのような「内地」の私秘的な「痛みと苦しさ」に結びつく「破れ」なしには、「熱帯地」の南方の「薔薇」の記憶は忘却され、泣き続ける赤ん坊の声も、その児を抱きながら歩く女のつぶやきも届くことはないからである。

## 4　おわりに

しかし、カリオランの深夜のホテルで泣き続ける赤ん坊の声やそれをあやす女のつぶやきは、戦後版に開けられた「破れ」を通して、はたして「内地」に届いたのであろうか。ここでいったん、本章の冒頭で提起された問題に戻ってみたい。つまり、北原が一九三八年に書いた「戦争文学論」で、戦争を見てきた文学者たちの中で、戦争を「大事件」として見てきた人と、戦争を「事実」として見てきた人がいると語っている地点にである。前者は内に確固とした抽象世界を持っていないがために、現前の事実の世界にいつも「一見素直に感動」するように見えるが、いつでも考えることのできる「客観事実」はない。それに対し、後者は確固とした抽象世界を持っているため、「その時々の意識を後になって想起する」（傍点北原）ことができる。この想起されたものはいわゆる作家の「思考した部分」であり、これこそが「作家にとっての真の現実」（『北原武夫文学全集　第四巻』七一頁～七二頁）である。こうした「真の現実」があるからこそ、どんなに時間が経っても、いつも読者を「考えさせる」（傍点北原）ことができ、これは「真の戦争文学」と呼ばれるのだと主張している。では、北原ははたして南方徴用を経て、「真の戦争文学」を書けたのか。

実際、「カリオランの薔薇」には、今日までも私たちを考えさせつつあるものがある。オランダに「JIN の会」という協会がある。J.I.N とは、Japans Indische Nakomelingen の略で、日本語版ホームページによれば、第二次大戦中（後）生まれた、インドネシア系オランダ人を母に、日本人を父に持つ混血児の会である。会員は「全てではないものの多くの子供たちは自分が日本人の血を引くということは知」らないが、「家族の秘密も遅かれ早かれ表に出ることになる。年齢が進むにしたがって、自分の過去に対する課題に納得のいく答えを得たいという欲求から、個人的に同じ過去をもつ人たちが接触するようになり、自分たちが社会的に認識される方法を模索した結果、一九八三年に前身組織「ジャパン・ルーツ」を、一九九一年に「JIN の会」を設立したという。活動目的の一つは「日本人父親とその家族を探すこと」の「援助」であるが、当会ホームページの一項「父親捜し」には、次のように記されている。

> 多くの子供たちは当時は既に五十近くに達しており彼らの父親捜しに取り組んでいました。残念なことに多くの資料は不完全で且ついつも正確なものであるとはいえませんでした。政府関係からの公式な動きはなく言葉の壁は大きいものでした。オランダ、日本側双方では一九九一年以降、追跡調査が開始されてはいたものの結果としては残念なことにゼロでしかありませんでした。父親を探している者たちにとっては痛ましいものであり、もう遅すぎるのではないか、というような焦りの感情も湧き、不満と緊張が高ま

るようになります。その結果、インドネシア時代の母たちの若い時の写真を集めてポスターにして当時付き合っていた日本人の男性を探しているとの説明を付け日本で配布しようという創造的ではあるけれど一時的なアイデアが採用されJIN協会の中で実行委員会が設立されました。（「JIN の会」ホームページ。http://www.jin-info.nl/日本語/（閲覧日：二〇一九年一月一七日））

忘却された女たちと子供たちの側にも、また別の忘却の問題があった。かつての忘却された子供たちは、二十一世紀の現在も、二重三重の忘却を問うというかたちで泣き続けている。もちろん、その泣き声に耳を傾けた人たちも少なからずいた。たとえば、先の引用文の続きに紹介されている内山馨の活動などは、その一つである。しかし、その内山の活動を含め、「日本人の父を探し求め」る人々の姿を描いたドキュメンタリー映画「子供たちの涙」（砂田有紀監督、製作協力:JIN の会、SAKURA 財団、日蘭文化協会、日蘭イ対話の会、二〇一四年）のポスターには、「戦後七十年日本人さえも知らなかった戦争の落とし子たちの悲劇」と記されている。いわゆる「戦争混血児」自体の存在は知っていても、その泣き声は、どれほどかつての「内地」に届いていたのだろう。

戦前版と戦後版の二つの「カリオランの薔薇」は、徴用文学が何を塗りこめているかといった徴用文学の性格や構造や読み方を教えるとともに、戦後版の「破れ」を通して、「外地」で泣き続ける赤ん坊と女のつぶやきをめぐる戦後日本の「想念」を問うている。しかし、主人公の「想念」が、誰にも語られることのなかったものであるように、「破れ」を経由して「外地」の泣き声とつぶやきを聞き届けた人々も、その多くは、主人公のように「想念」の中で「痛みと苦しさ」を感じ続けるしかなかったのかも知れない。

# 第二章

## 阿部知二における南方徴用――敵性国人と現地人への着目――

### 1　はじめに

前章でも言及したように、一九四二年一月、ジャワ派遣の宣伝班員として、阿部知二は北原武夫、武田麟太郎、小野佐世男らとともに品川駅より汽車で出発し、南方へ赴いた。帰還後、一年ほどの南方体験に基づいて、阿部は紀行文・エッセイ集『火の島――ジャワ・バリ島の記』（創元社、一九四四年七月。以下『火の島』と表記）を書き綴った。また、戦後になって主に小説という形で南方を表象する作品集『死の花』（新文芸社、一九四七年九月）を創作した。

だが、阿部の南方徴用に関する研究は今のところ決して多いとは言えない。主要な研究成果として、木村一信「阿部知二の〈徴用〉体験――「死の花」の背景」[10]、「阿部知二の〈ジャワ〉を歩く」[11]、「阿部知二インドネシアへの旅――ヒューマニズムと逸楽――」[12]、水上勲「阿部知二とジャワ徴用体験」[13]などが挙げられる。これらの先行研究は、阿部がジャワへ徴用された経緯、ジャワに滞在した期間の行程を明らかにし、また、「死の花」という小説の背景を阿部の実際の南方体験と結びつけながら考察している。阿部の南方徴用体験をトータルに捉え、様々な情報を詳細に提示している点で非常に示唆的である。しかしながら、これらの先行論では、具体的なテクスト分析が十分に行われているとは言えない。例えば、水上勲は他の徴用作家との比較から、阿部は「戦時下において、完全には自己を喪失しなかった点は、基本的に評価しておく必要がある」[14]と指摘している。また、こうした外地体験を阿部がどのように文学化し得たのか考察するために、彼の戦後小説の中から南方体験に関わる作品を取り上げて紹介している。ただし、考察はあらすじの紹介程度にとどまっており、戦時下の作品と見比べながら、戦後の作品で南方がどのように表象されているかという問題については言及していない。

本章はこうした問題点に着目しながら、『火の島』と『死の花』の二つの作品集を中心に、

10　木村一信『昭和作家の〈南洋行〉』（世界思想社、二〇〇四年四月）。

11　『昭和文学研究』二五集、一九九二年九月。

12　木村一信、上田博、芦屋信和『作家のアジア体験―近代文学の陰画―』（世界思想社、一九九二年七月）。

13　「帝塚山大学紀要23」一九八六年一二月、三四頁～五四頁。

14　「帝塚山大学紀要23」一九八六年一二月、三七頁。

阿部の戦時下における創作、オランダ人学者の保護、「猿踊」題材の戦中と戦後という三つの方面から作品分析を行うことで、阿部の南方体験と戦後の小説における南方表象とがどのように結びついているのかを探ってみたい。

## 2　戦時下における創作――『火の島』

阿部知二は『火の島』の序文「回想」の中で、この作品集は「ジャワとそれからバリの島についての見聞を、文化といふことに中心の興味をおきながら」[15]書いたものであると述べている。ここから、「戦争」ではなく「文化」という視点から書こうとする阿部の姿勢が窺える。

『火の島』は序文の「回想」と後書きの「帰国」を除いて、主として「ジャワ島の記」と「バリ島の記」の二つの部分から構成されている。「ジャワ島の記」の各節の表題（「ジャカルタ」「血と土と心」「ジャワの山野」「ジョクジャカルタ」「古譚拾遺」「文化覚書」「短章集」）からも窺えるように、戦争の影は薄いと言えよう。これは戦時中に発表された他の文章と比べれば明らかである。戦時中には、たとえば「大国民」（『うなばら』一九四二年三月二八日）、「闇を追ふ光明の戦」（『婦人公論』一九四二年七月）、「建設戦の指令塔だ」（『ジャワ新聞』一九四三年一月）など、戦意を高揚する文章が多く書かれている。発表時期はほぼ同じだが、『火の島』は単行本のため、『うなばら』や『ジャワ新聞』のような陣中新聞掲載作と比べて、検閲はそれほど厳しくなかったと考えられる。本章の目的は阿部の戦争責任を追及するというより、南方徴用体験と戦後創作について考察することであるため、ここでは検閲に配慮した陣中新聞掲載作ではなく、可能な限り自主性を持って書いたと思われる『火の島』を取り上げる。

とはいえ、戦時下作品である以上、阿部は戦争に関する言説にまったく触れないわけにもいかなかった。実際、『火の島』においても戦争を賛美する言説は随所に見られる。例えば、「戦の若者」という文章では、若者にとっての戦争のメリットについて次のように述べている。

> 修養期の盛りにある巨万の若者が、戦線といふ溶炉の中で、忠誠、勇気、沈着、克己、勤勉、責任感、などかずかずの徳を心身に叩きこんでゐる。またそればかりでなく、異様な風物に取巻かれつつふとすれば見失はうとするおのれを、故国日本の文化への繋りの緒を心の中に引き締めることによつて食止めようとする。（『南方徴用作家叢書４』二

15　木村一信『南方徴用作家叢書４』（龍渓書舎、一九九六年十月）一頁。

一二頁）

ここから、戦争は若者の徳を養うことができるという考えを見て取れる。また、前に触れた「回想」に見られる、上陸から十日足らずで全蘭印が無条件降伏したことは「遺憾」[16]だとする言説にも注目したい。文化人としての阿部は、戦争を十分に経験していないことを本心から「遺憾」だと思ったのだろうか。ここで、阿部のジャワ島上陸までの経緯を見ておきたい。

阿部が佐倉丸に乗船して高雄から戦地ジャワへ出発したのは、一九四二年二月五日であった。同月一八日にインドネシアのカムラン湾を出て、三月一日未明に南方徴用での唯一の戦争体験である「バタビア沖海戦」を経験した。佐倉丸は敵の魚雷を受けて沈没し、阿部は長時間海上を漂ったのちに救助され、ジャワ島へと上陸した。これは阿部にとって生死に関わる最も緊迫した事態であったと言えよう。阿部は「自筆年譜」の一九四二年の項で、「バタビア沖海戦」のあと体調が崩れ、「南海の自然の美しさと戦争のいとわしさとは、心を乱した」[17]と述べている。これを見ると、この唯一の戦争体験は、阿部にとって決して快いものでなかったことは明らかであろう。

そうすると、阿部の戦時下作品における戦争協力的な言説は、一徴用文化人の戦時下における保身の手段であった可能性が考えられる。このことについて考察するために、『火の島』という「文化」を重んじる観点の見られる作品集から、いわゆる戦争協力的な言説を取り出して分析してみよう。阿部はエッセイ「ジャカルタ」の末尾でジャカルタの気候や植物を紹介したあと、次のように書いている。

16「従つて、遺憾にも私たちは陸上の戦についての経験をゆたかに物語ることはできぬ。しかし大東亜戦の遂行と大東亜の建設とのために、旧蘭印の島々がいかに重要な意味をもつかを思ひ、それが一日一刻も早く我が手中に入ることこそ我々の念願だつたことをおもへば、その「遺憾」は心からのよろこびに変化してしまふのである」（『南方徴用作家叢書4』一一頁）。

17「正月早々東京を出て、台湾のタカオ、インドネシナのカムラン湾に寄り、三月一日ジャワのバンタム湾で敵前上陸ということになったが、乗っていた船が沈められ、夜の海を泳ぐ。のち、主としてジャカルタにいたが、バリ島等も見物した。七月、胸を患い東部山中セレクタで療養した。南海の自然の美しさと戦争のいとわしさとは、心を乱した。十二月、帰国」（『現代日本文学全集　阿部知二・伊藤整・中山義秀』筑摩書房、一九五五年七月、四一九頁）。

路上からはそのあたりの山々が晴れた空に、紫紺にかがよひながら白雲をまとつてゐるのがよく見えた。何はなしに故国の山々をおもひうかべては郷愁を感じながら、一方では奥地高原への旅の誘ひを感じた。この頃から、船団をともにしてこの島に来た将士の多くはさらに南方の酷熱瘴癘の地の激戦に向つてゐたのだつた。おのれの暢気さを責めながら、その方向の空をあふいで武運を祈つた。（『南方徴用作家叢書４』四〇頁）

ジャワの山を見て故国の山を思い出すのはともかくとして、阿部はそのあと唐突に、さらなる南方の酷熱瘴癘の地で戦っている将士たちのことを連想し、暢気な自分を責めはじめる。これ以前の「文化」的な内容を興味深く読んでいる読者は、文章の末尾でいきなり「将士」「激戦」「武運を祈」るといった文言にぶつかると、不自然な感じを覚えるだろう。

また、「ジャワの山野」というかなり長いエッセイでは、西から東へとインドネシアの風土、植物、地理が紹介されているが、末尾で阿部は、アルジュノ山の向日葵、百日草、薔薇など三十種類の花の名前を挙げたあと、次のような内容を書いている。

まだ名も知らぬ熱帯花を加へて行つたらば何程になるか分つたものでなかつた。将兵は戦のおさまつた花野の中で練り鍛へてゐた。野を分けて汗みづくになつて強行軍する隊の見える日もあつた。爆破の轟きが規那林の奥からひびきつづける日もあつた。スメルの険しい嶺のまはりで飛行機が急降下したりした。アルジュノ山のいかめしい肩から噴き上げるかすか黄をおびた白色の煙のみだれる蒼空のあたり、その亜細亜の武神は、永い屈従の日々の憤怒の想出に燃えつつ、いま亜細亜の光栄のために戦ふものをじつと見つめてゐたことであらう。（『南方徴用作家叢書４』八一頁）

「ジャワの山野」という表題からも分かるように、このエッセイはジャワの地理環境や植物を中心として書かれたものである。そのため、末尾の「練り鍛える将兵」、「アジアの光栄」といった戦争協力的な記述には違和感がある。また文章全体から見ても、取ってつけたようなわざとらしさを感じる。だが実は、そうしたパターンは『火の島』の中に繰り返し出てくる。

『火の島』において戦争協力的な言論は随所に見られるが、上記の引用のように、文章の最後に置かれ、自然と対比させる描写によって戦争を暗示する方法がパターン化されている。こうした、自然描写の中で戦争を煽るというパターンは岡倉天心の作品を連想させる。例えば、

一九〇二年に書かれた「東洋の目覚め（"The Awakening of the East"）」には、次のような記述がある。

ボスフォラス（地中海と黒海をむすぶ海峡。アジアとヨーロッパの境界）の水は、白河（中国北部の川）の悲しい暗鬱を映し、満州の丈高い草は、ラジプタナ（インド北西部の地方）の平原を吹きまくるとおなじ烈風におののいている。月のない荒涼たる夜を、ペルシアの夜鳴鶯はむなしく慟哭する。花は散り落ち、ふたたび帰らないのであろうか？春は永遠に去ってしまったのであろうか？（夏野広訳『日本の名著39』中央公論社、一九七〇年三月、六九頁）

「ジャワの山野」に見られる、「亜細亜の武神」アルジュノ山が「永い屈従の日々の憤怒の想出に燃えつつ、いま亜細亜の光栄のために戦ふものをじつと見つめてゐた」という一節は、自然描写によって戦争を暗示しているという点で岡倉の文章と共通している。ただし、岡倉が全篇にわたってそうした表現方式を取っているのとは異なり、阿部は文章の末尾でのみ用いている。これは阿部が戦時下の作品を創作する際に、軍の要請を意識していることを示している。

ところで、『火の島』を見ていると、ジャワの文化を研究するに従って、阿部に一つの疑問が浮かび上がってきたことが窺える。それは、三百年あまりにわたってオランダに支配されてきたインドネシア人の「精神文化」はどのように形成されてきたのか、あるいはこの間オランダはインドネシア人の「精神文化」にどのような影響を与えてきたのか、という疑問である。

この疑問を解明するため、阿部はジャワ島内、バリ島などへ視察旅行に出かけ、各地の博物館、研究所を訪れた。南方から帰還して二、三日後の『週刊婦人朝日』（一九四二年一二月三〇日）には、「南方の女と風物――従軍作家阿部知二氏に訊く」という表題で、阿部とあゆみ会の女性たちとの座談会記録が掲載されている。「あちらへおいでになつた使命はどういふ……」と聞かれて、阿部は次のように答えている。

ジャカルタを中心に、本屋、貸本屋、図書館なんかの本を、助手を使つて全部調べて、反日的な本とか、よくない本を差押へたんです。それに二ケ月ばかりかかりました。それからあと、僕たち作家は各地をよく歩きました。それが済んでから旧蘭印の科学施設とか研究所とか、学術機関、学者、さういふやうなものの調査を二ケ月ばかりして、あとは、対外放送のプランを立てたりしました。（『南方徴用作家叢書5』一七二頁）

ジャワでこうした仕事ができたのは、もちろん戦争がすでに終わったという好条件に恵まれたからである。仕事を通じて阿部は、オランダ人が道路、都市企画、電気、また衛生施設などでジャワを覆ったが、「強い影響感化をあたへるに足る精神文化が足りなかつた」（「文化覚書」『南方徴用作家叢書４』一一一頁）と述べている。つまり、オランダがジャワに影響を与えたのは「物質」の世界のみである。それに対して、ジャワ民族の中にある、山川草木虫魚に霊を感じ、生霊と死霊のはたらきを信じるいわゆる「アニミズム」（言うなれば、精神の世界）について、阿部は「その精神の至醇至高なものの有つ自然との交霊感は、我々の伝統に取つては親しく身におぼえのあるものであ」（『南方徴用作家叢書４』一一四頁）り、それは「東洋の心」（『南方徴用作家叢書４』一四八頁）であるという（この点に関しては、本章の第四節で詳しく論じる）。

とはいえ、阿部はこうした視察の中で、オランダ人の精神文化の貧困を批判しながら、彼らがインドネシアで成し遂げた仕事や取り組んだ研究に注目しはじめた。「文化覚書」では、「文化接収」のためにオランダ人の仕事を扱った際に知り得た、彼らのインドネシアでの仕事を紹介している。精神文化に関しては「印刻を強く南方に与へたとはいへぬ」とする一方で、技術的方面に残した「かずかず」の足跡や「相当に巨大な蓄積」、「念入りな研究」[18]など、直接的な表現ではないにせよ、オランダ人学者たちの研究とその成果に対する賛嘆を述べている。さらに、あとに続く文章では、文化科学、医学、自然科学といった方面でのオランダ人学者たちの研究成果を詳しく記している。考察を進めるに従って、阿部のオランダ人学者たちへの関心は高まっていった。こうした関心は、戦後の小説集『死の花』に引き継がれていくことになる。

### 3　オランダ人学者の保護

短篇集『死の花』（新文芸社、一九四七年九月）は、「死の花」（『世界』一九四六年七月）、「罪の日」（『朝日評論』一九四七年一月）、「あらまんだ」（『人間』一九四七年六月）、「猿」（『光』

18「蘭人は、前にも云つたやうに、精神文化の印刻をつよく南方に与へたとはいへぬ。ただ技術的な方面で彼等が残した足跡は、かずかずいま我々の前に横はつてゐる。工科、医化大学のほかにも、法文科にしても、それはいはゆるインドネシア慣習法の長年の研究の相当に巨大な蓄積や、南方諸言語の念入りな研究の収穫をおさめて横はつてゐる」（『南方徴用作家叢書４』一二〇頁）。

一九四七年七月）の四篇の小説を収録している。いずれも徴用体験を題材に敗戦後間もなく書かれた作品で、各作品に共通して登場する人物がいる。「死の花」「罪の日」「猿」では、主人公の宣伝班員・比延と画家・吉備の二人組が登場し、「あらまんだ」では「吉備」だけが登場する。いずれの小説でも比延は文学者、作家として描かれ、作者自身に近い存在である。一方の吉備は、当時阿部と共ににジャワ、バリ島を歩き回っていた漫画家小野佐世男と思われる。

『死の花』でまず注目したいのは、これが日本植民地としてのインドネシアにおける、宣伝班員の主人公とオランダ人学者の物語だということである。すでに触れたように、阿部はインドネシア文化を考察する中で、幾人かの科学者やその家族たちと顔見知りになり、彼らに関心を持つようになっていった。「死の花」の主人公である比延は、病気で帰国の許可を得たにもかかわらず、禁錮されたジャワ島の学者たちを救助するために帰国を遅らせる。そして、療養のため東部ジャワのあるホテルに来て、三十年以上もインドネシアに滞在しているオランダ人ブリンクと出会う。ブリンクは貿易業を営んで成功していたが、第一次大戦後の恐慌で無一文になってしまう。それから二百人の島民を連れてニューギニアに金鉱を探しに行ったが、マラリヤに襲われ、生き残って戻ってきたのが彼を含めて十数人しかいなかった。こうした放浪と冒険を経て、十五年ほど前に東部ジャワマラン郊外に来てこの地を開発し、ホテルを建て、林檎を栽培し果樹園を経営している。日本軍がジャワを占領すると、彼はこれらの事業の経営を支配人に任せて、家族とともに「裏の丘の家」に引き込む。その後、ある日本人軍属の謀略によってブリンクはすべてを失い、銃殺刑に処せられる。ブリンク一家と親しくしていた比延は、ただ傍観するだけで何もしてやることができない。

実際、阿部はジャワに来てからすぐ病気になり、療養のためマランに近いバトール一帯の保健地のあるホテルに住んでいた。「死の花」はこの期間の体験を題材に書かれたと推測される。『火の島』には次のような描写がある。

私は病気の三ケ月をこの近くのセレクタといふ、アルジュノ山の懐のホテルにゐて、毎日バトールの医師まで馬車で通つた。その乾期のころのセレクタの三原には、美味いオレンジがみのり、薔薇の花が高い匂を立てて咲きみだれ、濠州から移植したといふミモザの黄の花とカシヤの淡紅の花とがつぎつぎにひらいて行つた。（『南方徴用作家叢書４』八一頁）

阿部は戦後初めて南方体験を小説に書くとき、この花園のような島を選んだ。小説には比

延と同じホテルに住むデンマーク人ドクトルKという人物が登場する。ある夜のこと、比延は酒場でKと出会い、一緒に飲みながら禁錮された学者たちについて話す。比延は心の中で自分が学者たちを救助する理由を三つの方面から分析する。一つ目は、友人吉備から聞いた天皇の「蘭印の自然科学者らは大事にしてやれ」との御言葉である。二つ目は、「人間として」すなわちヒューマニズムからである。三つ目は、「一種の偽善的行為に近い」ものである。比延は次のように考える。

> 比延がとどまることになつたのは、この「科学者を大切に」との言だつたことは、ある意味では、――表面的な意味では事実だ。しかしもつと深い意味では、おのれに云いきかせるための口実であつたかもしれない。熱帯の風光と人間との中で、今しばらく放埒な生活をしたいという動物的な欲望が底からうごめいて来て、すかさず吉備の言葉をとらえたのかもしれない。一種の偽善的行為に近い。（『死の花』新文芸社、三六頁）

しばらくジャワに留まろうとしたのは、「科学者保護」という表向きの理由に、異国の風光の中で「放埒な生活をしたい」という意欲が潜んでいるからだと比延は考える。しかしながら、Kに「どうしてそんなことをしたのか」と聞かれると、あれこれ考え、口に出したのは「日本のEmperor」という言葉であった。なぜ比延は他の理由を言えなかったのだろうか。

まずは「人間として」である。作品の中で「感傷的すぎた」から言えなかったと書いているが、実際は比延の「宣伝班員」という身分が根本的な原因ではないかと思われる。いくら比延が良心的な文化人だと言っても、彼が所属している宣伝班は軍部の侵略を円滑に進めるために存在している組織である。そして、科学者たちを禁錮しているのも軍部だということは言うまでもない。別の捉え方をすれば、彼が乗る日本という船自体が誤った進路にあるのが事実である。それゆえ、比延は「人間として」科学者たちを救助すると言える立場ではないだろう。

次に、「もっとジャワで遊ぶため」に留まり、ついでに科学者たちを保護する仕事をしているというのは「事実」であっても、同じ「敵性国人」のKの前で、彼が心配している友人たちのことを話すのはふさわしくないからであろう。比延が島のオランダ人科学者たちを救助することには様々な理由があるが、Kには「天皇のために」と言わざるを得なかったのである。

とはいえ、文化人としての比延が、ジャワで命の危険を冒してまで研究を続けている敵性国人学者たちの姿を見て彼らを助けることの背後には、「天皇のために」という建前上の理由に隠された比延個人の意志がある。

比延とブリンクとの話から阿部と蘭印のオランダ人学者の関わりを探る前に、戦時下のジャワにおけるオランダ人の科学研究に対する態度を見てみたい。『火の島』では、「ジャワ島の記」という章で、戦前までのオランダ人学者による仕事の輪郭を描いている。具体的には、バタビヤ魚類研究、チボダス高地植物園及研究所での寄生虫の研究、有用植物の栄養研究などを紹介したうえで、次のように語っている。

熱帯の自然は人類に無限の発展を与へるが、同時にそれに対する代償をきびしく要求する。あらゆる科学の探究が為されてはじめて熱帯の自然は人間のものになる。（中略）「楽園ジャワ」と人々のいふ言葉は、絶間ない科学の争闘の上に立つてはじめて可能となつたのだといふことを知る。（『南方徴用作家叢書4』一五七頁）

阿部は戦時下における科学研究、科学者の重要性を強調している。「死の花」のブリンクはその具体的な例として登場する。前述したように、ブリンクは十五年前にジャワにやって来てこの地を開発し、ホテルを建てた。そして、ホルスタイン系統に属する牛とジャワの土産の牛とを適度に交配させ、かつホルスタインの能力を失わないようにするために、七年も八年も苦労した。同様に、幾度もの失敗や苦心を重ねた末に、ようやく熱帯地方における林檎栽培に成功した。比延は次のように評価している。

この人の血に流れているものの性格は分つた。いやこの人自身がその祖先の時代の性格を最も雑じりなく保守しているオランダ人の稀な例にちがいない。少くとも彼の持つている冒険心、意志力、勤勉、素朴さ、快活さなどは、比延が今まで触れてみた多くのオランダ人にはほとんど見られぬものだつた。彼等の多くもそうした剛健な冒険者の裔であるのだろうが、もはやあまりに「近代化」して、安逸と快楽と洗練を好む都会人になつてしまい、祖父達がこのファン・デン・ブリンクのようにして闘つて拓いて快適な温柔な地と化したこの島で、明るく楽しむことに耽るか、そうでなければ銀行や株券とを余念なく愛して暮らす人間になつていた。ジャワ全体が花園のようになつていた。それは何らの罪ではないことだろうが、その時に、古い歴史に見る北方の族のように、また、かつてジャワが桃源境のような生活を楽しんでいた時、なだれ込んで来た忽必烈の軍のように、日本人が武力を揮つて押し寄せて来たのだ。（『死の花』二三頁）

ここで比延は、ブリンクの「冒険心、意志力、勤勉、素朴さ、快活さ」を讃えながら、「安逸と快楽と洗練を好む都会人になって」しまう他のオランダ人を批判している。比延がオランダ人学者たちを救助しようとするのは、ヒューマニズムからでも、「放埒な生活をしたい」からでもなく、学者たちが持っている上記の優れた性質が理由の一つだと考えられる。そして、引用中の「ジャワ全体が花園のようになつていた」と『火の島』の「楽園ジャワ」という表現を合わせて考えると、ジャワが今のような「快適な温柔な地」になったのは、ブリンクのような敵性科学者たちがいなくてはできないことだと阿部は思っているだろう。同時に、これらの表現は、小説の表題「死の花」を連想させる。この表題は、日本軍の侵入に伴って、ジャワの安逸と快楽が失われ、花園の花が死んでしまったことを意味している。「何らの罪ではないことだろうが」という一節から、阿部はブリンクのような科学者を含め、ここで生活しているオランダ人にも同情していることが窺える。ところが、ここに「忽必烈の軍のように、日本人が武力を揮つて押し寄せて来た」のは仕方がないことであり、これは敗戦者の宿命である。前に引用した「南方の女と風物——従軍作家阿部知二氏に訊く」（『週刊婦人朝日』一九四二年一二月三〇日）の中で、阿部は敗戦したオランダ人について次のように語っている。

> 戦争に負けたら、つらいですよ、ええ、非常につらいです。ジャワの原住民は負けたのぢやないし、日本といふ新しい指導者が来たんだから喜んでゐますけど、オランダ人なんかの生活は、戦争に負けたんだから当然だけど、「風と共に去りぬ」みたいなことどころぢやない。戦争にまけちやいかんですね。負けると悲惨ですなア。（『南方徴用作家叢書5』一七八頁）

ここでは敗戦国の惨めさを語っている。しかしながら、比延はいったい日本が起こしたこの戦争をどう思っているのか。ある夜のこと、比延がブリンク夫婦に招かれて、KやマダムWと共にブリンク家ですき焼きを食べているときに「戦争」の話が出て来る。ブリンクは「何にしても、これが最後の世界戦争であればいい。いや、そのことだけを信じよう。我々の子達はいい時代を持つだろう」（『死の花』六二頁）と語る。その場にいる唯一の日本人として、この戦争に対する考えを聞かれた比延は、次のように語る。

> ドクトルKもいうように、その賭博に生きぬいたものと、その子孫とが生きるのであれば、——このような人性を、何らかの手段で根本的に変革する精神科的手術が行われる

か、人性の中にひそむそのスポウツ本能を他の何物かに振り向けることに成功しない限り、今後も危険は十分にあるとしか思われぬ。たゞ、今日の世界の狂気のくり返しは、この快感を以つてして、戦争があたえる惨害を見ない冷酷な愚者と、影響としての害だけを見て、『人間はもう今度こそ戦うまい』と安心する善良な理想主義者とだけがあり、どちらも半面の真実しかつかんでいないという不幸から起つているのだろうが。（『死の花』六三頁）

「今後も危険は十分にある」という箇所には、日本侵略戦争に対する批判が明らかに見られる。戦争がもたらす恐ろしい災禍を知りすぎるほど知って、「これが最後の世界戦争であればいい。（中略）そのことだけを信じよう」と言ったブリンクは、まさしく比延の言う「『人間はもう今度こそ戦うまい』と安心する善良な理想主義者」である。それに対して、インドネシアで労働力や資源を獲得するために戦争を起こした日本人は「冷酷な愚者」である。ここで比延がブリンクに同情している姿勢には、罪悪感があるということを見逃すべきではない。この罪の意識が、彼が帰国の許可を得たにも関わらず、ジャワに留まる根本的な理由ではないかと思われる。ブリンクが危機的状況に陥った後、比延はスラバヤに出て、現地の新聞記者と与論を起こしてブリンクを助けようと考えるが、出発前にブリンクは銃殺刑に処されることになる。次の引用は、ブリンクが銃殺される当日の午後、比延がジャカルタに帰ろうとする場面である。

蒸し暑い午後で、アルジュノ山の煙がほの黄色く光り、庭の花は強い日光に燃えていた。車に乗ろうとして玄関に出てみると、庭の向うの隅のアラマンダの花垣の蔭に、ドクトルとWとが立つていた。Wの黒い服の胸には、またフランジパニの花がつけてあるようだつた。二人とも車に乗る比延を、一つの風景を眺めるような静かな眼つきで見送つていた。（『死の花』八〇頁）

マダムWは作中でいつもフランジパニ花を胸に付けている。フランジパニは白い墓場の木の花で、すなわち表題の「死の花」である。引用した場面はブリンクの死、小説全体から言えば島の科学者たちの死、ジャワという花園の死を意味していると言っていいだろう。宣伝班員としての比延は軍当局に対しては無力であり、親しくなったブリンクを救おうと努力するが、結局徒労に終わってしまう。

ここで特に興味深いのは「アルジュノ山の煙」の描写である。前節でも引用した戦時中の

エッセイ「ジャワの山野」では、「アルジュノ山のいかめしい肩から噴き上げるかすか黄をおびた白色の煙のみだれる蒼空のあたり、その亜細亜の武神は、永い屈従の日々の憤怒の想出に燃えつつ、いま亜細亜の光栄のために戦ふものをじつと見つめてゐたことであらう」とあるように、アルジュノ山は亜細亜の武神であり、山から噴き上げる「黄をおびた白色の煙」は武神の憤怒と見なされていた。このように、自然風景に対する描写によって戦争が暗示されている。一方、「死の花」では「アルジュノ山の煙がほの黄色く光り、庭の花は強い日光に燃えていた」様子が描かれる。自然風景の描写は戦争を暗示するのではなく、ドクトルKとWがジャカルタに帰ろうとする比延を見送る際の感傷的な雰囲気を醸成している。「アルジュノ山」という同一景物に対する戦時下と戦後における描写の差異は極めて興味深い。

## 4 「猿踊」題材の戦中と戦後――「バリ島の記」から「猿」へ

作家の外地体験及びその体験に基づいて創作されたた作品を考察するために、同じ題材を扱う戦時下の作品と戦後の作品を比較考察することは重要である。阿部知二の戦時中のエッセイ集『火の島』に収録されている「バリ島の記」と戦後の作品集『死の花』に収録されている「猿」という小説は、阿部のバリ島のある小さな村での体験を題材にしている。南方徴用中、阿部は小野佐世男と共にバリ島のある村へ行き、そこで様々なバリ島特有の伝統舞踊を見る。同じ体験とはいえ、二つの作品を通じて表現しようとしているものは異なっている。

「バリ島の記」の第二節で、阿部と小野はバリ島の小さな村で生活する知り合いのスイス人薬学博士の家に遊びに行く。博士は村でバリ島伝統の音楽舞踊を研究しており、彼らは古くから伝わる様々な伝統舞踊を見せてもらう。前述したように、『火の島』は文化を中心に書いた戦時下の作品であるため、「バリ島の記」では舞踊を服装、歴史から文化、伝統に至るまで、様々な方面から詳しく説明している。作品中に登場する「バロン」「サンギャン・デダリ」「サンギャン・チェレン」「ケチャク」「レゴン」「ケビヤ」などの踊りから、「猿」に登場する「ケチャク」に注目したい。「バリ島の記」では、この踊りの様子は次のように記されている。

> 名物の「ケチャク」なるものをみた。猿踊ともいはれる。半裸の男が数十人、髪に紅い花を挿したのと白い花を挿したのとの二組に分れて対し、主として坐しながら、ひどく急激な調子で、チャツ、チャツ、チャツ、チャツー、と熱狂して叫喚しながら身をゆるがし、相闘ふごときさまをつづける。（『南方徴用作家叢書4』一七七頁）

続けて阿部は、この踊りについて次のように解釈している。

印度古訳「ラマヤーナ」中、ラマがその配偶シタを錫崙島の魔王にかどはかされたとき、猿猴の族が来り援けて奪還したといふ古事に因むとの説明がある。しかしさうした因縁で割り切れぬものがあることに気をつけなければならぬ、印度教の渡来などの及びもつかぬ漠たる太古原始の代からの踊がその乱酔狂舞の気をいささかも失はずに今も生きてゐて、そこに後来の印度教的因縁が二重焼になつて付加されたといふのが実相にちがいない。これはほかのいろいろの踊や劇についても云へることである。（『南方徴用作家叢書4』一七八頁）

このように、猿踊の様子と歴史を詳細に記しており、『火の島』を文化を中心に書こうとする阿部の意志がここでも確認できる。これに対し、小説「猿」では前述した体験をもとに多くの内容が書き加えられている。

報道員としてジャワに派遣されていた比延は、ある日の午後、スラバヤで檻の中の猿を覗いているときに知り合いのKと出会う。Kは近いうちにバリ島に住んでいる友人Fを訪れるから、一緒にバリ島へ行かないかと比延を誘う。一週間後、比延は友人吉備と船でバリ島へ行く。海峡の渡船に一行が乗ろうとしたとき、突然大猿のようなバリ人の男が現れた。中尉と下士官が蹴飛ばしても、男は比延と吉備の体の間に入ってしまう。船がバリの岸に着き、比延たちが自動車でバリを縦断しようとすると、男はまた比延の膝の前に座り込んでしまう。途中で豪雨にあって車が動かなくなり、助けを求めている間に男はどこかへ消えていった。その後、比延はKとバリ島で集まり、一緒にFの家を訪れ、村の舞踊を見る。Fの家に帰る途中で、猿踊を踊っている何十人の中に比延はその男を認める。

阿部が実際のバリ島体験で猿のような男と出会ったのかどうかに関しては、今のところまだ確認されていない。そのため、この描写には二つの可能性が考えられる。一つは、男と出会ったのは事実だが、戦時下では書けなかったため、戦後になって書き加えたというものである。いまひとつは、その男は存在せず、虚構の人物として、バリ体験を小説化する際に創作したというものである。いずれにせよ、猿のような男を戦後の小説「猿」で書き加えることで、阿部が何を表現しようとしているのかに注意すべきである。

小説の冒頭で、比延はスラバヤで檻の中の猿が木に登ったりぶら下がったり、あぐらをかいたりする姿を見て、次のように考える。

比延は、のんきそうなインドネシヤの老若男女のなかにまじつて、おりをのぞいているうちにふと、錯覚のようなものにおそわれた。おりの内と外との関係が逆になつてきて、あはれな見世物になつているのは、こちらの人間の側でないか、と感じられてきた。というのは、この大猿たちにしろ、さつきながらく見とれた奇妙な形の色さまざまの熱帯の鳥たちにしろ、うそ寒い日本のおりの中にいる鳥やけものの、みじめな姿とはちがつて、まつたく精気にみち、おちつきはらつていた。（中略）つまりここでは、鳥獣が主人であつて、人間は、まねかれぬ客として、そのかれらの為の自然の中に、不適当な心身をもつて、すそ分けにあずかるために、割りこんできているのにすぎないのであるらしい。（『死の花』一七九頁）

ジャワの熱帯のすべては人間のためではなく、ジャワの鳥獣のために自然が与えているのである。この点から見ると、猿のような男は鳥獣と見なすことができる。バリ島へ向かう途中、蒸し暑い車中で日本人は「腹を立てつづけ」たり、「いらいらと昂奮して」いるのに対し、この男だけは「この熱帯の嵐の中で、すこしの動揺もしめさぬばかりか、そのもうもうとした雨霧を呼吸しながら、しずかに精気を養つているとしか見えなかつた」（『死の花』一八六頁）。熱帯の蒸し暑さに対してむしゃくしゃしている日本人の姿と、呑気に目をつぶっている男の様子は対照的である。そのように考えると、前の引用にある「鳥獣が主人であつて、人間は、まねかれぬ客」という比喩は意味深長である。つまり、猿のような男はジャワの主人であり、日本人は招かれざる客なのである。こうした描写から、ジャワの自然と原住民との融合を見出していることが分かる。

このことを明示しているのが、比延の夢である。バリ島へ向かう途中、男と言葉を交わしていないにもかかわらず、比延は男と一緒に檻の中で日向ぼっこしている夢を見る。[19] 現実世界では檻の外で猿を覗いていた比延が、男と二人で檻の中にいる夢を見たことを考えると、彼の心のどこかに、自分もこの男と同類だという考えがあるのだろう。「おりの中で日向ぼつこし

19「はげしい雨風の音のなかで、さつきからうとうとしていたらしく、この男と二人でスラバヤの類人猿のおりの中で日向ぼつこしている夢をみていたような気がした」（阿部知二『死の花』新文芸社、一九四七年九月、一八九頁）。

ている」のは、自然の恵みを享受することを意味している。「おりの中」というのは、比延もこの男も動物になるということであり、動物に霊が宿っているのである。あらゆる植物や動物に霊が宿るというのは、典型的な原始アニミズムである。阿部は『火の島』で次のように書いている。

かなり典型的な原始アニミズムがジャワに残り、まして東のバリ島などには溌剌と生きてゐる。それはもちろん高邁な自然観といふものではないが、やはり東洋の土に匂ひ出たものであつて、侮蔑のみで見る心にはなれなかつた。（『南方徴用作家叢書４』一一四頁）

「東洋の土」とあるように、こうしたアニミズムは日本とバリ島が共有しているものであり、西洋人にはないものだという。村で獅子舞と野猪の踊りを見た後、Ｋが「ここには、ほんとうの自然の文明があるのだ。これは人間のでも動物のでもない、すべての生物をふくめたところの文明が、太古からちつともおとろえずに生きのびてきてくれているのだ。――君はおどろかないか」と比延に聞くと、比延は「めずらしくない」（『死の花』二〇九頁）と答える。Ｋは不機嫌になって理由を聞いたが、比延は答えない。比延は、ＫやＦは村民の踊りに好奇心以上の激しい感情があり、それは「彼等にまつたくないもの、少くとも、彼等の祖先がヨオロッパの森林の奥に何万年か前に置き忘れてしまつたもの」（『死の花』二一〇頁）だと心の中で考えている。しかし、比延は彼らとは違う。

しかし、自分はそうでないのだ。自分のうちにないものに引きつけられるのではなく、むしろ自分の、ちよつとした「文明人」めいたうすい皮膚の一重底に、まだ生き生きとあたたかく流れているものを、この森の中の人間に見出して、その親近さにむしろ悲しみを感じている。ゆうべ見たばかりの夢のようにあざやかに、日本の西の方の村に住んでいた四つ五つかのころの察の夜のことが、いま眼のまえに見る光景と二重うつしになつて浮びあがつてくる。（『死の花』二一〇頁）

『火の島』だけを読むと、そこで強調されている日本とインドネシアの精神文化上の親近感は「大東亜共栄圏」思想を正当化するきらいがあるが、右で引用したように、戦後の作品でも続けてこうした親近感を強調しているため、これは阿部の本音だと言っていいだろう。確かに、

戦時下の阿部は、この親近感を日本のインドネシア占領と結びつけようとしていた。例えば、「バリ島の記」でバリ島の伝統文化について次のように語っている。

思つてみれば私がそこで得た「驚き」は、西洋人のそれとは全く反対のものだつた。西洋人はその珍しさにおどろき、我々はあまりに身近いものをこの天涯の島に見出したことにおどろくのである。この親愛観をもつ日本人が、在来と一変したバリ観をもちバリ研究をし、バリをみちびいて行くことをしなければならぬ。彼等があのやうに日本をよろこび迎へたのもその希望から発したことであつたにちがひない。（『南方徴用作家叢書4』二〇五頁）

バリ島の舞踊を見るとき、西洋人が感じているのは「驚き」であるのに対し、日本人が感じているのは「懐かしさ」である。上記の一連の引用から見れば、阿部のこの考えは戦時下から戦後にかけて一貫している。ただし、戦時下ではこうした「東洋の心」は大東亜共栄圏を正当化する一つの手段となる。

話を猿のような男に戻すが、彼は熱帯の嵐の中で少しも動揺を示さず、ジャワの「主人」然としていたが、別の場面で日本人の「客」を前にしたときは、「生命の火はまつたく消えていた」のである。司政官と下士官が男を払いのけようとすると、彼はただ「しずかに比延の方に身をのせかけて、ときどき眼をちらとひらいて、魅するように」（『死の花』一八七頁）比延の眼を覗き込むだけである。ところが、男が己の村に戻って「猿の踊り」を踊るとき、まったく異なる一面が現れてくる。

切りひらけた森の中には、何十人かの半裸のあらくれた男が、二組になつて対峙して坐りながら、その一人々々が叫喚をつづけ、体をゆすぶり、腕をふり、時々体をおこして肉迫し合い、そしてその全体の集団が叫喚につれて荒浪のように前後左右上下にゆれているのだが、対峙した二組は、あきらかに戦のさまをしめそうとしているらしく、一方はみな髪に紅いヒビスカスの花をつけ、一方は白いフランジパニの花をつけていて、たがいに負けまいとして声をはげしくし体を荒くゆすぶりつづけていた。（『死の花』二一四頁）

「叫喚」「体をゆすぶり」「腕をふり」「肉迫し合い」という言葉が表現しているのは、猿の

ような男の粗野で生命力に満ちた様子である。船と車で見た彼の風貌とは正反対と言えよう。比延は次のように考える。

あの、埃にまみれ、ぐつたりと萎えて、みすぼらしくよごれて、一つのぼろのかたまりとしか見えなかつた男と、この猿か悪魔かの王としてあれまわつている男とを、むすびつけて考えることは、不可能にもおもわれてきた。この森の中を出て他郷にうろついているときには、あの男の生命の火はまつたく消えていたのであつて、いまのあの姿がその本来のものだつたのだ、と自分に説きあかそうとしても無理におもわれた。（『死の花』二一六頁）

村の外をうろついているときのみすぼらしさと、村で猿踊を踊っているときの生命力の対照は比延を震撼させる。こうした、村から外に出るとその生命力が消えるという考えは「バリ島の記」でもすでに示されている。島民の伝統舞踊を見た後、阿部は次のように考える。

かつてアメリカから巨額を以て招かれたのを断つたといふが、おそらく日本に来ても十分に人を魅するに足るであらう。しかし、バリの芸術は、その豊麗な花と同じやうに、その独特の太陽の光耀と大気の熱との外では鑑賞すべきものでないかも知れぬ。（『死の花』一七九頁）

バリでないと本当の価値が見えない芸術と、村にいないと生命の火が消える猿のような男は、それ自体の居場所でないと本当の姿が見えないという点で共通していると言ってもいい。バリ島の芸術は「独特の太陽の光耀と大気の熱」のない日本に招いても鑑賞すべきものではなく、同様に猿のような男も、自らの村で本来の姿で踊っているべきだと阿部は思うのだろう。猿踊を見たその夜、比延は次のような夢を見る。

みじかい夢がいくつとなく頭の中をながれていつた。獅子や大猿や裸の女や裸の男や小さな蛇やKやFやバナナの果や飛行機や子供の踊子やヒビスカスの花や寺の門や亡くなつた祖母の顔や、そのほかいろいろのものがあらわれたのだが、それが夜明ちかくなると、多くの小さな水流がしまいに一つの大きな河になつて波うつように、一つの大きな夢に定着していつた。彼は深い密林の中にいた。木の葉が茂つて空もみえず、草が深く

て土もみえなかつた。巨大な葉や花をもつた太い幹がまわりにぎつしりとならんでおり、その木には太い蛇のような蔓が、じつさいに蛇のように動きながら、からみ合い、もつれ合い、しばりつけ合い、融けて一つになつたり、渦を巻いたりしていた。その中を、花をさした猿が飛びまわつていた。蔓はたえず空から彼のところに垂れてきて、彼の体にも巻きついてきながら、ここでは誰も何物も死なないのだよ、と、はつきりと人間の声でよびかけていた。（『死の花』二一九頁）

茂った木の葉、深い草、巨大な葉や花はジャワの自然を象徴している。蔓が蛇のように動き、絡み合い、縺れ合い、縛り付け合い、融けて一つになるという描写は、ここの植物は動物と融け合っていることを示している。また、蔓が空から比延の体に巻きつきながら「ここでは誰も何物も死なないのだよ」と人間の声で呼びかけることは、二つの意味を含んでいる。一つは、「誰も何物も死なない」世界は現実的には不可能であるため、「ここ」は幻の世界だということ。いま一つは、蔓が「人間の声」で呼びかけていることから、植物は人間と融け合っている。さらに、花を挿している猿は明らかに猿のような男のことを指しており、男は動物と人間とが融け合っていることを示している。このように見てくると、比延が見た夢は、植物と動物と人間がまったく一つに融け合っている、現実には不可能な幻の世界である。また、蔓の中で飛び回っている猿と蔓に巻きつかれている比延は対照的で、ここの主人はこの密林で融け合っているすべての生物であり、比延は外来者であることを暗示しているだろう。

翌日、比延は迎えに来た吉備に「もう僕は、バリから一日も早くにげ出したくなつた」（『死の花』二二三頁）と言う。村へ行く途中、比延は檻の中で猿のような男と一緒に日向ぼっこしている夢を見るが、猿踊を見た後で、バリ島を早く逃げ出したくなる。それは比延が、生命力満ちた姿で踊っている猿のような男はこの現実世界と隔離された村で自由に「飛び回」るべきであるのに対し、日本人はあくまでも外来の侵入者であると考えているからである。

## 5　おわりに

一九三七年一二月三〇日の『東京朝日新聞』朝刊に、阿部の「歳末の対話（1）　時局と文学との関連」という文章が掲載されている。ここで阿部は、甲と乙の対話形式で時局と文学に関する討論を書いている。甲は、一九三七年は歴史変動の激しい年で、「文化も変わるにちがひない」ので、「文学にもその衝撃は激しかつたことだらう」と言う。これに対して、乙は次のように答えている。

現象は変わつた。文化人も、相応の覚悟をしたり、相応に身を処したり転したりした。その文化人の転変は、悲劇か喜劇か。――喜劇と観ずるところに、ひよつとしたら、歴史を貫く不動のヒューマニテの姿がつかめる糸口はないかな。（中略）歴史上の変動期にも人間の、真理や芸術への探究の方向が変わつたことは無いぢやないか。人間性（ヒューマニテ）がいつ変わつたか。変わりはしない。文学にそれ以外の根本題目はない。

このように、徴用前の阿部は時局と文学、そして時局と作家の関係について考え、文学における「不動のヒューマニテ」、「変わらない人間性（ヒューマニテ）」を強調している。本章では戦時下に軍部の要請を意識しながら創作した紀行文・エッセイ集『火の島』や戦後の小説集『死の花』を取り上げたが、これらの作品に見られるジャワ文化への興味、オランダ人学者の保護、そして現地人の文化の尊重は、阿部が強調する文学における「不動のヒューマニテ」の具体的実践と言えよう。そして、こうした創作意識は戦中・戦後を通して貫かれている。

戦地徴用される前に、阿部のように真理や芸術への探求の重要性を唱え、戦時下においても文学の「変わらない」「根本題目」を強調する作家は数少なくないだろう。しかし、一旦戦争に巻き込まれ、文学創作に政治性を纏わせなければならない状況になったとき、初心を忘れることなく作品を書き続ける作家はどのくらいいるだろうか。こうした点からも、阿部知二は評価されるべきだと考える。

## 第一部まとめ

第一部では、陸軍報道班員としてインドネシアへ派遣された北原武夫と阿部知二の徴用作品について、テクストを分析しつつ考察した。ここで明らかになったのは、二人とも、徴用作品には、戦中から戦後を貫く「何か」がある。それは、北原の場合は「文学の純粋さ」であり、阿部の場合は「文化の重要さ」である。

戦地徴用は作家にとって「非常時」であることは言うまでもない。また、徴用作家は軍部が規制する範囲で創作活動を行わなければならない。しかし、だからこそ、そうした状況下での徴用作家の対応は注目に値する。北原は戦前から「非常時の文学」について言及していた。一九三九年八月号の『文芸』に発表された「文学者の精神」には、次のような一節がある。

> 戦争がはじまった時、今は恋愛小説を書いている時代ではないなどと叫んだ一部の作家が、今日ではどんなものを書いているか、試みに考えてみたまえ。与えられた現前のものを全的に受容すること、平時も戦時も、文学者の覚悟というものはこれ以外になく、また、真の思想というものは、いつもこういう全的な受容のうちにこそ育くまれるものだ。（中略）現在の文学界がもし混乱しているとしたら、この混乱そのものこそ文学が「新しく生きる」ための何よりの糧ではないか。（『北原武夫文学全集第四巻』一一八頁～一一九頁）

「文学者の精神」とは、戦時下という現実を否定しない代わりに、文学を新しく作り出すことである。二年後に南方へ徴用された北原は、この主張を守り抜いたのであろうか。第一章で論じたように、北原は徴用中、大東亜共栄圏に関して仲間と議論していた際に、自分でも気づかないうちに内面化されていたナショナリズム的心性という「想念」に襲われた。また、南方からの帰還後に書いた「薔薇について」では、文学の本質は「一輪の薔薇の美しさを描くこと」だという、もうひとつの「想念」に気づいた。南方体験によって北原のうちに潜むこれらの「想念」が発現したのは、彼の戦前からの文学観と無関係ではなかろう。

無論、「文学の純粋さ」を重視する北原でも、戦時下では軍部の検閲という制約からは逃れられなかった。北原は戦後になって「カリオランの薔薇」を改稿したが、戦時下では

戦争への妥協というより、保身できる範囲で「文学の純粋」さを保って創作していたのである。

北原と同様に、阿部知二もナショナリズム的心性をもっている。戦時下の『火の島』でインドネシア文化に着目するのも、オランダ人学者を保護するのも、敵味方を超えて一人の知識人として科学と文化を大切にしていることの表れである。日本が西洋と異なり、インドネシア文化との間に親近感があるというのは戦後の作品でも変わっていない。戦後の小説「猿」では「東洋の心」や「東洋の土」を強調することなく、日本とインドネシア文化の親近感は、日本がインドネシアに侵入する理由にはならないという考えを示している。しかし戦時下では、検閲を意識して阿部はそれを「東洋の心」に帰している。

また、本論文で取り上げた北原の『雨期来る』と阿部の『火の島』は、戦争協力の観点から読めば、まったく異なる印象を受ける。戦意昂揚の言葉が随所に見られる『火の島』と比べて、『雨期来る』にはそうした言葉はほとんど見られない。北原と阿部は一緒にインドネシアへ行き、そこで長期間仕事を共にしている。二人は、蘭印副総督で反日的政治家ファン・モオク宅に敵性文化資料の調査接収に訪れる機会があった。この日のことは、二人とも作品に記している。両者を比較すると、阿部がモオクを「煽動的政治家」「蘭印のチャーチル」と貶める表現を多く用いているのに対して、北原はモオクが慌てて逃げ出した後の散らかっている家の様子を見て、「僕等は、暫時、思はず胸がつまつて立ちどまつてしまつた」（『雨期来る』八九頁）と記している。

ここだけを読むと、南方徴用中、北原は戦争に協力しなかったが、阿部は協力したと安易に結論を下してしまいかねないが、徴用文学を読む際には次の二点に注意する必要がある。ひとつは徴用時の作家の身分ないし立場、別の言い方をすれば、軍部はどのような意図でその作家を選んだのかということである。同じ陸軍報道班員でも、当時の阿部は悪質の自由主義者、英米主義者と見られていたため、北原よりも戦争協力を前面に押し出していた。もうひとつは、作品の片言隻語を取り上げるより、作品全体を把握すべきだということである。第二章で言及したように、『火の島』には戦争協力的な言説が見られるが、いずれも取ってつけたような印象を受ける。そのため、インドネシア文化の詳細な紹介や、オランダ人がインドネシアで行った研究の重要性を強調しているところにこそ注目する必要がある。

徴用作家は、自身が関心を持っていることであっても、軍部の検閲など戦時下の制約を意識して安全な範囲で作品を書いている。戦後になって、戦時下の作品では書けなかった

ことや、隠されていた本音を書き上げているのは北原や阿部に限らないが、戦中から戦後を貫いて自らの主張を絶えず書き続けたという点で、北原と阿部は評価されるべきである。

# 第三章

## 海野十三における南方徴用――科学小説を視座として――

### 1　はじめに

一九四二年一月から五月まで、海野十三は海軍報道班員として徴用された。軍艦「青葉」に搭乗し、パラオ、トラック、ラバウルへ赴いた。この四ヶ月間の徴用体験を題材として書いたのが、従軍日記『赤道南下』（大日本雄弁会講談社、一九四二年一二月）とエッセイ集『ペンで征く』（日本放送出版協会、一九四二年一二月）である。海野の南方徴用に関する研究はまだ十分になされていないのが現状であり、現時点で見られるのは吉川麻里「海野十三の南方徴用体験――科学力の畏」[20]のみである。「あまりに過酷で重い現実が小説家海野の科学者としての顔を切り裂いたのである。彼は科学者である以上に愛国者であった」（『南方徴用作家』一九七頁）と吉川は指摘する。しかし、海野の徴用前の思想や南方滞在中の出来事が作品中でどのように反映されているのか、あるいは戦後作品にどのような影響を与えたのかといった問題は依然として残る。本章では、海野が徴用中に書いた『赤道南下』『ペンで征く』だけではなく、戦前と戦後の作品も視野に入れて、海野にとって南方体験が持つ意味と海野文学における位置付けを探ってみたい。

### 2　科学者と愛国者、二つの顔から見る戦争

一八九七年、海野は徳島藩医の家に長男として生まれた。父親の仕事の関係で転居した先で神戸一中に進んだ。早稲田大学で無線電信学を学び、卒業後は逓信省電務局電気試験所で真空管の研究をした。一九二〇年代後半から作家活動を始めた海野は、科学者としての知識に裏打ちされた軍事小説で人気を博した。その後、軍とのつながりを持つようになり、海軍の作家徴用母体となる外郭団体くろがね会と深く関わるようになる。一九四一年八月一七日、『東京朝日新聞』の朝刊に「くろがね会愈発足」というタイトルで次のような記事が掲載された。

> 海の護り、海洋知識の普及徹底が叫ばれてゐる折柄、大下宇陀児、海野十三氏らが音頭をとつて大衆と密接な接触をもつ作家の間に「くろがね会」が設立され、十六日午後

20　木村一信、神谷忠孝編『南方徴用作家』（世界思想社、一九九六年三月）。

五時半から赤坂幸楽で設立経過報告会が開かれた。

同夜は海防義会の上田海軍中将海軍省田代中佐をはじめ作家および関係者約四十名が参集、差し当り来月十日盛大に結成式を挙行することになつた。

南方に発つとき、海野は自身の「くろがね会員」という身分を強く意識している。一九四二年七月、海野はくろがね会の会報『くろがね会報』に「報道班員の作家」を発表し、出発当時の心境を次のように振り返っている。

くろがね会員である手前、大いに頑張って戦闘報道について手柄を樹てて来たいという責任感で、私の両肩はリュックサック以上に重かった。

全くの話、くろがね会員であるという責任感が、私をどれほど勇敢にし、頑張らせたかわからない。私は進んでくろがね会員となった者であるが、会に対しうんと、お礼をいわなくてはならないと思う。(『ペンで征く』二三三頁)

ここから、海野のくろがね会への帰属意識は明らかである。石川巧の調査によると、『くろがね会報』は時局に即したスパイ小説や海洋冒険小説の紹介記事を載せる一方で、検閲を課された当時の一般的な出版物には掲載されないであろう原稿が散見されることから、当局による事前検閲の対象外だったと推測される(日本近代文学会春季大会、二〇一八年五月二六日)。つまり、国民に言論統制を敷きながら、海軍中枢の一部には自由な表現の場が許されていたということである。ここから、くろがね会と当局の関係の深さが窺える。

くろがね会の活動に関していまのところ確認できるのは、『くろがね会報』のほかに「海軍報道班作家前線記録」シリーズとして博文館から出版された『進撃』(一九四二年一二月)と『闘魂』(一九四三年二月)、そして月刊誌「くろがね会叢書」の編纂・刊行がある。『進撃』には海野の「南海戦塵日記」が、『闘魂』には「この目で見た海鷲の強さ」が載せられている。一方、「くろがね会叢書」は全二七輯発行されたが、国内図書館による所蔵は数えるほどで、全貌を把握することは難しい。現時点で確認できるのは、第五、十、一二、一三、一四、一五、一七、一九、二〇、二一、二二、二三、二六、二七輯で、そのうち海野の作品は第十輯(一九四三年十月)に「不思議な黄嬢」、第二七輯に奇想・科学小説輯として「見えざる敵」「軍用鮫」「時間器械」「スパイ学校の卒業試験」「特許多腕人間方式」「第四次元の男」の六篇が収録さ

れている。「くろがね会叢書」の巻頭には、「本書は海軍省恤兵部及び報道部の直接指導の下に、海軍省外郭団体「くろがね会」の編纂した前線読物です。皆様の戦陣の余暇を幾分でも御慰め出来れば誠に幸甚です」と、刊行の目的が記されている。また、表紙には「海軍軍用図書 海軍部外持出厳禁 不許部外配布閲読」という一般読者に流出させないよう注意喚起する文書が記載されており、海軍内部の雑誌だということがわかる。

さらに一九四三年末、南方から帰還した海野の主導で海軍報道班文学挺身隊が結成された。「くろがね会」と提携し、「戦友愛に基く同志的結合のスローガン」のもとで海軍の要請に応えて文学の分野で協力した。ここで海野は従軍報道に対して多分に意欲的な姿勢を見せている。一九四一年秋、海野のもとに徴用令書の「白紙」が届いた。海野はその時の心情を『軍艦旗の下に』(偕成社、一九四三年一一月)のなかで次のように回想している。

> ああ、ずいぶん待った。しかし待ったかいがあった。私のような作家も召されたのだ。そして戦地へやってくださるのだ。海軍の一員として、勇ましく出陣する光栄の日が、ついにほんとうに来たのだ。私は、白紙をうやうやしくおしいただいて、家内といっしょに座りなおし、はるかに皇居の方にむかい、感激の涙とともに、うやうやしくおじぎをいたしました。(「軍艦旗の下に」『海野十三全集 別巻1』三一書房、一九九一年十月、七八頁)

徴用に対する感謝と光栄の気持ちは、右のような公に出版された作品に見られるだけではなく、徴用中に妻へ宛てた書簡にも繰り返し見られる。一九四二年一月一日に東京駅を出発した海野は、四日付の手紙で次のように書いている。

> きのうも満員電車の中で思ったことだが、私よりも若い人がたくさん乗っていた。また、立派な紳士もいた。この多くの人たちに先んじて私が択ばれ、第一線に派遣されるということの如何に光栄にして、責任重大なるかを痛感した。家門の誉とは、このことであろう。(中略)祖先の血は、今私の脈管に沸々として溢れ、たぎりつつある。上、陛下の御楯として、又下っては何百人何千人、否、何万人という多くの国民の楯となって征く身は蓋し、誉の一字に尽きる。今こそ武士の裔らしく戦ってくるぞ。(「戦地から妻へ」『海野十三全集 別巻2』一一四頁)

一八九七年生まれの海野はこの時すでに四五歳になっていた。「高齢」にもかかわらず、若い人たちに先んじて徴用されることは、以前から海軍戦争に積極的に関わっていた海野にとって光栄の至りであった。右の手紙からは、その愛国者としての姿が読み取れる。

一方、科学研究者という経歴を持ち、科学小説家として作家活動を始めた海野は、科学力の重要性を様々な場面で強調している。『地球盗難』の「作者の言葉」（ラジオ科学社、一九三七年四月）では、科学力について次のように述べている。

> 国際関係はいよいよ先鋭化し、その国の科学発達の程度如何によってその国の安全如何が直接露骨に判断されるという驚くべくまた恐るべき科学力時代を迎えるに至った。（中略）世界列国は今や国防科学の競争に必死であり、しかもその内容は絶対秘密に保たれてある。いよいよ戦争の蓋をあけてみると、いかに意外な新科学兵器が飛び出してくるか、実に恐ろしいことである。開戦と同時に、戦争当時国は手の裡にある新兵器をチラリと見せ合っただけで、瞬時に勝負の帰趨が明かとなり即時休戦状態となるのかもしれない。（『海野十三全集　別巻1』三九四頁）

ここから、「戦争は科学力次第だ」という主張が読み取れる。また、一九三七年に開催された「科学者ばかりの未来戦争座談会」（『新青年』一九三七年八月号）では、海野は司会者として、未来の戦争や新兵器などをめぐって各分野の五人の博士と議論した。そのなかで、新兵器に関して、「だから結局そういう新しい兵器が一つあれば勝ちですね」と発言している。

戦争の勝負あるいは国家の未来を科学力に託すという海野の主張は、徴用前の少年向け科学小説「浮かぶ飛行島」（『少年倶楽部』大日本雄弁会講談社、一九三八年一月～一二月）をはじめ、「太平洋魔城」（『少年倶楽部』大日本雄弁会講談社、一九三九年一月～一二月）や「地球要塞」（『譚海』一九四〇年八月～一九四一年二月）を貫く主題である。

ここで、一つの疑問が浮かび上がってくる。それは、これほど科学力の重要性を訴える海野が、当時の日本の科学力をどのように捉えていたのかということである。実際、一九三九年九月二四日から一九四〇年一二月三一日まで『大毎小学生新聞』に連載した「火星兵団」の「作者の言葉」では、「わが国の科学力は、正直な話が、たいへん貧弱であります。（中略）わが国一般国民の科学力は、とても一等国らしいところはなく、三等国以下ではないか」（『海野十三全集　第8巻』四三二頁）と述べ、日本の科学力低下を懸念している。こうした懸念は作品のなかでも表現されている。「浮かぶ飛行島」「太平洋魔城」「地球要塞」の三作品ではいずれも、

新しい技術を持つのは他国あるいは地球外生物であり、日本は攻撃対象である。言い換えれば、日本は敵からの攻撃を防御する側である。もちろん、この設定は戦時中の日本が主張していた「自衛のための戦争」という考え方に重なってはいるが、科学研究者としての経歴を持つ海野が、日本の科学力の後進性にある程度自覚的であったことも背景にあると考えられる。例えば「太平洋魔城」では、ソ連の共産党太平洋委員長ケレンコが日本を攻撃する理由を次のように述べている。

われわれは日本をのっ取るために、おどろくべき熱心さで長い間共産主義の思想をふきこんで来た。が、無駄であった。君等のいう日本精神は、びくともせず、この方法によるわれわれの計画は、完全に失敗してしまった。やはり、武力戦よりほかはない。（『海野十三全集 第6巻』四五四頁）

日本人の精神があまりに強いため、武力で攻撃しなければならないというソ連長官の口を借りて、海野は日本精神を称賛している。しかし、武力戦になると、海底要塞を持ち、しかも恐ろしい新兵器で武装しているソ連に対して日本は勝ち目がない。結局、主人公と仲間たちは石油を利用して大爆発を起こし、海底要塞を破壊して日本を守ることに成功する。このように、日本の危機回避は科学力ではなく、主人公たちの機転によってなされる。海野は小説の結末を次のように締めくくる。

日本の将兵はつよい。軍艦もすばらしい。しかし、これだけでは十分でない時代となった。太平洋の平和を永久にたもつには、どうしても正義の国日本が、今までにない科学兵器を発明することが大切である。（『海野十三全集 第6巻』五〇五頁）

同様に、『浮かぶ飛行島』（大日本雄弁会講談社、一九三九年一月）の「作者の言葉」でも、将兵の精神よりも科学力の重要性を強調している。

科学力がすぐれてゐなければ、どんなに立派な大和魂があつても、どんなに大きな経済力があつても、これからの戦争には勝てません。ですから私は、これからの日本人である皆さん方によくお願ひしておきます。どうかこの作中にあらはれる浮かぶ飛行島よりも、もつと〳〵立派な科学兵器を皆さんの手で造つて下さい。（『浮かぶ飛行島』講談社、

一九七〇年五月、三頁）

戦争に勝つためには精神の強さより科学力だという、海野の戦前の主張がここでも明確に示されている。海野のこうした一国民として日本を愛する面と、一科学者として科学力を強調する面は、南方へ徴用されるまでは彼のなかで衝突することなく共存していた。一九四二年一月、海野はこの二つの〈顔〉を持ちながら南方へ発った。それまで戦争に関する作品を数多く書いていた海野は、実際の戦場で何を見、何を感じたのだろう。

### 3　徴用中における分裂

海野は徴用令書を受け取ったとき、光栄な気持ちを抱くとともに、「征けば再び帰るまいと覚悟を決め」[21]た。こうした覚悟のうえで、海野は体調不良のなか、二十四篇五百六十枚に達する報道文を書いて大本営海軍報道部へ送った。また、帰還後間もなく、海軍報道班員の具体的な仕事について、これから戦地へ出発する徴用作家たちの参考に供するため、「報道班員の作家」（『くろがね会』一九四二年七月）を書いた。海野はまず、「特別陸戦隊についていて攻略戦や掃蕩戦に出たことと、軍艦にのっていて出撃したことと、占領地にいて掃蕩戦や防衛戦をやっていたこと」[22]を挙げ、「作家たるものは、帰還後ゆっくり小説化する等のことによって任務を果たせばいい、という考えだけでは足りないのであって、出来るだけ速かに、報道文その他を以て自分の読者に呼びかけ、これを国策に向って奮い立たしめることが、報道班員としての一つの重大なる仕事なのである」[23]と徴用作家の使命について述べている。実際、南方徴用中の海野は艦内で海軍兵士とともに生活し、一緒に戦地に入って前線の様子を自分の目で見て作品の中に描いている。

一九四二年一月二三日、オーストラリア陸軍との激しい戦闘が行われ、海野は海軍兵士に守られてカビエンに上陸した。かなり短い時間で上陸に成功したことについて、海野は「豪州軍の弱さ」[24]をあらためて確認し、上陸後、島民たちが「ニッポン、バンザーイ」と叫びながら、

21「筆者の言葉」（『ペンで征く』十三舎、二〇一一年七月）二七七頁。
22「報道班員の作家」（『ペンで征く』十三舎）二三三頁。
23「報道班員の作家」（『ペンで征く』十三舎）二三六頁。
24「ビスマルク諸島攻略記」（『ペンで征く』十三舎）三〇頁。

日本軍を歓迎する光景を目にする。こうした経験は海野に日本の勝利を確信させた。二月六日の妻に宛てた手紙には、「戦況は、だんぜん皇軍の勝ちで、敵はゲリラ戦を大仕かけにやるくらいに止っています」[25]とあり、日本の軍事力に多大の信頼を寄せていることがわかる。

また当時の海野は、「南進とは、〇〇を占領し、〇〇諸島を制圧し、そして鯨の海、南極に達したときに、初めて南進したといえるのである。このラバウルに来たことは、ようやく地球の真中に顔を出したというだけのことで、これを南進というのはあたらないぞ」[26]と述べ、南方進出への野心を示している。「ビスマルク諸島攻略記」におけるある司令官の言葉は、この野心を実現するためには科学力が不可欠であるという海野の思想を代弁したものといえる。

これからの日本人は、大いに勉強して常識を持たねばならぬ。殊に、高度の科学知識を持つようにしなければならぬ。そうすることによって、初めてこの資源は日本人のものになることを約束されるのだ。そして日本人の知識の水準が全体に高まれば、そこに初めて多民族の指導者としての実力が備わってくるわけだ。大いに科学知識を取り入れて貰わねばならぬ。（『ペンで征く』四〇頁）

しかしながら、三月末からオーストラリア機に入れ替わり、「空の要塞」と呼ばれるボーイングB17型の超重爆撃機を持つアメリカ軍が攻撃してきた。もともと新兵器に興味を持っていた海野はこの「空の要塞」をよく知っており、報道文「この眼で見た海鷲の強さ」（『新青年』一九四二年七月）で次のように紹介している。

「空の要塞」は、米国軍としては安全この上ない不撃墜機として自慢のものであった。ということは、いくら機銃で撃たれても、機体に孔ができない。普通はガソリン槽を撃たれると孔があいてガソリンが漏れはじめる。それに引火して飛行機は火達磨になる。ところが、「空の要塞」のガソリン槽は機銃で撃たれると、もちろん機銃弾はガソリン槽を撃ち貫くが、弾がその槽の壁体を貫通し終ると途端にその孔が内側からぴたりとふさがってしまう。そういう仕掛になっている。（「この眼で見た海鷲の強さ」『ペンで征く』

25「戦地から妻へ」（『海野十三全集　別巻2』三一書房）一一九頁。

26「ビスマルク諸島攻略記」（『ペンで征く』十三舎）四二頁。

一二七頁）

敵軍の新兵器を詳しく描いているところから、海野の軍事と科学に対する情熱を垣間見ることができる。しかし、この「空の要塞」を日本の海鷲が撃墜する。

ところが、わが海鷲はこれに追いついて、ちゃんと撃墜した。一度や二度でない。追いついたが最後、毎回ちゃんと撃ち落としている。敵の方では、そんな筈はないがと首をひねっていることであろうが、事実じゃんじゃんと「空の要塞」は撃墜せられているから、敵の基地に帰ってくる数は減っているのである。

わが海鷲勇士の猛攻ぶりはものすごい。一度でいかなければ、敵の機銃弾の雨下集中をものともせず、なおも喰い下がって、二撃三撃と加え、必ず墜している。「空の要塞」の下から〇回機銃弾で突き上げて、これを撃墜したという念の入った功名談もある。こうしてラバウル来襲の敵機は、わが海鷲に追いかけられ、大体十七分後から四十分後までの間に撃墜されていたのであった。（『ペンで征く』一二八頁）

日本がどのような新戦略をとり、どのような新技術を利用して敵の新兵器を撃墜したのかについての記述は非常に曖昧である。代わりに兵士たちの「猛攻ぶり」を強調し、まるで精神上の強さで撃墜したかのように記している。

また、一九四二年四月にはオーストラリアへアメリカ陸軍の航空隊がやってきた。新鋭のマーチン機B27型三〇〇機と、随行する操縦士や整備士が多数タウンズビルに到着した。海野はマーチン機の速さとアメリカ空軍将兵の勇敢さを確認し、「従来の濠洲空軍の攻撃とは全然異な」（『ペンで征く』一三五頁）るとしている。しかし、この「不敗の筈」のマーチン機は次々と日本の海鷲に撃墜されていった。その原因について海野は次のように述べている。

これはわが海鷲が「見敵必墜」の攻撃精神に燃えて居り、メリケン共とはその点で全然比較にならぬばかりでなく、わが戦闘技術に至っては支那事変ですっかり実践的に奥義を極めて居り、その上にわが戦闘機は頗る優秀ときているので、これは敵がやっつけられるのが当り前であったのであった。（『ペンで征く』一三四頁）

ここでも日本軍の作戦技術の詳細を省略し、精神力の重要性を強調している。

南方から帰還した直後の一九四二年五月二二日から二六日まで、『東京朝日新聞』朝刊に「報道班員：海の実戦座談会」という記事が載せられている。座談会の司会は大本営海軍報道部員の冨永謙吾で、海野は山岡荘八とともに作家として出席した。五月二二日の第一回で、海野は冨永にビスマルク群島やソロモン群島方面の状況について質問された。海野は「この眼で見た海鷲の強さ」同様に、アメリカ軍の勇敢さとマーチン機の速さを説いた。そして日本軍の対策に関して、「こちらの飛行機は敵が後ろから射つてきてもくるりと宙返りを打つて、すぐに有利な態勢に直れるだけの性能と訓練を持つてゐる、さらにわが航空隊将校の技倆、精神力がまた比較にならぬ程優秀なものです」（『東京朝日新聞』朝刊、一九四二年五月二二日）と述べている。

これは、日本軍が敵機を撃墜して勝った要因を説明しようとしているようにも見えるが、内容をよく見ると疑問に思われる点がある。敵機を撃墜したのは日本人将校たちの「精神力」の強さだとする説は分かるが、具体的にどのような「技倆」で強靭なアメリカ陸軍機を撃墜したのかについては述べていないのである。その背景を明らかにするために、先に見た海野の発言にある「訓練」という表現に注目したい。こうした発言は、くろがね会が編集した『日本海軍の話』（四方木書房、一九四三年七月）に見られる言説と一致している。

ではそんなにも日本の飛行機はすぐれてゐるのかといふとさうではありません。英国の「スピットファイヤー」米国の「P三九」などと来てはそれこそ立派なもので、そんなものに比べたら海軍の〇〇戦闘機にしても、陸軍の隼号などにしても、戦には勝つてゐますが、英国のや米国のにくらべては決して勝れては居ないのです。それだのに、どうしてさうわけなく勝つのかといふのに、それが前にもいつたやうに日本人としての乗つてゐる人の気力と腕前が非常にすぐれてゐるからなのであります。日本人が世界の人種の中で一番戦闘機の空戦に好いと言ふことが今度の戦争で証明されたことは実に将来の日本のため愉快なことではあります。（六六頁）

引用したのは「海軍の訓練」という章である。ここでは海軍兵士たちの訓練の厳しさ、そして何よりも海軍精神、いわゆる「心の訓練」の重要性が強調されている。海野はくろがね会と深く関わっていたことから、こうした日本海軍の訓練事情に精通していたと思われる。

そのほか、海野は数多くの報道文で日本兵士の辛抱強さに繰り返し言及している。「ペンで征く南方戦線」（『東京日々』一九四二年五月二二日）の「世界一の我慢強さ」という節では、

艦内の猛烈な暑さ、まずい食事、不眠、皮膚病などの過酷な日常生活が描かれている。そして、兵士たちが闘うのは敵兵だけではないと述べ、結末を「結局実際には、忠誠なる日本人の持つ世界無比の辛抱づよさが、常に最後の勝利を掴むのだといっても過言ではない」[27]と締めくくる。

さらに、従軍日記『赤道南下』（一九四二年一二月）では、「この辛抱強さと謙虚さによって、帝国海軍は遂に勝ったのだ」[28]と、科学者としての立場からではなく、精神主義に走ってしまったような発言が見られる。この時期に、海野のなかにあった科学者と愛国者という二つの面の調和が崩れ始めたと言えるだろう。

愛国者としての海野は日本の勝利を信じ込んでいただけではなく、「黒色の新皇民と宣撫の問題」（『大洋』一九四二年七月）で宣撫の重要性と緊急性についても強調している。「黒色の新皇民と宣撫の問題」のなかで海野は、原住民たちが英国人宣教師に対して大いなる畏敬の念を払っていることを指摘し、原住民たちの心を捕えるためには宗教が一つの利器になると主張する。英国教会と英国人宣教師に代わって日本から宗教団体が行って宣撫の仕事をするとしたら、どの宗教がいいかという問題に対して、海野は「仏教か天理教か、それとも回々教か、日本キリスト教か」[29]と考えをめぐらせる。

また、現地人たちに以前よりも幸福だと感じさせるためには、「日本に於けるあらゆる文化力を動員して、彼等をして驚異の眼を瞠らしめねばならない」[30]と考える。海野は、具体的にやるべきこととして様々な提案をしている。例えば、彼らの部落を電化してやること、アイスクリーム製造機を与えること、能狂言や紙芝居のような簡単な見世物を見せること、フットボールとテニスを教えることなどである。原住民たちは今は日本軍を信頼して軍政に協力しているが、近い将来において本当に彼らは日本の新皇民となるのだろうか。あるいは失望して、昔の英国人の政治を懐かしがるかもしれない。一日でも早く原住民の信頼を得るべきだとして、海野はこれらの提案を行っている。しかし、仏教や回々教など、本来まったく相容れない宗教を同列に並べ、「文化力」としてフットボールやテニスを挙げるこの文章に、合理性を求める科学者としての海野の姿を見出すことは到底不可能だろう。

27 「ペンで征く南方戦線」（『ペンで征く』十三舎）二一六頁。
28 『赤道南下』（中央公論新社、二〇〇三年七月）一四四頁。
29 「黒色の新皇民と宣撫の問題」（『ペンで征く』十三舎）二二六頁。
30 「黒色の新皇民と宣撫の問題」（『ペンで征く』十三舎）二二八頁。

ほぼ同じ時期、海野は本名の佐野昌一名義で「南太平洋科学風土記」（『科学知識』一九四三年四月～五月号）を連載している。「はしがき」で海野は、「題して南太平洋科学風土記といふが、実は私が報道班員として南太平洋に勤務してゐた時に見聞したあちらの事情を、科学の目を通じて思ひ出すままにくり拡げようといふのである。余り戦闘や作戦とは関係のない至極のんびりしたものになるかもしれないが、これは戦闘報道記ではないのであるから、そのつもりでお読み捨て願ひたい」[31]と述べている。各章の題目「船酔ひ」「海の色」「船と暑さ」「船と風呂」からもわかるように、南方の自然や慣習を科学者の目でまとめたものである。科学専門誌という掲載誌の性質が関係しているのかもしれないが、海野がこの文章のみ本名で発表していることは見逃せない。同時期に発表した報道文が全て海野十三名義であることと考えあわせると、彼は意識的にこの二つの〈顔〉を使い分けていたと言えるのではないか。つまり、物事を冷静に捉え、合理性を求める科学者・佐野昌一としての〈顔〉と、戦争へと突き進んで行く日本を愛し、日本の勝利を願う一国民・海野十三としての〈顔〉である。

こうした分裂は、彼が帰還後に徴用体験を題材にした小説を発表していないことと関連があると考えられる。海野は様々な場面で、徴用作家（報道班員）にとって小説を書くことが大事だと強調している。例えば、「報道班員の作家」（一九四二年七月）では、徴用作家と新聞記者の違いについて、「作家は、戦地で得た素材を以て小説に書くことが本格的の仕事である」（『ペンで征く』二三六頁）と述べている。しかし海野自身は、帰還後自身の徴用体験を題材にした小説をほとんど書いていない。確認できるのは、一九四二年一二月刊行の『ペンで征く』に収録された「機動部隊見ゆ」（初出不明）のみである。この小説の創作動機に関して、海野は『ペンで征く』の「筆者の言葉」で次のように述べている。

> これはニュース小説ともいうべき海戦小説である。この海戦は、私の属していた艦隊の行った戦闘の一つであり、当時私も軍艦〇〇に乗組んでいて、行動したのであるから、ぜひとも小説化する義務ありと感じて書いたものである。（「筆者の言葉」『ペンで征く』二七八頁）

しかし、この小説は海戦の実態をそのまま記しているだけで、「戦地で得た素材を以て小説

31『科学知識』（日本科学協会、一九四三年第四号）八二頁。

に書くこと」とは遠いと海野自身も認めている。それでは、なぜ海野は帰還後に徴用体験を小説化しなかったのだろうか。それは彼の愛国者と科学者という二つの立場の分裂が関係していると考えられる。作品を創作する際に意識的に二つの〈顔〉を使い分けるようになった海野は、一人の科学者として徴用体験を小説化することに抵抗を感じたであろう。佐野昌一名義で科学技術の普及を説く文章を書くのか、あるいは海野十三名義で徴用体験に基づいた戦争協力の作品を書くのか、これは当時の海野にとって究極の選択とでも言うべき問題だったのである。

このように、アメリカ軍の新兵器をその目で見て、徴用後期から日本の科学力不足という現実を理解しはじめていた海野は、科学者と愛国者という二つの立場の両立を放棄し、科学者としての側面を隠しはじめる。それまでは戦争の勝利を「科学力」に託すと信じていたが、アメリカ軍の新技術と新兵器を知った徴用後期からは、兵士たちの「辛抱づよさ」が勝負を決めるという非科学的精神主義に走った。こうした二つの立場の分裂による苦しさが、敗戦後の作品から窺われる。

## 4　戦後の反省と創作

一九四五年八月六日、アメリカのB29少数機が広島に原子爆弾を投下したが、当日の大本営はこれを「新型爆弾」と発表した。海野は「もともとアメリは科学技術について一流の国であ」ることを知っており、新兵器を導入することは「予想された事であって、今さら驚くに当たらない」[32]と八月九日の日記に記している。このときの海野は、まだ「新型爆弾」が原子爆弾だとは知らず、敗戦の気配すら感じていなかった。日記には次のように書かれている。

> それと正面から取組み、それぞれの工夫において被害を最小限度化すべきである。政府及び軍部に対して希望するのは、よろしく士気を昂揚するようなことをやってもらいたいことである。たとえばB29を国民の目の前で撃墜するが如きことである。（『海野十三全集　別巻2』七〇頁）

ところが十日、アメリカ大統領のトルーマンが演説で「原子爆弾」だと言明すると、海野

32「空襲都日記」（『海野十三全集　別巻2』三一書房）六九頁。

は「戦争は終結だ」[33]と、日本の敗戦を認めざるを得なかった。そして、その日のうちに一家心中を決意し、遺書も作成したが、作家の湊邦三による説得や青酸カリの入手が困難だったことから思いとどまった。[34]海野は八月二六日の日記で、「海野十三は死んだ。断じて筆を取るまい。口を開くまい。辱かしいことである。申し訳なき事である」[35]と述べている。注目したいのは、「海野十三は死んだ」の「海野十三」をどのように理解すべきかということである。前述したのように、彼には「軍国主義者・海野十三」と「科学者・佐野昌一」という二つの〈顔〉があった。ここで「死んだ」のは前者だったと考えられる。

それまで日本の勝利を信じていた海野は、敗戦と同時に自身の精神的基盤が失われ、もはや今までのように「海野十三」名義で作品を書き続けることはできないと考えたのであろう。実際、敗戦後に発表した作品の多くは「丘丘十郎」というペンネームで発表している（ただし、海野十三の高い知名度を考えてか、単行本出版時には海野十三に戻している）。敗戦後の海野に残されていたのは、科学者という立場だけだったのである。

敗戦二ヶ月後の一九四五年一一月、海野は「丘丘十郎」名義で『富士』に戦後初となる短篇小説「大脳手術」を発表する。自分の体の部位があたかも部品のごとく自由に売買される世界で、ある男が金のために自身の器官を一つずつ売り飛ばし、その代わりに安価な器官を移植する。そして男はゴリラになり果て、檻のなかに入れられてしまう。これらはすべて、戦時中に受けた弾片によって脳髄に圧迫障害を負った男の妄想である。しかし、たとえそれが妄想であっても、戦争による障害で体の部位を一つずつ売り飛ばしてしまう男の姿は、戦時中に科学者としての立場を徐々に失っていった海野を連想させる。次に引用する男の言葉は、海野の代弁と言っていいだろう。

> 或るとき、私は図らずも一つの問題に突当った。それは外でもない。こうして容貌も変り、声も変り、四肢から臓器までも変り果てた現在の私は、果して本来の私といえるかどうかという問題であった。（中略）ああ、恐ろしいことだ。私はとんでもない過誤を犯した。自己を愛するためにあんなにまで苦労を重ねながら、知らず識らずのうちに、そ

33「空襲都日記」における八月十日の記述。（『海野十三全集　別巻2』三一書房）七二頁。
34「海野十三　年譜」（『海野十三全集　別巻2』三一書房）六五六頁。
35「降伏日記」（『海野十三全集　別巻2』三一書房）七八頁。

れと反対に自己を破壊し尽していたのだ。（『海野十三全集 第11巻』一一四頁）

戦争によって自身の科学的合理精神を否定した海野も、「知らず識らずのうちに、それと反対に自己を破壊し尽して」おり、男との類似性を見出せる。前述したように、海野は「海野十三は死んだ」と書いて、戦時中の軍国主義者としての自己は死んだと宣言した。同年一二月三一日の日記には、「我が途は定まれり。生命ある限りは、科学技術の普及と科学小説の振興に最後の努力を払わん」[36]と記している。この科学者として作品を創作しようという決意は、敗戦後初となるエッセイ「原子爆弾と地球防衛」（『光』一九四五年十月）に表れている。ここで海野は戦争と各国の科学力について論じ、地球人類の未来の問題なども扱っている。八月六日に投下された新型爆弾が原子爆弾だと知ったときの、海野の心境は次のようなものであった。

率直に告白すれば、アメリカが原子爆弾の製作に成功したと知ったとき、私は敵味方の関係を超越し、広島の惨害をも超越し、科学技術史上画期的なるこの成功に関しアメリカに対し祝意と敬意とを捧げざるを得なかった。そして又たいへん羨ましく感じたことも告白せねばならない。（『海野十三全集 別巻1』三〇六頁）

もちろん、ＧＨＱによる検閲を意識しながら書いたものと考えられるが、これは同時に海野自身の本音でもあったと思われる。物理学の知識を持つ海野は、原子爆弾が成立する理論上の証明が終わり、あとはいかに技術化するかの段階にまできていることをすでに知っていた。しかし、それが実現するのは「航空機の発達の過程等から考えて、まず三十年後と」思っていた。そのため、わずか二十四年で実現したことへの驚きや科学者としての羨望は事実だと思われる。その一方で、戦時中の日本の科学力については次のように述べている。

敗戦前、否、大東亜戦争勃発当時のわが科学技術界の動脈硬化乃至痴呆性症状は正しく三等国相当であったことは、われら斯界に呼吸している者にはよく分っていたことであって、政府や軍部が日本は一等国だという宣伝をなし、赫々たる勝利を讃うるに拘らず、われらは始めからこの戦争の前途に横たわっている大困難を算定していたのである。そ

36「降伏日記」（『海野十三全集　別巻2』三一書房）八六頁。

してそれは今日、敗戦という事実によって、極めて明瞭に証明せられた。（『海野十三全集 別巻1』三〇六頁）

海野は、戦争中の段階ですでに日本の科学力の後進性に気づき、勝算がないことを認識していたという。しかし問題は、日本は必ず勝つという戦時下の主張と右の引用のいずれが本音で、いずれが建前かということではなく、これを海野の戦時下における分裂による矛盾として捉えるべきではないかということである。前述したように、太平洋戦争勃発当初や南方徴用以前の作品を見ると、海野は日本の科学力の後進性にある程度自覚的であったことが読み取れる。しかし徴用前期になると、日本軍の戦闘時の強さや順調に進む占領が、海野の科学者としての面を覆い隠していく。そして徴用後期には、日本の軍事力の真実を知った彼は矛盾を感じながらも、やむを得ず軍国主義に走る。戦後になって振り返るとき、海野は戦時下における自身の軍国主義的な言説への言及は避け、日本の科学力に対して疑問を持っていたことだけを述べる。これは敗戦後の情勢から考えれば、当然だと言えるだろう。

しかしここで注目したいのは、敗戦後における海野の科学力に対する態度の変化である。前述したように、戦前・戦時下の海野は子供向けに書いた作品など、様々な場面で科学力の重要性を強調している。ところが、戦後の海野は科学の二面性を書くようになった。敗戦八ヶ月後の一九四三年三月から翌年の二月まで、海野は「丘丘十郎」名義で『子供の科学』に小説「四次元漂流」[37]を連載している。

女性科学研究者の雪子は、永年にわたる努力を重ねてようやく三次元世界から四次元世界に飛び込むことに成功したが、彼女はそこで漂流する身となってしまう。一生懸命三次元世界へ泳ぎつこうとしてもなかなか戻れず、苦しんでいる。小説の結末で、雪子は主人公道夫の助けを借りて三次元世界へ戻るための薬を作るが、雪子には強すぎて死んでしまう。雪子の死を描くことは、科学研究の成果は人間に良いことばかりをもたらすのではなく、思わざる禍いをもたらすこともあるという科学力の二面性を読者に伝えようとするものであろう。こうした危惧を抱える海野は、原子爆弾について考えざるを得なかった。「原子爆弾と地球防衛」のなかで海野は、もう一つの課題である「地球防衛問題」を取り上げる。アメリカによる原子爆弾の成功は、将来全人類にどのような影響をもたらすのか、我々はどのように行動すべきなのかと

37 一九四七年七月に『謎の透明世界』と改題し、単行本として東光出版社より刊行。

いった問題を提起する。海野自身の結論は次のようなものである。

私はここで私の結論を先に掲げる。すなわち、原子爆弾の実現したのを機会として、全世界はお互いの間に於ける一切の戦争を永久に終局とせねばならぬ。そして全世界は一致団結して協力し、地球防衛の一目標に精進せねばならぬ。地球防衛とは何か。それは地球の敵より地球人類を護ることである。地球の敵とは何か。それは他の遊星に棲息する生物で、われら地球を狙う者共のことである。（『海野十三全集 別巻1』三〇六頁）

「全世界は一致団結して協力」し、地球外知的生命から我々地球人類を護るべきだということが敗戦直後の海野の「地球防衛問題」に対する考えである。海野は戦前から地球外知的生命を作品に登場させていた。一九三九年から一九四〇年にかけて『小学生新聞』に連載した「火星兵団」は、侵略者としての火星人が地球人を捕虜にしようと襲来し、地球人がそれに対抗する話である。この作品で火星人は基本的に「敵」として描かれ、地球人は生存のために戦わなくてはならない状況に置かれる。そして、両者は共存することが不可能であり、どちらか一方のみが生き残るという弱肉強食の状況にある。結局、小説の結末で「蟻田博士」という科学者が開発した武器によって地球は救われる。海野は蟻田博士の言葉を借りて、科学力の重要性を強調する。

「これからは、火星人と競争することになるから、われわれ地球の人類は、これまでよりも、勉強をしなければ、大宇宙の指導者の地位を、火星人にとられてしまうよ。勉強だ、大勉強だ」蟻田博士は、拳をふりながら言った。（『海野十三全集 第9巻』四二七頁）

この作品には、「われわれ地球の人類」といった言葉がよく出てくるが、実際に各国がどのような対策を模索していくのかについてはほとんど記述がない。「地球防衛問題」にもかかわらず、地球人の連帯には言及していないのである。海野は「『火星兵団』作者の言葉」で次のように述べている。

われわれ日本民族は、地球人類の先駆者として立ち、やがては地球全土を指導し、そしてまた大宇宙をも支配するという大きな希望を目標に、うんと勉強し、そして強く鍛えねばなりません。（『海野十三傑作選③』沖積舎、二〇一三年十月、三頁）

地球人が火星人と対抗する小説にもかかわらず、全人類のためという意識が見られない。それは当時の国際情勢とも関係があり、各国が協力して同じ目標に向かっていくことを書くことは難しかったのだろう。

しかし敗戦後、海野の「地球防衛問題」に対する考え方は原子爆弾の実現を目の当たりにして変わっていく。一九四五年九月、海野は同じ地球外知的生命を題材とした小説「地球発狂事件」を「丘丘十郎」名義で『協力新聞』に連載を始める。火星人を残酷な敵として描いた「火星兵団」とは異なり、この作品に登場する知的生命は最後まで謎のままであり、理解できない生物である。アイスランドで巨大な船が発見される。記者や学者が調査した結果、その正体は大西洋の海中に基地を作っていた知的生命であることがわかる。地球人は対策を考えるが有効な手段はなく、結局その知的生命はただ偶然に地球に着いただけであることがわかる。そしてある日彼らは突然姿を消し、小説は終わる。

この作品で注目したいのは、未知の存在に対して「全世界」が一丸となって対策を考えるところである。アメリカの上院議員は、「地球防衛はわれら世界人類の義務であると共に権利である。地球外よりの無断侵入者に対しては何の仮借するところがあろう」[38]という見解を発表する。このとき、「現代の最強武器である原子爆弾」の使用も検討されるが、結局「平和的な外交手段」――音楽を採用することになる。これまで論じてきた戦前の小説とは異なり、未知の存在に対して武力ではなく、文化的な手段によって平和的関係を築こうとする意識が現れはじめている。作品の最後で、海野は次のように書いている。

> 果たして然らば、地球人類がお互い同士に猜疑し、落とし合い、殺戮し合うことは賢明なることであろうか。断じて然らず。われら地球人類は、そういう一切の同胞相食むの愚を即刻捨て去らねばならないのだ。そして直ちに地球防衛の旗印の下に協力し結束し、彼等を迎える準備を急いで始めなければならないのだ。それは必ずしも戦備ではない。いや、戦備よりもむしろ平和的交渉の方法と手段とを研究し用意することになる。地球の上に人類相斃し合う戦争が永遠に封鎖されなければならないと同時に、大宇宙にもまた宇宙戦争を生ぜしめてはならないのだ。（『海野十三全集　第11巻』九三頁）

38「地球発狂事件」（『海野十三全集　第11巻三一書房）』七二頁。

この作品には日本人、デンマーク人、アメリカ人といった多様な国の人間が登場する。平和時代を迎え、国際的視野に立った「地球人類は一つ」という海野の考えが見受けられる。ただし、この作品における「平和的交渉」はあくまでも地球人類の一方的な考えであり、未知の存在に真正面から向き合うことなく物語は終わってしまう。

海野は一九四五年一二月から一九四六年一一月まで、再び丘丘十郎名義で「火星探検」を『サイエンス』に連載している。宇宙人が「敵」、あるいは「未知の存在」として描かれてきたこれまでの作品とは対照的に、「火星探検」における火星人は「友人」である。舞台はアメリカに設定され、登場人物は中国人の張、日本人の河合と山木、黒人のネッドという多国籍メンバーからなる少年四人組である。アメリカを旅していた四人が偶然火星に行き、そこで地球人と大きく姿が異なる火星人と遭遇する。彼らとは度々険悪な関係になりかけるが、少年たちは地球の音楽をきっかけに火星人と平和的な関係を結ぶことに成功する。

音楽を通じた地球外知的生命との交流は「地球発狂事件」でも見られるが、あくまでも計画にとどまっていた。「火星探検」ではそれを実行している。瀬名堯彦は、「火星探検」では「従来の作品に見られた火星人との戦闘がなく、地球人との友好関係が強調され、文明的にも地球の方が高い状態に設定されている点が、旧作との大きな相違であった」[39]と述べている。さらに海野は、作品のなかで火星人の科学力は地球人より進んでいるとする。このように、戦前作品における「戦争は科学力次第だ」という主題を捨て、代わりに平和を強調している。地球人が火星の資源を奪うために襲ってきたのではないかという火星人の疑問に対して、少年の山木は次のように語る。

> そのことも、あなたの誤解です。なるほど地球の人口は多いです。またこれまでに地球上には戦争もたびたびありました。しかし今はもう侵略戦争は根だやしになりました。そのわけは、戦争の惨禍というものが、負けた国の人々にはもちろんのこと、勝った国の人々にもふりかかってくることが分り、戦争は地球上のすべての人々に大きな不幸をもたらすことがよく分ったのです。だからもう戦争には懲りて、どの国でも戦争を起こすことはやめたと宣言しているのです。この万世の太平が来たのです。この万世の太平

39「解題」（『海野十三全集　第11巻』三一書房）五〇一頁。

は、地球の上だけのことでなく、惑星と惑星の間にも約束されねばなりません。（『海野十三全集 第11巻』一九九頁）

終戦後、世界各国が戦争のない理想的な未来を創るために努力する国際情勢にあって、海野の戦争に対する反省の気持ちが窺える。また、火星人という他者を「共存できる仲間」として捉えることは、終戦直後のアメリカ進駐軍に対する人々の不安を取り除くことに役立っていると考えられる。

## 5　おわりに

敗戦直後、海野はどのような心境で一家心中を決意したのだろうか。橋本哲男は『海野十三全集 別巻1』の月報「海野十三さんの敗戦日記」で、海野が次のような言葉を漏らしたと証言している。

ぼくはね、戦争に協力して軍事小説を書き、講演にも出かけて士気を鼓舞したので、敵から見れば戦争犯罪人の一人だろう。やがて裁判になるかな。しかしそうなればぼくは本望だ。（『海野十三全集 別巻1』月報、四頁）

本章で論じてきたように、海野は徴用前から戦争協力の姿勢を見せていたのは確かであるし、徴用中も戦意を高揚させる文章を書いたため、敗戦後に自らの戦争責任を追求されることを心配するのは容易に想像できる。極東軍事裁判（東京裁判）で海野には何のお咎めもなかったが、当時の文壇で彼の戦争責任を追求する声はあった。関英雄は「児童文学の展望――その新たな出発――」（『新日本文学』第一巻第三号、一九四六年六月）で、戦争に協力した児童文学作家を三つのタイプに分類している。そのなかで、海野は「講談社ジャーナリズムを中枢とする通俗文芸の作家」に分類され、彼らの活動は「軍国主義のラッパ吹きとして極めて反動的な役割を演じた」（四三頁）と批判されている。海野の科学小説が子供たちに軍国主義の思想を吹き込み、反動的な役割を果たしたのは明らかである。

ただし、海野が好戦的であったかと言えば、必ずしもそうではない。本章でも言及したように、海野が徴用前に書いた少年向け作品では、宇宙人や他国軍の装備は必ず日本に勝っており、描かれた戦争は日本側から見ればいずれも防衛のためであり、侵略ではない。

日本の科学力の後進性を自覚し、祖国防衛のためには科学力の向上が必須だとするのは、科学者であり愛国者でもある海野の素朴な願いと言えるだろう。しかし戦時下では、一国民の意志は容易に戦況や当局の政策に左右される。それゆえ、本章では海野の戦争責任を追求するのではなく、彼の南方徴用体験と作品を通して、戦争に翻弄される一作家の運命の軌跡を辿ってみたのである。

# 第四章

## 久生十蘭における南方徴用――前線の日常を描く――

### 1　はじめに

久生十蘭は一九四三年二月から約一年間、海軍報道班員として南方に派遣された。十蘭はこのときの体験を題材に小説やエッセイをいくつか書いているが、それらについての研究はまだなされていないのが現状である。二〇〇八年十月より国書刊行会から『定本　久生十蘭全集』全一二巻の出版が始まり、小説をはじめ、戯曲・エッセイ・翻訳・ラジオドラマ・日記・遺稿・初期作品を網羅的に収録している。この全集をもとに、南方体験を下敷きにしたいわゆる南方作品[40]を整理してみると、南方から帰還した一九四四年に十蘭の創作活動が活発だったことがわかる。ただし一九四四年に発表された短篇作品群の多くは、長篇小説「内地へよろしく」に吸収されている。それゆえ、本章ではこれらの短篇も視野に入れながら、「内地へよろしく」と「風流旅情記」を中心に考察を行う。十蘭の南方作品に関する研究は、現時点では全集の解

40・「爆風」（『新青年』一九四四年四月）
・「海軍歩兵」（『文芸春秋』一九四四年五月）
・「第〇特務隊」（『新青年』一九四四年六月）
・「酒保」（『週刊毎日』一九四四年六月）
・「海図」（『新太陽』一九四四年七月）
・「内地へよろしく」（『週刊毎日』一九四四年七月二日、一九四四年一二月二四日）
・「効用」（『大洋』一九四四年八月）
・「白妙」（『日の出』一九四四年八月）
・「要務飛行」（『日の出』一九四四年十月、一九四五年三月）
・「少年」（『新青年』一九四四年一一月）
・「弔辞」（『大洋』一九四五年一月）
・「ノア」（『富士』一九五〇年二月、四月）
・「勝負」（『オール読物』一九五〇年四月）
・「風流旅情記」（『小説と読物』一九五〇年八月）
・「天国の登り口」（『小説と読物』一九五三年一一月）

題程度である。しかし、戦時下だけではなく戦後になっても徴用体験をもとにした作品を書いていることから、従来は「推理小説家」「探偵小説家」として扱われてきた十蘭の、「南方徴用作家」としての一面も見逃すことはできない。

南方徴用作家としての十蘭の営為に着目すると、以下の三つの疑問が浮上してくる。まずは、十蘭の南方作品の特徴はどのようなものかということ。次に、十蘭は前線で見た戦争をどのように描き、彼が戦争の「真の姿」をどのように捉えているか。最後に、戦時下の長篇小説「内地へよろしく」と戦後の中篇小説「風流旅情記」における改作が意味するものは何かということである。こうした問題意識のもと、本章では十蘭の南方作品をトータルに捉えつつ、「内地へよろしく」と「風流旅情記」における改作の問題を中心に、十蘭の徴用体験と南方作品について考察してみたい。

## 2　日常化した非日常

「内地へよろしく」は、『週刊毎日』一九四四年七月二日号から一二月二四日号にかけて、全二六回にわたって連載された。十蘭の戦時下における南方作品で唯一の長篇小説である。海軍報道班員としてジャワにやってきた画家・松久三十郎は、ある日ニューギニアにある日本領土の最南端を孤立無援で守っている兵士たちがいることを知り、そこへ行くことを志願する。目的地まで送ってくれる山吉船長、どん助、カムローとともに針盤も六分儀もない機船に乗り込み、容赦ない爆撃にさらされる小さな分遣隊に合流する。三十郎がたどり着いたのは、補給も絶え絶えで、自給自足で生き抜く兵士たちのいる地だった。絶え間なく敵機の攻撃にさらされ、兵士以外の生き物といえば、兵員が体温で卵から孵したという雌鶏一羽だけである。三十郎は彼らの生き方に惹かれていき、長く滞在するつもりだったが、敵の攻撃が激しくなったため、兵士たちに内地へ戻ることを勧められる。帰還後、銃後で戦争に協力している人々と知り合い、彼らを南方前線まで連れていく。

「内地へよろしく」で描かれているものは何か。第十四章「貝寄」にある次の言葉は、十蘭自身の思いを表していると言えるだろう。

> 英霊の父、前線から帰つたもの、また行くもの、焼玉機関をつくるもの、すがたはそれぞれちがふけれど、みな戦争の大きな波形をうつしながら、縁あつて一つのところに寄つてくるこの不思議さを、うつとりとなるまで思ひしづめた。（『定本久生十蘭全集 第五巻』一五五頁）

波で磯へ寄ってくる沖の貝のように、戦争のために集まっている人々のあいだの不思議な「縁」を描いているのである。こうした発想が従軍時の十蘭にすでにあったことは、当時の従軍日記から窺える。この日記は二〇〇七年十月に講談社から単行本『久生十蘭「従軍日記」』として刊行され、はじめて読者の目に触れるところとなった。報道班員の目から見た虚飾ない戦地記録として大きな意義がある。南方滞在の行程が一九四三年九月九日まで記されており、それまで謎に包まれていた十蘭の南方徴用の実態が明らかになった。九月から翌年二月の帰国までは記述がないため、その間の行程は現段階では未詳であるが、日記に記された体験や見聞が多くの作品の題材になっていることが確認できる。一九四三年五月二三日の日記で、十蘭は「南方定期」という題で小説を書くことを考え、その筋に関して次のように記している。

八時半、食堂へ行く。また帰ってきて阪道のくらやみに立っているうちにフト筋がまとまる。「南方定期」という題にて、東京からスラバヤまで飛ぶ海軍定期。いろいろな運命をもつ人が偶然に一つの飛行機に乗合せたこの宿〈縁〉を書くなり。ちょっと乗合舟のようなものになろう。海軍定期にはそれ自体、一つの性格があり、乗っている人々は多かれ少かれ戦争と南方建設に関係をもつ人々である。みなこの戦争によって引起された影響を各自の過古の生活にもち、深いところではみな大きな一つのものに結び合されている人々である。必ずしも絶対安全ではない、いくぶん危険というものに絶えずさらされつづけ、もし不幸があればそれは共通の不幸になるそういう運命の下にある。(『久生十蘭「従軍日記」』講談社、二〇一二年八月、二〇五頁)

結局「南方定期」という作品は書いていないが、「内地へよろしく」で描かれている、三十郎が山吉船長、どん助、カムローと出会い、羅針盤も六分儀もない機船に同乗する設定や、内地で出会った人々を連れて南方に戻る設定の背景には、上記のような発想があったことが明らかである。それゆえ、「内地へよろしく」では、一般的な徴用作品に見られる「戦争の悲痛」ではなく、戦争のために集まっている人々の「縁」を日常生活のなかで描いているのである。これは十蘭の南方作品を戦中から戦後まで貫いている特徴である。「内地へよろしく」における料理の絵を描く場面はその好例である。

山吉船長たちと別れた三十郎はA諸島N角に着いた。ここの分遣隊では娯楽施設として烹炊所の隅を囲い、そこに酒保をこしらえている。実際にあるのはヤム薯だけだが、壁には上鰻丼

や海苔巻など様々な〈お品書き〉を書いている。この〈お品書き〉から困苦を楽しみに変える隊員たちの機智がうかがわれる。そうしたなか、三十郎は烹炊長から料理の絵を描くように頼まれる。

「まづ、お吸物……これは鯛のそぼろ椀といふことにいたしませう。皮をひいたらあまり微塵にせずに、葛もごく薄くねがひます」

「さういふ感じですね、よくわかりました」

「ちやうど、わらさの時季ですから、削切りにして、前盛は針魚の博多作りか烏賊の霜降り……つまみは、花おろしでも……」

「こりや、自棄に難しいことになつたねえ……煮物は」

「ぜんまいの甘煮と芝蝦の南蛮煮などはいかがでせうか。小丼は鰺の酢取り。若布と独活をあしらつて胡麻酢でねがひませう。口取りは手軽に栗のおぼろきんとんと青柳の松風焼……」(『定本久生十蘭全集　第五巻』七八頁)

戦時下とは思えない穏やかな日常の一コマである。戦時下という背景を知って読むと、食べることのできない料理の絵を描くことの意味がより一層深く理解される。

しかし、戦場におけるこうした場面の描写は、徴用文学としては特異だといえる。一般的な徴用文学は、前線での戦闘の様子や勝利を内地に伝えることで戦意を高揚させるものや、兵士たちの苦労を強調し、国民に連帯意識を持たせようとするものがほとんどである。一方で十蘭の南方作品はそうしたものとは異なり、戦争を正面から表現することを意識的に避け、非日常の生活を日常のように描いている。敵機の爆撃や艦砲射撃でいつ死んでもおかしくない状況下でも、ユーモアのある筆致を欠かさない。「風流旅情記」では、分遣隊と別れる前の最後の夕食の場面を次のように描いている。

「戦闘がはじまると、もうお目にかかれないわけだから、これは送別の会食のつもりです。いろいろと庶務主任の心づくしも加はつてゐるわけですから、どうか」

庶務主任の苦心の刺身の正体は、一と眼見るなり素性を観破したが、さうはいはなかつた。

「これはチヌですな」

庶務主任は快心らしくニヤリと笑つた。

（略）

「チヌでないとすると、これはなんといふ魚ですか」

「これは、あなたが気にしてゐられた渚の一本椰子の最後の実です。椰子の実の内側に乳白色の果実がついてゐるでせう。あれを刺身のやうに見せかけて、あなたの味覚を試験してみようといふ士官室の企らみだつたんです。」

といふと、声を合せてドッと笑つた。（『定本久生十蘭全集　第七巻』六五九頁）

このあとトランガン島最後の決戦となり、多くの死傷者が出ることは明らかである。にもかかわらず、そうした現実に溺れることなく、ユーモアの外衣を纏って戦争の残酷さを相対化し、戦闘場面や戦死を直接描かない。十蘭はなぜ戦争をこのように描くのか。「海図」（『新太陽』一九四四年七月）の冒頭で十蘭は次のように書いている。

一つ雄大な話をいたします。戦争の悲壮や悲痛な面が少し多く伝へられすぎ、さうなりますと戦争といふものは苦い味のものとばかし思はれ勝ちですが実はさういふことばかりではないのでして、苦しいには苦しいとしても自らその中にゆとりありうるほひあり洒々落々たる風光も多々無数にありまして、殊に爆撃がすんで敵機が去つて行つたあとのおだやかさ、まづ一役すんだといふ、のびのびとした気持は後方などではたうてい味ふことの出来ぬ和やかなもの（『定本久生十蘭全集　第五巻』四五頁）

つまり、「戦争の悲壮や悲痛」ばかりが内地へ伝えられるため、兵士たちの前線生活の穏やかな一面を描くのである。

しかし、いくら戦場の苦痛を内地へ伝えることを控えようとしても、徴用文学として兵士たちの故国への愛や家族への思い、戦死などは避けられない主題である。これは十蘭にとっても例外ではなかった。彼の南方作品には雪・月・花のエピソードが登場するものが数篇あり、兵士たちの前線における生活のもう一つの側面を描いている。例えば、分遣隊の兵士たちは塩鮫を「初雪」と名付けている。その理由について「内地へよろしく」の庶務主任は次のように語っている。

出発する朝、初雪が降りましてね、兵隊なんかは、これから行くところは雪月花のセツの無いところだから、眼玉に風邪をひかせるほどしつかり拝んでおけなどといつてゐました。

塩鮫が『初雪』になつたのは、まあ、こんな因縁もあるんです。（『定本久生十蘭全集　第五巻』八〇頁）

戦争は一見すると「雪月花」と無縁に見えるが、十蘭の南方作品には戦時下で「雪月花」を求める人々が描かれている。政府が啓蒙宣伝のために発行した写真グラフ誌『写真週報』には、三一五号（一九四四年四月五日）から「覆面文芸」欄が設けられた。数名の作家が組になり、各作家が二、三篇ずつ執筆している。十蘭は三六三号（一九四五年三月一四日）に「雪」、三七二号（一九四五年六月一一日）に「花」、三七四号（一九四五年七月一一日）に「月」を発表した。なお、遺品中の原稿では「雪」「月」「花」の順になっており、雑誌掲載順とは異なっている。[41]

「雪」では、雪の好きな兵隊が雪のない南方へ派遣されることが決まり、その出発の場面が描かれる。右に引用した「内地へよろしく」の場面と同じく、「兵達は甲板に立つてそれを眺め、「行く先は雪月花のセツの無えとこだはで、眼ン玉が風イひくほど拝んでおけや」」（『定本久生十蘭全集　第五巻』三八四頁）と言う。南方に到着後しばらくして、本隊から次のような慰問文が届く。

初雪　　石田カツ子

岩国ノ　キンタイバシニ　ケフ初雪ガフリマシタ。南ノ兵タイサンニ見セタイナ

（『定本久生十蘭全集　第五巻』三八四頁）

雪のない南方の戦場で故国を懐かしく思う兵士達はこれを読んで泣き出した。

「月」では、ある隊の兵士たちはみな器用で、戦争の暇々に鉄木でパイプを作ったり、蝉を刻んだり様々な細工物を楽しんでいるが、谷という兵士だけは何もしないで毎日ぼんやりしている。ある日、谷は隊長が琴を弾いているところを見て、一ヶ月後鉄木で作った見事な琴を持ってくる。谷は京都の有名な御琴師だったのである。そしてある夜、兵士たちは露草の上に胡座をかいて隊長の琴を聞く。

41　川崎賢子・沢田安史「解題」（『定本久生十蘭全集　第五巻』国書刊行会）六二五頁。

ちやうど仲秋で、亭々たる巨木の上を玲瓏と月が渡つた。曲は「望の月」だつたさうである。私はこの話をカイマナで聞いた。蓊鬱たる千古の密林を漏れる琴の音はまあどのやうなものであつたらう。（『定本久生十蘭全集　第五巻』四九二頁）

兵士たちが胡座をかいて琴の音を聞いている情景は、ともすれば戦地には似つかわしくないものであるが、南方前線での人情味溢れた生活の一コマである。遠い南方の戦場で月見をしながら「望の月」を聞くとき、兵士たちは内地の家族を思っているだろう。

「花」では、アラフラ海の南にある濠北に近い無名島で、動くものは空の雲、聞こえるものは波の音だけという単調な日々を送っているS警備隊の話が描かれている。沈鬱な気分のなかで、彼らは何か不足したものを感じている。食べ物や飲み物ではない、「なにかもつとほかの、ちよつとした簡単なもの」（『定本久生十蘭全集　第五巻』四九一頁）なのだが、それが何か誰も分からない。ある日、仲間の一人が戦死する。遺骨をパンの箱に収め、石灰窟の奥に安置したあと、ある兵士がふと、「なにか花がないのか」と言う。それを聞いて、兵士たちはようやく気づく。

花――みなそこで愕然とした。一年半の間、一つの花も見ずに暮らして来たことを思ひだし、無意識のうちに自分らがはげしく求めてゐたものがなんであつたかをはじめて諒解した。（『定本久生十蘭全集　第五巻』四九一頁）

「なんとかして花を探してくる」と一人の兵士が言い、夜に船でこっそりと敵地へ向かう。三日目の朝、その兵士は憔悴しながらも蘭の花を一輪手に持って帰ってくる。S警備隊の補給は絶え絶えの状態で、何が「不足」しているかといえば、それは何よりも食糧であるはずだが、兵士たちが求めていたものは「花」であった。花は美の象徴である。兵士たちは戦場にいながらも美を求めることを忘れてはいなかった。前述した「雪」「月」は「花」と同じように日常生活のなかの美である。戦争という非日常の状況とは縁遠い存在だが、戦争であるからこそ「雪月花」が必要なのであり、残酷な戦争を生き抜くためには、食糧以上に心の糧が欠かせないのである。

十蘭は南方作品で「戦争の悲痛な面」を伝えることを控えながら、自らの作風を求め続けた。食糧が不足し、命が危険にさらされている戦時下という非日常のなかでも、美や楽しみを求める兵士たちの生への積極的な姿を十蘭は描こうとしたのである。

### 3　戦争の真の姿を追求

十蘭がどのような経緯で南方に徴用されたのかについては未詳な点が多いが、手元にある資料を見る限り、彼が南方に徴用されることになったのは決して不思議なことではない。

まず、年譜によると、十蘭は一九四〇年七月に設立された国防文芸連盟の常任委員兼評議員を務め、同年十月、師事していた岸田国士の大政翼賛会文化部長就任に伴い、同部嘱託となった。[42] 加えて、十蘭にはもう一つの見逃せない経歴がある。それは、一九四一年十月に『新青年』の依頼で中国戦線に従軍していることである。年譜によると、その詳細は次の通りである。

> 『新青年』編集部の要請で摂津茂和と中国戦線へ従軍した。上海、漢口を経由して湖北省随県の守備隊に九日間滞在、のち漢口で工場や農園などを視察し、帰路には漢口から南京まで揚子江の船旅も経験している。帰国してから『新青年』誌上で摂津と対談する。（江口雄輔編「久生十蘭年譜」『定本久生十蘭全集　別巻』六五〇頁）

ここで、『新青年』という雑誌に注目したい。一九二〇年に創刊された『新青年』は国内外の探偵小説を紹介するものである。江戸川乱歩や横溝正史をはじめとする多くの探偵小説作家の活躍の場となり、「都会的雑誌」として都市部のインテリ青年層のあいだで人気を博した。一九三七年に始まった日中戦争が拡大すると、その影響を受けて戦争協力するようになった。山下武が『「新青年」をめぐる作家たち』（筑摩書房、一九九六年五月）で述べているように、支那事変以降、「「新青年」は急坂をすべり落ちるように戦時色を強めてい」（二二頁）った。このとき、『新青年』編集部の要請で中国へ従軍したことからも、十蘭が『新青年』と深く関わっており、積極的に戦争協力する姿勢が窺える。

また一九四三年三月、十蘭は大政翼賛会宣伝部のために、本名の阿部正雄名義で戯曲『村の飛行兵』（副題：「素人に出来る移動演劇」）を刊行する。ある村出身の飛行兵が戦地へ行き、ある日飛行機でその村の上を通ることになった。村の人たちはみな家を出て、国旗を振って喜んでいる。十蘭はこの脚本のなかで、「海軍飛行兵が戦地へ行くのに不思議はないわ」（九頁）、「旦那さまが飛行機で空を……下では奥さまがハンケチを振る……悪くないわね」（一二頁）

42　江口雄輔編「久生十蘭年譜」（『定本久生十蘭全集　別巻』国書刊行会）六四九頁。

といった台詞を書いている。ここから、銃後の人々の戦意を高揚する目的が明らかに窺える。

さらに、脚本の最後で十蘭は、「この村出身の飛行兵の空からの訪問を、全村総出で感激しながら見送る淳朴な農村のすがたを素直に描きだすことができれば、それで十分に上演の目的は達しられるので、その一幕は、芝居をするといふ気持を離れ、日常の生活通り、ごく自然にやるはうがかへつて成功しやすい」（「村の飛行兵」の演出について」）（三三頁）と、演劇の注意点まで書いている。前節で論じてきたように、「日常の生活の通り」あるいは「自然にやる」というのは、十蘭が戦争を描く際の表現方法でもある。

総じて言えば、十蘭は戦時体制にきわめて協力的な姿勢をとっていた。しかし、作家の戦争協力の問題について論じる場合、どの文学団体に入っていたかや、海外戦線に従軍したのか否かではなく、作品が同時代読者に対してどのようなメッセージ性を持っていたのかに注目すべきではないだろうか。本節では戦時下の南方作品を対象に、外地に派遣された徴用作家としての十蘭は戦争をどのように表現し、それが同時代読者にとってどのような意味を持ったのか探ってみたい。

前述した十蘭の従軍日記の前半部、すなわち前線に出る前のジャワ滞在中の生活を記した部分は、十蘭自身が認めているように「沈滞」の期間である。五月一日の日記に、「徴用以来の心労と途中の気づかい、スラバヤの暑気とまとまりなき生活など累々重なりて心神〈冦〉弱せりと見ゆ」（『久生十蘭「従軍日記」』一七〇頁）とあるように、いわゆる〈南方ボケ〉のような状態だった。五月二一日の日記で、十蘭は次のように反省している。

> こういう戦争から遊離した状態にいることがとてもうしろめたく、（中略）最近アッツ島やソロモンの前線の苦労を耳にするにつけ、作家の才能などはどこかへ埋めつくし自分を戦争の純粋な一個の卒伍とし報道班員としての命をかけた日々の実践そのもののほうがよっぽどすぐれた作品だという風にも考えられる。（中略）果して生きてかえれるかそれも期し難いから、せめて最後の筆のしずくとして今迄見たものを纏めたく思い…（『久生十蘭「従軍日記」』二〇〇頁）

徴用前期の「意志薄弱」で「無為の日々」を送る自分に耐え難くなっているなか、小説よりも報道班員としての日々の実践の方がすぐれた作品だと慰めながらも、やはり作家として南方で見たことを作品化すべきではないかという矛盾を抱えている。この日記が二〇〇七年に初めて公開されたことはすでに述べたが、周知のように、徴用作家が従軍中に日記をつけることは

原則として禁じられていた。戦時下の軍部による検閲を通して露見されたものも、終戦時に進駐軍の緊急命令で焼却を求められた。それゆえ、十蘭の「従軍日記」は彼の徴用中の本音を記しているといえるだろう。そして同時に、徴用前期から十蘭が戦争協力していたことが分かる。

十蘭のこうした姿勢は、三月十日の日記に記しているジャワのセレクタ・ホテルの持ち主デ・ロングの話からも窺える。デ・ロングは本論文の第二章で論じた阿部知二の小説「死の花」に登場するファン・ブリンクのモデルでもある。十蘭が日記に記しているデ・ロングの話、すなわち植物を栽培する話、建てたホテルにオランダ人たちが避難してきた話、他人の密告で死刑に処せられた話のほとんどが「死の花」と一致している（ただし「死の花」では、「密告」はある日本人軍属の謀略によるものだという）。

しかし、死刑に処せられたデ・ロングに対する十蘭の反応は、阿部のそれとは異なっている。第二章で論じたように、友人を救うことができない「死の花」の主人公比延は、軍当局に対して無力で、友人に罪悪感を持っている。それに対して十蘭は、「あわれの如くにして必ずしもあわれというようなことにあらず。これ、即ち戦争なり。敵国人一個にたいする憐憫感傷など何の意味あらんや。戦前の和蘭の暴戻を見よ」（『久生十蘭「従軍日記」』五九頁）と、淡々と述べている。戦時下で敵性国人学者を保護するために奔走する阿部と比べれば、十蘭の徹底した戦争協力の姿勢は際立っているといえる。

一九四四年二月末の帰還から約一年間、十蘭は定期的に従軍関連作を発表している。大半の作品で作家名に「報道班員」の肩書きが付されている点からすると、これは報道班員としての宣伝業務の一つだったと考えられる。それゆえ、一九四四年七月から連載を始めた「内地へよろしく」に戦争協力的な言説が多いのは言うまでもない。例えば、これまで浅薄な生活を送っていた新太郎のもとに召集令状の赤紙が来る場面では、十蘭は新太郎に次のように語らせる。

> それを手に持つた途端、この三十何年、積り積つた浮世の煩はしさがいつぺん肩から抜け落ちたやうな、なんともいへない安かな気持になつて（中略）これからは食ふことも着ることもみな国家に任せて、じぶんはただひとつのことに精根を傾ければそれでいいのだと思ふと、嬉しくて有難くて涙が出ました。（『定本久生十蘭全集　第五巻』一六八頁）

ここには、召集令状が来たことの嬉しさと、これまでの「根のない」生活ときっぱり別れることができる期待とが表れている。こうした描写は、男にとって「戦争に行くということが本当の人生の門出になる」（一六八頁）という戦争に参加するメリットを語っているだけではな

く、国民に内地と前線との連帯感を持たせ、戦意を高めるためでもあると思われる。

しかし、それ以上に注目したいのは、そうした戦争協力的な言説のほとんどが、上記の引用のように主人公ではない登場人物に語らせる形で書かれ、主人公あるいは作者の気持ちがその背後に隠されていることである。つまり、十蘭は直接的な戦争賛美とは意図的に距離を置き、客観的に戦争を語っているのである。前述した「貝寄」の引用もそうであるが、息子が戦死した父親、戦闘で生き残って前線から帰ってきた人、そして国のために前線へ行く決心をした人々が集まっている場面を戦争協力的に表現するとすれば、読者あるいは国民の戦意を高揚させるもっと直接的な描き方があったはずである。しかし、十蘭はこの場面を、「縁あつて一つのところに寄つてくるこの不思議さ」と淡々に描いており、登場人物の三十郎はまるで戦争とは無関係であるかのように、ただの観察者としてそこにいる。

それでは、なぜ十蘭は直接的な戦争協力の表現と距離を保っているのだろうか。十蘭は「用務飛行」(『日の出』一九四四年十月～一九四五年三月)で自身の戦争に対する理解の変化を述べている。三日間行方不明になっていた探偵機が見つかり、早く助けに行くために烹炊員が四十分間で稲荷寿司を用意することを命じられる。工場長の「おれ」は、そうした無理な命令を遺憾なく実施し、完了する烹炊員の「誠実」さに感動する。

> 戦ひの真のすがた、真の苦労といふものは、かういふ人知れぬ片隅にひそんでゐるので、かういふ面に触れることがなくては真に戦争を知つてゐるとは言ひえないのであらう。けふ、この瞬間までおれが抱いてゐた戦争にたいする観念などは、なんとも底の浅い通俗極まるものであつたと、思はず顔の赧らむのを覚えつゝ、それと同時に、おれもこれでよほど戦争といふものが判るやうになつた思ひで、なんともいへず嬉しくなつた。
>
> ところが、微笑でもすべきはずのそのおれが、気がついてみると泣いてゐた。手で頬を撫でて見ると、まぎれもなく涙で濡れてゐるので、これにはおれも驚いたのである。
>
> おれは数理の判別がはつきりし、とりわけ、戦争などといふものを普通の人間よりも厳しく律したがるはうであるから、戦争で兵隊が死ぬことなどは、秋になれば葉が落ちるぐらゐに当然過ることだとし、戦死の状況がどれほど悲惨であらうとも、感情などは動きもしないけれども、烹炊員の姿を想像してゐるうちに、いぢらしいといふか、偉いといふか、永久に酬いられ知られることのない人知れぬ誠実の光にうたれておもはず溢れだしてきた涙なのであつた。(『定本久生十蘭全集　第五巻』三一一頁)

「戦争といふものが判るやうになつた」というのは、戦争の真の姿は戦闘の残酷さや兵士の戦死といった新聞やラジオで報道されるような大きな出来事ではなく、名もない烹炊員が稲荷寿司を作るような人知れぬところに潜んでいるということである。十蘭が描こうとしたのは、こうした「永久に酬いられ知られることのない人知れぬ誠実」である。「内地へよろしく」には、まさにこうした十蘭の創作意識が反映されている。

右の引用で描かれている戦場の死に関して、「用務飛行」では「戦争で兵隊が死ぬことなどは、秋になれば葉が落ちるぐらゐに当然過ることだとし、戦死の状況がどれほど悲惨であらうとも、感情などは動きもしない」と表現されているが、「内地へよろしく」でも似たような表現が見られる。三十郎が内地に戻ったあと、友達のルダンさんが家に来て、平気な顔で二人の息子が前線で戦死したと語る。三十郎は驚いて、「どうして今までそれを隠してとぼけてゐたんです、あなたらしくもない」と言うと、ルダンさんは次のように返した。

この戦争で日本人が戦死するのは、秋になれば葉が落ちるほどの自然なはなしで、今更、いつたつて言はなくたつて同じことでせう……おや、葉が落ちる、などと言はれたつて、こつちは、はあ、さうですな、といふほか返事のしやうもない……さつき、私が心祝ひといつたのは、衒つてるのでも、照れてるのでもない、死んだお妻さんが、さぞあの世で肩身を広くしてゐるだらう……あたしにはそれがよくわかるので、それで、お妻さんと差し向ひで、葡萄酒の一杯も飲まうかと思つて……（『定本久生十蘭全集　第五巻』一五四頁）

十蘭は前線で戦死した青年を描くことで、戦争の「悲壮」を表現しようとしているのではない。息子たちの戦死を「秋になれば葉が落ちるほどの自然なはなし」だと淡々に語るルダンさんに代表される内地の人々の偉大さにこそ焦点を当てようとしているのである。内地の人々には「永久に酬いられ知られることのない人知れぬ誠実の光」があり、それこそが「戦ひの真のすがた」だと十蘭は考えている。それゆえ、十蘭の戦時下における南方作品（「第〇特務隊」「用務飛行」「少年」「内地へよろしく」など）のほとんどが戦争を直接的に賛美し、戦意高揚させることを避け、一人の具体的な人物に着目する形で戦争を表現している。

ただし、これをもって十蘭は戦争協力していないと捉えるべきではない。前述したように、中国戦線に従軍するなど、南方徴用前から戦争協力的な姿勢があったことはまぎれもない。とはいえ、同じく海軍報道班員として南方に派遣された海野十三の『ペンで征く』（日本放送出版協会、一九四二年一二月）で随所に見られる戦争賛美とは異なり、十蘭の作風と戦争に対す

る理解から、戦争協力のためだけではなく、文学性をも重んじる創作姿勢が窺える。

## 4　戦後改作――前線と銃後の架け橋から個人的な体験へ

十蘭が一九五〇年八月に『小説と読物』に発表した「風流旅情記」は、「内地へよろしく」の主人公三十郎を含めた船員たちの一時帰国や、内地で出会った人々を連れて再び南方前線へ戻る顛末、ヨシ子の結婚話などを省いて再構成した中篇である。十蘭が改稿の際、何を削除し、何を加筆したのか確認したうえで、改作の動機を探ってみたい。

まず、重要な改作箇所として挙げられるのが、「風流旅情記」冒頭の長い序文とでも言うべきものである。十蘭はここで、タイトルの意味、内容に対する説明を書き加えている。この作品は主人公三河万蔵の旅行記で、「「風流」と形容したのは、もっぱら三河万蔵のおめでたい心象風景を指したのであつて、戦争にも兵隊にも関係のあることではない」（『定本久生十蘭全集　第七巻』六二〇頁）と小説の冒頭で断っている。

ここで注目したいのは、「風流旅情記」は戦争にも兵隊にも関係ないと述べながら、「内地へよろしく」で示されていなかった主人公の南方滞在の具体的な時期について、「三河万蔵は十八年一月に内地を出発し、チモール島、アンボン島、アール諸島を遍歴して十九年一月に帰投した」（『定本久生十蘭全集　第七巻』六二〇頁）と明記していることである。一九四三年一月から一九四四年一月までという期間は、十蘭自身の南方徴用期間と一致している。続けて十蘭は、「三河万蔵（すなわち私）は、こんどの戦争に参加するやうにすすめられ、その年のはじめ、芝の水交社で申渡をうけた」と書いている。

「水交社」とは、一八七六年に海軍省の外郭団体として創設された日本海軍将校の親睦・研究団体で、第二次大戦後に解散した。十蘭と水交社の関わりについてはまだ明確にされていないが、小林真二によれば、「十蘭の実質的な徴用母体として、海野十三とくろがね会および博文館をめぐるラインが一定の役割を果たした、という推測が成り立つ」（「解題」『久生十蘭「従軍日記」』二〇一二年八月、四九一頁）という。前章で言及したように、くろがね会は海軍省の外郭団体である。南方徴用がくろがね会と関わっている十蘭が、同じ海軍省の外郭団体である水交社と関わりがあるのは不思議なことではない。

これに対して、「内地へよろしく」冒頭の主人公紹介には「海軍報道班員、秋陽会会員松久三十郎」とある。この「秋陽会」に関する資料はなく、架空の設定の可能性が高い。また、「内地へよろしく」にはない「三河万蔵（すなわち私）」の「すなわち私」の部分も注目に値する。徴用期間の一致、海軍省外郭団体の水交社、そして「すなわち私」。これらを考えあわせると、

十蘭は改稿する際、読者に作者である自分と主人公三河万蔵を連想させる意識があったと言っていいだろう。言い換えれば、「内地へよろしく」では作品と距離を置き、「風流旅情記」では主人公三河万蔵を借りて、自身の心象風景を描いたのではないかということである。

こうした意識のもと、主人公三河万蔵がアール諸島（「内地へよろしく」ではA諸島）へ行く理由も改作されている。「内地へよろしく」の三十郎は、鶏の卵を抱いて雛に孵した「海軍警備隊といふものの地味で苛烈な人知れぬ働きに強く心をひかれ、およばずながら苦労の日々を己れの眼の中に鐫りつけ」、「さういふ不敵な兵たちの面魂こそぜひともきっぱりと見定めておかなくてはなら」ないと思い、「では、ひとつまたそこへやつていただきますかな」（『定本久生十蘭全集　第五巻』六〇頁）と自らA諸島へ行くことを申し込む。

これに対して、「風流旅情記」の万蔵がアール諸島へ行くことになったのは、ただの偶然である。三河万蔵の最初の徴用先はジャワのスラバヤだった。「この世で植民地くらゐ嫌ひなものはない」と思う彼は、「植民地は植民地でも、こんな中途半端な中間子文化のない、できたらゴオガンのタヒチ島のやうなところへ行きたいやうな気分に」（『定本久生十蘭全集　第七巻』六二〇頁）なり、とりあえず定期航空便のあるアンボン島へ向かった。そこでアール警備隊の話を聞き、底意地の悪い先任参謀に、「三河報道班員、君は変わつたところへ行きたいといつてゐたが、どうだね、そこへ行つてみては」と言われ、万蔵は「腹を立てて行つてやる気になった。出発時の彼の心情は次のようなものであった。

> 人間とは、常になにかしらオリジナルな事柄、つまり美だとか、真理だとか、戦争だとか、さやうな苛酷なものに生甲斐を感じる動物だとは、アランの明証だが、三河万蔵の場合は、そんなんぢやなくて、生意気な先任参謀の鼻を明かしてやりたいと思つただけのことであつた。（『定本久生十蘭全集　第七巻』六二二頁）

「内地へよろしく」の三十郎が、苦しみのなか努めて楽しみを求める海軍警備隊の兵士たちの姿をその目で見たいと明確な目的をもってA諸島へ行くことを申請したのとは異なり、万蔵がアール諸島へ行くことになったのは、美や生きがいとは関係なく、先任参謀に意地を張っているだけである。「風流旅情記」のこうした設定も、この小説が三河万蔵の個人的体験を記した放浪記であることを示しているのである。

三河万蔵といふ第五流画家が生活の方便に海軍報道部におべつかをつかひ、三百円也の月

給で意味もなく南方へ進出し、「右ハ報道班員ニ適セザルモノト認ム」といふ現地司令官の確認付で内地へ追ひ帰されるまでの、約一年間の見聞を廻らぬ筆で報告書風に綴つた放浪記である。（『定本久生十蘭全集　第七巻』六一九頁）

「内地へよろしく」は題名が示すように、三十郎が前線からの「内地へよろしく」という伝言を内地へ持って帰る話である。小説中に「内地へよろしく」は三回出てくる。一回目は第二章「雨月」で、三十郎が山吉船長たちと別れて一人でA諸島の警備隊のもとへ行くとき、どん助が「どのみち、あなたはご帰還になられるのでありませうが、そのせつは、内地へよろしくいつてつかあされ。忘れんやうにねがひます」（『定本久生十蘭全集　第五巻』六六頁）と言う場面である。二回目は第五章「女文」で、三十郎が海軍警備隊と別れて内地へ帰ることになったとき、士官室の一同が彼を見送り、手を振って、「「内地へよろしく」、「どうか、内地へよろしく」」（九四頁）と頼む場面である。三回目は第六章「山川」で、帰りの飛行機が日本の上空に入るとき、三十郎が藪の中から伸び上がった松を眺めながら、前線の人々に頼まれたことを思い出し、「前線からよろしくといふ伝言である」（一〇一頁）と最初の挨拶をする場面である。三十郎は前線からの伝言を内地に伝えるだけではなく、前線の内地に対する誤解を解く役割を果たしており、前線と銃後の架け橋になっている。

確認しておきたいのは、「内地へよろしく」に描かれている三十郎から見た前線の様子である。食糧不足については前述したが、にもかかわらず、内地でルダンさんに「あんたはまた前線へ行きたいのじゃないのかね」と聞かれたとき、三十郎は次のように答える。

さうなんだよ、ルダンさん。困つたことには前線にはあまりいいものばかりがありすぎるんだね。親切、人情、思ひ遣り、犠牲……数へあげたらきりがないが、純粋と善意だけの世界なんで、理想社会とはまた別な、われわれが考へ得る最も完全な社会のかたちがそこにあるんですな。（『定本久生十蘭全集　第五巻』一七七頁）

爆撃がほぼ毎日来るにもかかわらず、三十郎は前線が「最も完全な社会」だと思う。「理想社会とは別」というのはもちろん戦争のためである。しかし三十郎にとって、爆撃や食糧不足は問題ではなく、前線に「親切、人情、思ひ遣り」があるから、「完全な社会」なのである。その一方で、彼は内地に対して誤解を抱いていた。その誤解について、三十郎は内地へ帰ったあと、磯吉の家で村の人と食事をしながら次のように語っている。

前線で聞く内地の噂といふと、紳士が薯や大根を抱へて血眼になつて走り廻つてゐるとか、さうかと思ふと、このせつ、敵はアメリカでなくて食物だなどと平気で放言するものもあるとか、そんないやな話ばかりで……戦争は勝手にそちらでしろ。こつちは食ふことに忙しくて戦争のことまで考へていられない（『定本久生十蘭全集　第五巻』一一七頁）

三十郎自身も飛行機が内地へ近づくにつれて次第に嫌な気持ちになり、「なることなら、このままここから前線へ飛び帰りたい」、内地よりも毎日爆撃の来る前線の方が好ましいと思う。しかし、村で娘たちが高波を押し切りながら、雪の中を漕ぎ出していく健気な様子を見て、「内地にも前線とは形のちがうはげしい戦いがある」のだと思い、次のように考える。

なるほど内地には、健気なものや美しいものがまだ沢山にあるのだと思ひ、急に眼が開けたやうになつて、内地はつまらないなどと、碌になにも知らぬくせに猪口才なことを考へてゐたじぶんといふものが、なんともくだらなく見えだし、穴でもあつたら入りたいくらゐな気がしました。（『定本久生十蘭全集　第五巻』一一七頁）

このように、三十郎が前線で抱いていた内地への誤解は帰還後に解かれる。内地には内地の戦いがあり、前線の兵士たちに劣らず戦っていること、「うろたえ廻つた、浅ましい、醜いものばかりが前線にきこえ、真先に伝はるべきもののはうが一つも伝はらずにゐる」（一二〇頁）ことに気づく。藤田と村の人々が自発的に「特別移動修理隊」という名で南方へ出て漁船を修理するという決心を見て、三十郎は「前線とか銃後とかいふ区別はなんの意味もなさなくなり」、「内地、外地を含めて全体が戦場であり第一線だ」（二〇八頁）と思う。そして、三十郎は藤田と村の人々を南方の前線へ連れて行く。

このように見てくると、「内地へよろしく」の三十郎は前線と内地の架け橋のような存在として描かれているといえる。第十五章「初虹」の末尾には、「雲切れの明るい空に、この春はじめての、まるで内地と外地に跨がつたやうな豪快な虹がかかつてゐる」（一六二頁）とある。この内地と外地とをつなぐ虹は、三十郎のことを指しているのだと言っていいだろう。十蘭が「内地へよろしく」を改作する際に主人公の一時帰国を削除したのは、「風流旅情記」を三河万蔵の南洋における純粋な個人放浪記にしたかったからではないだろうか。内地への一時帰国の有無によって、それぞれの作品で主人公の戦争に対する認識が異なることになる。内地から

再び前線に戻った三十郎は、報道班員として戦場に行くことを次のように覚悟している。

戦闘員も非戦闘員もなく同じやうに銃爆撃にさらされる以上、内地、外地を含めて全体が戦場であり第一線だといふこともやうやく納得出来、なるほど戦争といふからには当然ここまで来なければならなかつたものだと、今までの迂闊さにいささか顔の赧らむ思ひだつた。

前線へたいする三十郎の憧憬は、親切、心遣り、人情、犠牲などと善意ばかり積み重なつた言ひ現し難い前線の情誼にもう一度触れたいといふのであつたが、そんなたはけたことをいつてゐる時ではないといふことを、このほんの一ヶ月ほどのはげしい戦局の推移の中で手厳しく思ひ知らされた。たとへ報道班員でも、一人でも多く敵を殺して死ぬ方法を先に頭の中に用意するのでなければ前線へなど出て行く必要はなかつた。（『定本久生十蘭全集　第五巻』二〇八頁）

内地から再び南方前線に戻った三十郎は、前線での戦争に対する考え方が変化した。内地に帰る前は前線の「親切、心遣り、人情」といった面ばかり見ていたが、今ではこれらは「たはけたこと」だと考え、戦争の真の姿が見えるようになった。報道班員の自分でも、一旦前線へ出たら敵を殺すことが何よりも重要で、戦場での死も覚悟しなければならない。

それに対して、「風流旅情記」における万蔵の戦場での反応は次のようなものである。

戦場へ身を置きながら生死を問題にするやつはない。すべての法則はそれを発端にして行くのであつて、報道班員といへども必然、おなじ規範にしたがふわけであるが、三河万蔵としては、恐怖といふぬきさしのならぬ動物感情までを自由に制御しえるとは思つてゐない。この種の危急が迫ると、反射的に蟇のやうに伏せるか、さうすればすべての感覚の窓を閉ぢることができるかのやうに固く眼をつぶる。これはダーウィンの「下等動物における連合性反射運動」といふものに相当するので、生死の覚悟とは別なものであつた。（『定本久生十蘭全集　第七巻』六二九頁）

万蔵は戦場での死の覚悟を否定している。戦場に身を置くと生死を問題にする人間はいない。しかし、自分は報道班員である前に一人の人間である。人間である以上、恐怖を目の前にすると、「下等動物における連合性反射運動」のように目をつぶったりする。本当の戦場での「生

死の覚悟」というのは、恐怖を抱きながらも「一人でも多く敵を殺し」、そのうえ自殺の方法をあらかじめ頭のなかに用意することである。ここで注目したいのは、右の引用冒頭の箇所が「内地へよろしく」にも書かれており、さらに続く内容が右とは異なっていることである。

村の近くの海に敵の潜水艦が出たことを知った磯吉は、より正確に通報するため、一人で小さな磯舟に乗って冬の怒濤の海を切りながら近づいて行く。それを見ている三十郎は次のように思う。

> 戦場に身を置きながら生死を問題にするやつはない。すべての法則はそれを発端として組立てられ展開されて行くのであるが、腑甲斐ないとばかりいはれてゐた内地の、人知らぬ一漁村で、通報の正確を期すだけのために、はじめから命を投げだしてかかつてゐるものがゐるといふ事実はなかなか容易ならぬもので、ここに一人の磯吉があるとすれば、おそらく三十郎などの知らぬ日本の隅々に、まだまだ無数の人知れぬ真率と実誼な精神があるのに相違ない（『定本久生十蘭全集　第五巻』一二〇頁）

二つの引用を見比べると、戦場では生死は問題ではない、すべては規範に従わなければならないというところまでは同じだが、「内地へよろしく」では、磯吉の行為に対して敬意を示すために描いているのである。もともと「腑甲斐ない」磯吉をはじめとする内地の人々には期待していなかったが、結局彼らは前線に劣らず戦争のために頑張っているのである。これに対して「風流旅情記」では、彼を報道班員というより、むしろ一人の人間として戦争に直面したリアルな反応を描いている。同じ書き出しにもかかわらず、目的によって描き方を変えるのは十蘭の改作方法の特徴であり、「内地へよろしく」と「風流旅情記」の随所で見られる。しかも、描き分けがなされていながら、何の違和感もなく、自然と内容につなげられている。

「内地へよろしく」の改作に関してもうひとつ注目すべき点は、「風流旅情記」で新たに二千字近く書き加えられた、ニューギニア西海岸のジャングルの描写である。十蘭はまず、飛行機から見たニューギニアのジャングルを描き、百米以上もある巨木の梢が密着している様子を「無限の苔の原か、大規模な地面の黴とでもいつた感じ」と表現している。そして、ジャングルに生息する動植物を紹介したうえで、雨季で巨大な喬木が「倒木」した原因、その様子、結果を詳しく記している。ここで、「倒木」の様子を描いた部分を引いてみる。

> 大雨がちよつと小降になつた黎明、高い虚空で北風の呻きのやうなかすかな唸声がする。

それが次第に増幅して、一種の叫びのやうなものに変る。これが「倒木」の前触れである。風もないのに高い枝々がザワザワ騒ぎだして鳥のやうに羽博きする。ざわめきと叫びはジャングルの奥へ反響し、それがいくどか木精をかへして空もどよもすやうな大響音になり、巨木は泥酔したやうによろめきはじめる。

突然、あらゆる物音と動きがハタと静まり太初のままの静寂にかへつたとと思ふと、百尺の物体は摩擦音をたて、すさまじい風動をおこしながら轟然と倒れてくる。一つの倒木はつぎの樹の倒木を誘ひ、将棋倒しにつぎつぎにはてしもなく倒れていく。壮観ともいふべき光景だが、その下敷きになつたら、どんなものでもひとたまりもない。(『定本久生十蘭全集　第七巻』六三五頁)

南方のジャングルや「倒木」の描写をここまで詳細に書き加えていることは興味深い。「内地へよろしく」だけではなく、本章の冒頭で列記した十蘭の戦時下における南方作品群にも、こうした南方の自然に対する描写はほとんど見られない。しかし、従軍日記と照らし合わせると、これらの自然描写は八月二〇日の日記に基づいていることが分かる。日記の内容を「内地へよろしく」には入れず、戦後になって「風流旅情記」として改作する際に入れた十蘭の意図を明らかにするために、前述した「三河万蔵（すなわち私）」についてもう一度注目したい。つまり、「風流旅情記」には語り手が存在しているのである。「三河万蔵」という三人称は、「私」という一人称と見なしていいだろう。三人称は読者に冷静かつ客観的な視点を持たせる役割を果たすが、右に引用した自然描写は十蘭の日記すなわち手記であるとはいえ、引用部分は語り手の存在を際立たせる。そして、語り手の介在によって読者は戦場の残酷さや感傷性を対象化する。かくして「風流旅情記」は、主人公三河万蔵の「風流」な旅行記になったのである。

## 5　おわりに

本章では、久生十蘭が戦時下及び戦後に発表した南方作品と従軍日記を手がかりとして、従来看過されてきた十蘭の「南方徴用作家」としての一側面を考察した。十蘭は徴用前から積極的に戦争と関わっていたことから、戦時下の作品に戦争協力の傾向があるのはいうまでもない。しかし十蘭の南方作品は、戦争という非常事態を日常生活のようにユーモア溢れる筆致で描いている。このように、十蘭の戦時下の作品には戦争協力の姿勢が見られる一方で、文学性を重視する意志も窺え、これこそが十蘭の南方作品が極めて特徴的な所以である。

戦後、十蘭は戦時下の長篇小説「内地へよろしく」を改作して、中篇小説「風流旅情記」を

創作した。ここで十蘭は、主人公がＡ諸島（アール諸島）に辿り着く経緯の改稿、内地への一時帰国の部分の削除、ニューギニアの原始森林の描写の加筆など、大幅な改稿を行った。そして、語り手を介在させることで、戦時色が強い「内地へよろしく」を主人公ひとりの「風流」な旅行記に仕立て直したのである。

## 第二部まとめ

第二部では海野十三と久生十蘭を取り上げて考察した。探偵小説家出身である二人の徴用に海軍省の外郭団体くろがね会が深く関わっていることや、徴用そのものに対して積極的な姿勢を示しているところは両者で共通している。しかし、徴用中及び戦後に書かれた作品で表現されているものは、両者で全く異なる様相を呈している。戦時下における徴用作品について、十蘭の場合は戦闘が日々身近にありながら、その語りは柔らかい。そして、戦闘場面や戦死が直接語られることはほとんどない。それに対して、海野の場合は、露骨とも言える戦争協力的な言説が随所に見られる。戦後の作品についても、十蘭の場合は「内地へよろしく」を改作する際、「戦時下の南方前線」という背景は変えずに、内地へ帰るくだりを削除し、熱帯の自然描写を書き加えるのようなことで、主人公の心象風景を表現することを重んじている。それに対して、自らの戦争協力責任を感じた海野は徴用体験について全く触れていない。それは戦争責任から逃れようとしているのではなく、むしろ深く反省しているからであり、南方徴用体験は彼のなかで触れてはいけない課題となってしまったのである。

このように、類似した経歴を持つ両者の南方徴用体験に対する捉え方がここまで異なるのはなぜだろうか。この点に関して、筆者は次のように考えている。一九四〇年十月一二日、近衛文麿を総裁とする大政翼賛会が発足し、岸田国士が文化部部長に就任する。江戸川乱歩『探偵小説四十年』の「昭和十五年度の出来事」の項には、当時の情勢について次のように書かれている。

> 文学はひたすら忠君愛国、正義人道の宣伝機関たるべく、遊戯の分子は全く排除せらるるに至り、世の読み物すべて新体制一色、ほとんど面白味を失うに至る。探偵小説は犯罪を取扱う遊戯小説なるため、最も旧体制なれば、防諜のためのスパイ小説のほかは諸雑誌よりその影をひそめ、探偵作家はそれぞれ得意とするところに従い、別の小説分野、たとえば科学小説、戦争小説、スパイ小説、冒険小説などに転ずるものが大部分であった。
>
> （「探偵小説四十年（下）」『江戸川乱歩全集 第二九巻』光文社、四二頁）

こうした事情から、主として犯罪を描く探偵小説は禁圧されるようになっていった。「電気風呂の怪死事件」（『新青年』一九二八年四月号）、「振動魔」（同一九三一年一一月号）、「爬虫館事件」（同一九三二年十月号）で探偵小説家として人気を博した海野も、こうした社会環境

のなかで軍事小説や科学小説に転じざるを得なかった。右の引用に続けて乱歩は、「中にも、海野十三君が最も出色であった」と述べている。確かに、探偵小説が書けなくなって以降、海野は日米未来戦なる科学戦争小説や少年科学小説を書いて大いに世評を博した。当時、愛国者と科学者という二つの〈顔〉を持っていた海野は、時局の規定を抵抗なく受け入れられたと考えられる。実際、そうした戦争ものを書いていた関係から、探偵作家のうちで海野が「軍部などに対して、最も発言力を持って」いるようであって、「探偵作家の従軍を斡旋したのも海野」（『探偵小説四十年』四二頁）であったと乱歩が述べている。同様のことは十蘭の従軍日記からも窺える。十蘭は一九四三年八月一九日の日記に、内地へ送る手紙について、「おふくろ、ボンズ宛はいわば遺書の如きもの、土屋氏、海野氏宛は帰還命令の依頼なり」（『久生十蘭「従軍日記」』三八七頁）と記している。自身の帰還命令を海野に依頼していることから、海野と海軍の関係性が窺われる。別の言い方をすれば、海野は軍部と探偵作家の架け橋のような存在だったと見ていいだろう。海野のこうした立場は、彼の戦時下の作品に見られる戦争協力的な言説と無関係ではないと考えられる。

一方、十蘭は純粋な探偵作家ではないが、「黒い手帳」（『新青年』一九三七年一月）や「湖畔」（『文芸』一九三七年五月）を発表して好評を博した。大下宇陀児は、当時の探偵小説家のなかで誰が最も時代を明察し、誰が最も将来の活躍を期待できるかについて、「業績を見て判断すべきであるが、目下最も制作力の旺盛なのは久生十蘭」（「探偵小説界」『日本読書新聞』一九四〇年三月一日）であると述べている。しかし、探偵小説が禁圧されてから、十蘭は海野のように戦争小説や科学小説に転じることなく、歴史ものや時代小説を書くようになった。自身とその文学についてほとんど語らない十蘭は、中井秀夫が指摘しているように、「随筆や身辺雑記のたぐいは、ほんの断片的なものしか」残さず、「最後まで自分の作り出した作品世界の向う側に身を潜めて、めったに素顔らしいものを見せたことがな」（「解説」『久生十蘭全集Ⅲ』三一書房、一九七〇年二月、四三〇頁）かった。それゆえ、彼の思想の全体像を把握することは難しい。第四章で取り上げた「従軍日記」は十蘭の私的側面を窺える唯一の資料といえるが、そこにも戦意を高揚する言説はほとんど見られない。十蘭は徴用前、海野と同じく徴用に対してある程度意欲的な姿勢を示していたが、戦時下及び戦後の徴用作品だけではなく、私的な日記にも海野のような軍国主義的な側面を現わさなかった。

そして、二人の帰還後の活動も大きく異なっている。海野は講演で各地に引っ張り回され、東奔西走した。例えば、一九四二年七月九日の『東京朝日新聞』には、「二十八日には帰還作家石川達三、北村小松、海野十三諸氏の「文学報道班員帰還講演会」を東京で開催する」とい

う記事が掲載されている。帰還後の活動から見ても、海野は進んで戦争に協力していたことが窺える。それに対して、十蘭は戦後、海野のような社会活動は行わなかった。その代わりに、戦時下の作品を口にしない海野とは対照的に、戦前・戦中の作品群の改稿に情熱を傾けた。

戦時下の徴用体験に対する態度には、作家の性格や当時の状況など様々な要素が関わっていることは言うまでもないが、第二部では海野十三と久生十蘭を通して、従来あまり論じられてこなかった探偵小説家における徴用体験の一側面を明らかにした。

# 第五章

## 林芙美子における南方徴用――「ボルネオ・ダイヤ」から「浮雲」へ――

### 1　はじめに

序章で述べたように、南方に徴用された作家には陸軍報道班員と海軍報道班員のほか、すでに平定された占領地を見聞し、占領の成果を日本国内に報告する、いわゆる「南方視察」を目的に徴用された作家もいた。本章で取り上げる林芙美子と第六章で取り上げる佐多稲子はこれにあたる。

林にとって、南方徴用は初めての戦地慰問ではない。一九三七年七月七日に日中戦争が勃発し、一二月に南京が陥落した際には、『毎日新聞』（当時の『東京日日新聞』）の従軍特派員として戦地の上海と南京へ赴いた。また、翌一九三八年九月から約一ヶ月半、従軍作家として湖北省での漢口攻略戦に参加した。この従軍体験は『戦線』（朝日新聞社、一九三八年一二月）と『北岸部隊』（中央公論社、一九三九年一月）という報道文学として結実した。内容から見ると、川本三郎が指摘しているように、『北岸部隊』の核となっているのは「兵隊賛美」[43]である。このとき林は積極的に戦争に関わり、従軍体験を作品化している。

太平洋戦争開始から十ヶ月後、林は陸軍報道部の臨時徴用により、佐多稲子、美川きよ、小山いと子、水木洋子と共に南方へ赴いた。一九四二年十月末から一九四三年五月中旬までの約六ヶ月間にわたる具体的な行程については、すでに多くの研究がなされている。たとえば、中川成美「林芙美子：女は戦争を戦うか」[44]、加藤麻子「南方徴用作家　林芙美子の足取り」[45]、望月雅彦『林芙美子とボルネオ島――南方従軍と「浮雲」をめぐって』（ヤシの実ブックス、二〇〇八年七月）などである。

また、二〇一二年から山下聖美が林の南方徴用中の滞在先であるインドネシアのトラワスと

43　川本三郎『林芙美子の昭和』（新書館、二〇〇三年二月）二四四頁。

44　神谷忠孝・木村一信『南方徴用作家』（世界思想社、一九九六年三月）所収。

45　『武蔵大学人文学会雑誌』第三六巻第三号、二〇〇五年三月。

スマトラで現地調査を行い、「林芙美子の南方従軍についての現地調査報告（1）（2）（3）」[46]と「林芙美子が見た日本占領下インドネシアの日本語教育：スマトラ・パレンバンの瑞穂学園についての調査報告」[47]を発表している。しかし、この六ヶ月間の南方体験をもとに林が創作した小説に関する研究は、まだ十分に行われていないのが現状である。そのひとつの重要な原因は、林は南方でインドシナ半島やジャワ島、フィリピンなど様々な場所を視察旅行したが、それらの体験を作品化していないためだと考えられる。中川成美は林の徴用体験と創作について次のように述べている。

> 帰国後に書かれたものは数が少なく、またほとんどが未完で、結局この「南方」体験の全容についてまとまったものは書いていない。戦後の活動でもおそらく最も印象深かったと思われるジャワ島での体験は創作化されず、旅行記のないベトナムがその主要な舞台となった。「南方」から帰還して、芙美子の創作意欲は急速に衰え、出版界の動向とも相俟って四五年（昭20）の敗戦までまとまった執筆活動はしていない。（「林芙美子：女は戦争を戦うか」『南方徴用作家』二五六頁）

中川が述べる「旅行記のないベトナムが主要な舞台となった」作品は、一九四九年一一月から一九五一年四月にかけて連載された長篇小説「浮雲」を指している。しかし、近代日本における南洋移民史研究者の望月雅彦『林芙美子とボルネオ島――南方従軍と「浮雲」をめぐって』によれば、林はボルネオやジャワには行ったが、「浮雲」の舞台となったベトナムを含む仏領インドネシア（仏印）は「女流作家を派遣する対象外地域」（一一三頁）なので、林が仏印に足を踏み入れることは現実的に不可能である。また、「浮雲」における仏印描写の写実性の豊かさに関しては、「戦争中はタイ・仏印も含めて南方関係の書物が、専門家向けから小国民（少年・少女）向けまで多数出版されていて、参考書に困ることはなかったと思われる」（一一七頁）という。また、羽矢みずき「2つの「仏印」／2つの「屋久島」――林芙美子『浮雲』論」

46（1）『日本大学芸術学部紀要』第五五号、二〇一二年三月。
（2）『藝文攷』第一七号、二〇一二年二月。
（3）『日本大学芸術学部紀要』第五七号、二〇一三年三月・
47『日本大学芸術学部紀要』第六二号、二〇一五年十月。

は、「浮雲」における仏印の描写には、仏印の奥地森林地帯の調査に従事した農林技師・明永久次郎の『仏印林業紀行』（成美堂書店、一九四三年十月）からの引用があると指摘している。[48] しかし、それが林の実体験ではないとしても、「浮雲」は林の南方表象を考察するための重要な作品であることに違いはない。また、帰還後から敗戦までの間、確かに林の創作意欲は衰えたが、戦後になって再び高まってきたことは見逃すべきではない。そのなかで南方が描かれた小説は以下の四篇である。

①「ボルネオ・ダイヤ」（『改造』一九四六年六月）
②「麗しき脊髄」（『別冊文藝春秋』一九四七年六月）
③「荒野の虹」（『改造文芸』一九四八年三月）
④「浮雲」（『風雪』一九四九年一一月～一九五〇年八月、『文学界』一九五〇年九月～一九五一年四月）

本章では、上記①～④の作品を取り上げて、女たちの「南方」、「南方」表象化の二面性、恋愛小説から見る「南方」という三つの方面から、林芙美子の戦後の南方を題材とした小説において、南方がどのように表象され、また、どのように変容していったのか考察してみたい。

## 2　女たちの南方――現実逃避の場所

敗戦後、ジャーナリズムの復活に伴い、林も活発な文筆活動を行っていく。日本敗戦から十ヶ月後の『改造』に発表された短篇小説「ボルネオ・ダイヤ」は、林が自らの南方体験を題材にした戦後最初の作品で、あらすじは次の通りである。

東京からボルネオに来て四ヶ月になる球江は、慰安婦として生活している。ある夜のこと、一緒に住んでいる慰安婦仲間の澄子に誘われ、連れ立って小舟に乗ってマルタプウラアの川辺に涼みに出かける。「内地へ復りたい」と言う澄子に対し、球江は内地へ帰りたいとは思っていない。部屋に戻ると球江の恋人眞鍋が会いに来て、鉱区で掘り出したダイヤモンドを球江に贈る。その翌日、眞鍋と別れた直後、同僚の一人が血相を変えて現れ、澄子が未明に首をくくって死んだことを知らせる。

48『立教大学日本文学』八一号、一九九八年一二月。

南方体験を題材にした最初の小説であることから、女主人公がどのような状況で南方へ行ったのか考察することによって、林の南方表象の一側面が窺えると考えられる。女学生の球江は母親に黙って学校をやめ、同棲する松谷の子を産むが、松谷は球江に相談もせず子供を他人へ譲ってしまう。親許を逃げ出した球江には配給もなく、松谷に食べ物を工面してもらって生きている状態である。そのような球江が南方に行くことになる経緯は次のように記される。

松谷が勤めに出た間は、一日部屋にこもつてごろごろしてゐることが、球江には退屈だつたので、或日近くの桂庵を頼つてゆき、熱海の旅館の主人だといふ女にあつて、窮屈な内地の生活のなかであくせくしてゐるよりは、一つ南へ進出して働いてみてはどうかとうまいことを云はれて、球江は急にそんな気になり（中略）誰にも黙つて、球江は自分と同じやうな仲間の女達五人ばかりと広島へと発つて行つたのだつた。（『林芙美子全集　第六巻』一九七七年四月、文泉堂、一五二頁）

毎日「部屋にこもつてごろごろ」して自らの存在価値を見失い、「正常でない」「窮屈」な生活から逃げたくなった球江は、南方へ行くことを決める。こうした設定は、三年後の一九四九年一一月から連載が始まった「浮雲」にも引き継がれている。物語の舞台がボルネオに限定されている「ボルネオ・ダイヤ」とは異なり、「浮雲」の主な舞台は東京で、南方が直接的な舞台になるのは第三章から第一二章にかけての十章だけで、残り五七章はすべて東京である。それでも、「ボルネオ・ダイヤ」と同様に、「浮雲」においても女主人公が南方へ行く経緯は詳しく書き綴られている。一九四〇年、静岡の高等女学校を卒業した幸田ゆき子は、上京して姉の夫の弟にあたる伊庭杉夫の家に寄宿し、タイピスト学校に通い始める。ところが、寄宿して一週間目にして、ゆき子は妻帯者の伊庭に犯されてしまう。二人の関係は三年も続き、ゆき子は「かうした不倫から自分を抜けきりたい気持ち」で南方行きの決心を固める。そして、ことが決まるまでは「伊庭夫婦にも、静岡の母にも、姉弟にも打ちあけなかつた」（『林芙美子全集　第八巻』一七七頁）。球江もゆき子も、男との不倫関係から抜け出して新しい生活を始めるために、親友にも黙って南方へ行くことに決めたのである。

松谷に食べ物を工面してもらう球江も、タイピスト学校を出て農林省に勤めているゆき子も、南方へ行かないと生きていけないわけではない。彼女たちが南方へ行くことで求めようとしているのは、物質的なものというより、目の前の生活から逃げ出すことである。このように、主人公の南方行きの経緯から、「浮雲」は「ボルネオ・ダイヤ」の延長線上に位置していると言

える。

ところで、結局二人はそうした目的を達成できたのであろうか。小説には、ボルネオでの「四ヶ月の間のことが朦朧としてゐて、球江は、もう内地のことは遠い昔の夢のやうにしか思へないのだ」（『林芙美子全集　第六巻』一五三頁）とある。しかし、そうした「忘却」は、あくまでも消極的なものに過ぎない。河から部屋に戻ると、球江は強いブランデーを二、三杯飲んで、次のように考える。

> 四ヶ月の彼女の歴史などは須臾のやうに消えていつてしまふのだ。自然に、何も彼も自分といふものが毀れてしまつたと安心してしまへば、どんなところにも平然と坐りこんでゐられた。辱かしいといふこともなくなつた。（『林芙美子全集　第六巻』一五六頁）

南方へ来ると、仕事は東京で約束していたものとは違い、体を犠牲にすることだと分かって失望したが、四ヶ月が経った今日、球江はもうこの現実を受け入れている。内地へ帰る意欲が薄れ、南方の生活を受け入れたのは、自分の存在価値を見つけたからではなく、「自分といふものが毀れて」しまったからである。澄子が自殺したあと、球江は「何も彼も空虚の彼方に忘れがちになつてゐる自分」は「悪い女なのかしら」（一六二頁）と自身に問う。内地の生活から逃げたいという点からすれば、球江は自らの願いを実現したと言えるが、南方で「安心」して生活できるのは自分が「毀れ」たからであり、自分の存在価値は結局見つかっていない。

それに対して、「浮雲」のゆき子は一つの不倫からもう一つの不倫に巻き込まれることになり、結果から言うと、彼女の南方行きの根本的な目的は達せられない。このように見てくると、林が描いた作品において、女性にとっての「南方」は今の生活から逃げる場所として存在している。しかし結局のところは、日本と同じような目的のない日々を送ることになる球江にとっても、帰国後も富岡との感情のもつれが死ぬまで続いていくゆき子にとっても、南方は救いの地になるどころか、むしろ不幸な境地に落とす地になっている。

### 3　南方表象化の二面性

林の戦後作品における南方表象は、彼女の南方体験を研究するにあたって見逃すことはできない。「ボルネオ・ダイヤ」は戦時中のボルネオを舞台としているため、作中には直接的な南方の風景描写が多い。例えば、ボルネオの河の情景が描かれる箇所は、林の南方イメージの凝縮だと言えよう。泥で濁った河、呉服屋、米屋、雑貨屋などの穏やかな様子を描いたあとで、

林は次のように書いている。

人間と自然とが、この河筋だけは戦争とはおかまひなしにたはむれあひ、犬ころのやうにふざけあつて如何にも愛らしい自然の国を創つてゐるのだ。ボルネオの人達にとつては、戦争ぐらゐ迷惑なものはないであらう。（『林芙美子全集　第六巻』一五九頁）

実在の物によって、林は人間と自然との戯れに満ちた南方のイメージを浮かび上がらせる。一方、「ボルネオ・ダイヤ」には、戦時下の占領地にいる虚無感と閉塞感が漂っている。軍部の刑罰によって恋人が「重営倉」に処され、モロンブダックに送られて死んでしまった澄子と、南方で「自分といふものが毀れてしまつた」球江はもちろん、ダイヤモンド鉱区で働く眞鍋もボルネオにおける日本の軍政に不安を感じている。日本軍は南方を占領するまでは勇ましく突き進んでいたが、ここに落ち着いてしまうと、「軍隊の規律は、平和的なものに臆病になり、落ちつきがなくなつて」（一五八頁）きた。眞鍋は内地の妻に大粒の最も素晴らしいダイヤモンドを送ったことを思い出す。彼の妻はそのダイヤを政府に供出してしまい、そのあと手紙で「あなたのお気持ちを無にしなかつたことを讃めて下さい」（一五九頁）と書く。この愛国心の顕示は眞鍋にとって「見当違ひ」でしかなく、彼は日本の南方における軍政を連想する。

日々を多忙に追ひまくられてゐる荒びた女の指には、あまりに美しすぎるダイヤモンドの美は恐ろしいのかもしれない。流血の果てに得た一つの土地が、無智な侵略者の為に圧政を敷き、民衆を烏合とあなどり、失政を気づかないおろかさといふものは、ダイヤモンドの価値を知らない日本の女のこゝろと何か通じあつてゐるやうに考へられ、停滞しきつてゐるこのごろの軍政に眞鍋はそれを感じるのであつた。（『林芙美子全集　第六巻』一五九頁）

眞鍋の日本の軍政に対する不満には、失政に気づいていない日本軍の南方占領はうまくいくのかという不安が潜んでいる。自殺した澄子、自分というものが毀れた球江、日本の南方における軍政に失望した眞鍋、三人とも南方で虚無感と不安に苦しめられる。

前述したように、林は南方から帰還後の二、三年間、作家活動を停止している。「ボルネオ・ダイヤ」を発表する一ヶ月前の一九四六年五月、彼女は「「林芙美子選集」自作に就て」で、現在の自分は「非常に虚無的」で、「稀有なこの長い不幸な戦争が、人々のやうにはいちはや

く忘れてはゆけない自分であることに悲劇的なものを感じ」（『林芙美子全集　第十六巻』二四〇頁）ると述べている。戦後を軍国主義から解放された明るい時代と捉え、終戦後の日本を書く他の作家とは異なり、南方体験を題材にして書いた最初の小説「ボルネオ・ダイヤ」の舞台を戦時下の占領地南方に設定したのは、林が終戦後に感じた虚無感によるところが大きいと思われる。

「自然と人間がたはむれ」、それと同時に虚無感と不安が潜んでいる南方の二面性は、「麗しき脊髄」にも引き継がれている。ビルマから復員した喬造は、帰国してみると家は焼け、母親は終戦直前に死んでいた。妹の家に厄介になるが、二ヶ月もいると気詰まりになり、無断でそこを飛び出して放浪の生活が始まる。ある夜、田原町の安宿で満州から引き揚げた女性と出会い、憐れみと共感のなかで次のように考える。

> 眼をつぶりながら、喬造は、二十世紀はもうこの辺で沢山だと思つた。新しい二十一世紀二十二世紀……そんな夢のやうな変化を希ふ気持ちでいつぱいである。偉大な魔法使がゐて、巨きい手帳の頁を二三世紀速くめくつてくれないものかと空想する。自然と人間がたはむれてゐるやうな南方の土地々々に似た極楽の世界が欲しい。（『林芙美子全集　第六巻』一七四頁）

「ボルネオ・ダイヤ」では人間と自然が戯れる日常生活の場として南方が描かれているのに対して、「麗しき脊髄」では帰りたくても帰れない「極楽の世界」として南方が描かれている。彼が希っているのは、自分が滞在していた昔の南方へ戻ることではなく、手帳の頁を速くめくる「魔法」によって、未来の南方へ行くことである。右の引用が示しているように、帰りたいのは「自然と人間がたはむれてゐる」「極楽の世界」の南方である。しかし、「自然と人間がたはむれてゐる」自然環境であれば、「昔の南方」にもあるはずだ。では、なぜ「昔の南方」には帰りたくないのか。それは、「麗しき脊髄」で描かれている南方滞在のもう一つの側面――不安があるからである。安宿で、満州から引き揚げて来た女から、彼女が二人の子供を連れて日本に帰る話を聞いた。上の子の手を引き、下の子を背負って一日四十キロ歩いて帰るつもりだったが、上の子は途中の朝鮮で死んでしまい、下の子も病気にかかって、「地獄さながらな生き方」（一七三頁）だと女は語る。喬造は寝る前に南方にいたときのある日を思い出す。

> 南の或日のインパールを思ひ出した。その日が、いつだつたか、もう忘れてしまつたけれ

ども、ニッパヤシの小舎の中から、空を見て、自分のやつてゐることは何だらうと思つた事があつた。気違ひになる一歩手前まで来てゐた、あのぎりぎりな気持ちをいまでも時々妙な時に思ひ出すのである。（『林芙美子全集　第六巻』一七三頁）

「自分のやつてゐることは何だらう」という不安の正体は、日本の兵士が南方へ来て戦うことへの疑問である。しかし、一人の兵士として戦地で戦うのは当然であり、そうした疑問を抱えていても、誰かに聞くわけにはいかない。それは喬造ひとりの不安ではなく、兵隊のなかでもこの戦争の意義、戦争の行方に不安を覚える人は多いと思われる。喬造が「このぎりぎりな気持ち」を戦後まで「時々妙な時に思ひ出す」のはなぜだろう。戦後、彼は満州から引き揚げて来た女のような戦争被害者の悲惨な姿を見て、自分が南方で戦った意味は何だろうかと自分に問い続けている。一方で、生き残った人として戦死者に対する罪責感もある。病気に罹った女の子供の顔を見たとき、喬造は、熱病で土の上に寝ころんだ兵隊の「頬は落ち、眼はくぼみ、歯茎は飛び出してゐる」（一七三頁）顔を思い出した。また、南方で船の機関士をしていた女の夫が一九四四年に戦死したことを知り、生き残った自分の生活は「地獄」であるが、「自分だけいゝ生活をしてゐられるわけがない筈だ」（一七三頁）と、戦死者に対する罪責感を抱いている。しかし、一見矛盾しているように見えるが、戦死者に対しては罪責感と同時に羨望の念をも感じている。「無気力に生きてゐるほど怖ろしいものはない」ため、「戦場で死んだ者を羨ましいと思」（一六九頁）うのである。

ここで注目したいのは、主人公の喬造が「復員兵」であるという設定である。「麗しき脊髄」だけでなく、このあと取り上げる「荒野の虹」も復員兵の戦後の悲しみや苦痛を描いている。終戦後、プロレタリア作家の多くが「民主主義」「新生日本」の明るさに目を向けるとき、林は戦後日本の「暗い」部分に目を向けた。林は「「晩菊　林芙美子文庫」あとがき」（一九四九年三月）で次のように語っている。

昭和二十年の十月に私は東京へ戻つて来た。そして始めて雨を書いて新潮社に発表した。名古屋へ旅をして、雨の降る駅頭に、始めてみすぼらしい復員兵の姿を見て、私はさうした人々の代弁者となつて、何か書かなければと云ふ思ひにかられた。（中略）私の心の中には、常に泥土にまみれて、かつての戦場の露と消えた兵隊に対しての思ひが消える事なく明滅してゐるのだ。（『林芙美子全集　第十六巻』二六〇頁）

戦争が終わったからといって、居場所のない復員兵たちに明るい時代がきたわけではない。「ボルネオ・ダイヤ」から「麗しき脊髄」へ、作品の舞台を戦争中の南方から戦後の東京に移すことで南方は対象化される。林は戦没者、復員兵、戦争未亡人、引揚者など、戦争被害を受けた人間たちに注目する。喬造の戦時下で抱えていた不安だけではなく、戦後における戦死者に対する罪責感と羨望という複雑な感情も描かれている。喬造は「戦争の様々は忘れ去るべきものではあるだらうけれども、戦争のために散華した数々の魂は、あまりにもいたましく生きた世界から閑却され始めてゐる」（『林芙美子全集　第六巻』一六六頁）と思い、戦場で死んでいった戦友たちを忘却する世間に怒りを覚える。実際、この敗戦直後の忘却は容易に想像がつく。高田理恵子は『学歴・階級・軍隊』（中公新書、二〇〇八年七月）で次のように指摘している。

> 忘却というより、負けた戦争の戦没兵士をどう扱ってよいかわからなかったのかもしれない。苦しい戦後生活の中で、軍人たちは戦争責任を負うものとして、怒りの対象になった。
>
> （『学歴・階級・軍隊』一四九頁）

新生活を始めようとしている多くの人にとって、戦没者は辛い戦争を思い出させる厄介な存在でしかない。その意味で、戦争で生き残った喬造は死者に対して罪責感を抱いている。その罪責感ゆえ、「死んだものが馬鹿をみたのだと云つた」人々に怒りを覚えている。しかし、それと同時に、どこにも居場所がない喬造は「戦場で死んだ者を羨ましい」（一六九頁）とも思う。

「麗しき脊髄」で表現された南方の「人間と自然がたはむれ」るイメージ、戦時下の不安、戦後の死者への複雑な感情は、九ヶ月後に発表された「荒野の虹」にも共通している。一年ほどの結婚生活を送った後に出征した龍男は、六年後スマトラから帰還したが、妻から離婚を切り出される。その一ヶ月後、龍男は南方で知り合った慰問団所属の踊り子・セキ子と電車で再会する。セキ子は「私、帰つて、もいちど行きたいなア……人間と自然がたはむれてゐるみたいで、年中暑いなンて好きだわ」（『林芙美子全集　第七巻』一一八頁）と南方の生活を回想する。南方の「人間と自然がたはむれて」いる「極楽」の風景がここでも描かれている。一方で、南方滞在中の不安について、セキ子は龍男に次のように語る。

「――ねえ、あンたさう思はない？　何だかあのころつて、あンまり調子がよすぎたのよ。

まるでお金持ちのうちへ留守番に来てるやうだつて、その少尉さん云つたけど、日本が占領したつもりでいい気になつてたけど、本当は留守番に行つてたみたいな戦争ぢやアなかつた？」（『林芙美子全集　第七巻』一一八頁）

南方は他人の家であり、いつか本当の主人が戻って来るという不安に、あの少尉は気づいていた。「麗しき脊髄」と同様に、舞台が戦後の日本であるため、南方体験が彼らにもたらすのは戦時下の不安だけでなく、戦後における死者に対する負い目や罪責感もある。龍男の戦友である須長が戦死したことを知ったセキ子は、「戦争つて大変だつたわね。死んだひとが一番可哀想ね。死に損ですもの……」（一一七頁）と言う。セキ子が時々須長を思い出すことを聞いた龍男は、「時々思ひ出してゐたと云はれて、龍男はかうした中にも想ひ出はあつたのだと、死んだ須長もまんざら不幸ではなかつたのだと微笑の湧く気持ちだつた」（一一七頁）。「麗しき脊髄」の喬造と同様に、死者に対する罪責感は彼らの犠牲を忘却することによるものである。林は「「林芙美子選集」自作に就て」（前出）で次のように述べている。

この戦争で沢山のひとが亡くなつてゆきましたけれども、私はそのやうなひとたちに曖昧ではすごされないやうな激しい思ひを持つてゐます。せめて、そのやうな人達に対してこそ仕事をするといふことに、私は現在の虚無的な観念から抜けきりたいとねがふのです。

（『林芙美子全集　第十六巻』二四一頁）

注目したいのは、林の戦後南方作品は戦死者、復員兵、戦争未亡人、引揚者を描いているが、作品のなかで高邁な平和論や知的な戦争批判を語ることなく、セキ子の「死に損」という言葉で表されるような、あくまでも「庶民の戦後」に焦点が当てられているということである。敗戦直後、混乱から立ち上がろうとしている多くの作家は過去の戦争の悲惨なことを思い出したくないときに、庶民出身の林芙美子は復員兵など社会の底辺で生きている人を書かざるを得ない。そうしなければ、彼女は「虚無的な観念」に囚われるのである。もちろん、戦争が終わってからも、戦争の原因や戦争責任をめぐって語り続ける作家も少なくない。しかし、林は彼らとは違う。彼女にとっては、こうした大きな議題より、人間一人ひとりの運命や目の前の生活の方が重要なのである。

「浮雲」のなかでは思い出を中心として描かれる南方も、前述した二面性を持っている。帰還後、富岡のもとを訪れたゆき子は仏印での思い出話に興じるが、富岡は「もう、二度といけ

やしないよ」と返す。それに対して、ゆき子は「人間つて、何処でも、自由に住めるつてわけにゆかないものなのね。自然と人間がたはむれて、楽しく暮らすつてわけにゆかないものなのかしら？」（『林芙美子全集　第八巻』二一三頁）と言う。自然と人間が戯れている楽園として南方を捉える点では、「ボルネオ・ダイヤ」「麗しき脊髄」「荒野の虹」「浮雲」は共通している。

「自然と人間のたはむれ」について、林は「「放浪記Ⅱ　林芙美子文庫」あとがき」（一九四九年十月）でも言及している。「自然と人間が、愛らしくたはむれる世の中が私のユウトピア」（『林芙美子全集　第十六巻』二七〇頁）と述べて、これが林にとっての南方イメージの中核の一つである。ただし、ゆき子が戻りたくても戻れないあの「自然と人間がたはむれ」ていた仏印での生活にも不安が漂っていた。ダラットに着いてからある日、食堂で食事をしているゆき子に、山林事務所の所長が話しかけてくる。

「内地は段々住み辛くなつてるさうですが、こゝにゐれば極楽みたいでせう？」

とゆき子へ話しかけて来た。極楽にしても、ゆき子はかつてこんな生活にめぐまれた事がないだけに、極楽以上のものを感じてかへつて不安であつた。富豪の邸宅の留守中に上り込んでゐるやうな不安で空虚なものが心にかげつて来る。（『林芙美子全集　第八巻』一八七頁）

「荒野の虹」で記されていた、日本人の南方滞在は「留守番に行つてたみたいな」ものであるという不安が、「浮雲」では「富豪の邸宅の留守中に上がり込んでいるような不安」として再現される。日本軍が仏印北部に進駐したのは一九四〇年九月からであり、翌年七月には南部にも進駐した。ゆき子が南方へ発つのは一九四三年十月、つまり日本が仏印を占領して二年余りが経ったときである。そうした状況のなか、ゆき子は自らをこの土地の本当の主人だと思い込んでもいいはずだが、彼女は「富豪の邸宅の留守中に上り込んでゐるやうな不安」を抱く。「富豪」とは、昔この地を占領していたフランスのことである。日本はフランスが植民地としていた仏印に「解放者」として進駐し、そこでは日本では考えられなかったような豊かな生活ができた。しかし、フランスが再び戻って来るかもしれないため、その生活はまさに「富豪の邸宅」へ「留守番」に来たようなものである。これが不安の原因である。

「浮雲」では、ゆき子だけでなく、富岡も不安を感じる。ゆき子の「空虚」な、もやもやしてはっきりしない不安とは異なり、富岡は自身が抱いている不安の正体を明確に知っている。

この土地には、日本の片よつた狭い思想なぞは受けつけない広々とした反撥があつた。おうやうにふるまつてはゐても、富岡達日本人のすべては、此の土地では、小さい異物に過ぎないのだ。何の才能もなくて、只、この場所に坐らされてゐる心細さが、富岡には此頃とくに感じられた。貧弱な手品を使つてゐるに過ぎない。いまに見破られてしまふだらう。

（『林芙美子全集　第八巻』二〇三頁）

ここから、日本人は仏印を占領しているが、土地にとってはただの異物に過ぎないという富岡の不安が読み取れる。山林事務所で勤めている富岡は植物と民族のことを考える。事務所の庭先に植栽されている日本の杉の育ちの悪さを見て、民族の違いは植物と同じようなものであり、「植物は、その土地についたものでなければ、うまく育たないものなのだ」（一九七頁）と富岡は思う。富岡は最初から、この「極楽」生活が永遠に続くはずはなく、いつか終わる日が来ることを知っている。それに対して、ゆき子の「不安」のなかには僥倖があり、いまは「富豪の邸宅の留守中に上り込んで」いるようなものだが、もしかするとこの「富豪」はもうここには戻らないかもしれないと心のどこかで願っている。

このように、富岡とゆき子は仏印での生活に不安を感じているが、その「不安」の内実は異なっている。その差異が、二人が日本に帰ったあとで仏印での生活を振り返る際の態度の差として表出している。ゆき子は仏印での楽園のような生活を、突然強制終了され、もう二度と戻ることができないと分かっていても、「私達、二度と、あんな仏印の山奥なンて、行ける時ないでせうね。あすこで、二人で一生苦力になつて、木を切つて、暮らしてもいゝつて話し合つてたわね」（二一三頁）と富岡に向かって懐かしそうに語る。南方での生活に未練があるがゆえに、彼女は日本に戻ったあとも富岡にすがり続け、屋久島という、日本の南方に近い島まで付いて行き、そこで死んでしまう。ところで、富岡は戦時下にあってすでに、仏印にいる日本人は異物に過ぎないことを意識し、敗戦を覚悟していた。それゆえ、帰還後の彼はたまに仏印を懐かしく思うものの、ゆき子のような未練はない。

ただし、仏印で富岡が予期していなかったのは、いま仏印で異物にすぎない日本人は、日本の戦後社会でも異物として生きていかなければならないということである。日本に戻ると、ゆき子は生活を立て直そうとするが、住む家はなく、いい仕事も見つからない。厳しい現実は彼女を追い詰めていく。一方、かつて仏印で意気揚々としていた富岡は、日本に戻ると木材の買い付けの仕事をするが、うまくいかない。南方では輝いて見えた彼は、終戦後、見る影もなく輝きを失っている。「浮雲」は南方から帰還した人々が戦後社会をうまく生きることができな

かった挫折の物語なのである。

以上見てきたように、林の戦後作品における南方表象には「自然と人間がたはむれ」る楽園としてのイメージと南方体験がもたらす不安という二面性がある。舞台が戦時下のボルネオに設定された「ボルネオ・ダイヤ」では、戦争の見通しがつかないことに登場人物たちの不安が描かれているのに対して、舞台が戦後の日本に移された「麗しき脊髄」「荒野の虹」「浮雲」では、南方から引揚げた人々が戦後の日本社会で直面する厳しい現実が描かれている。南方体験が彼らにもたらすものは、戦時下に南方にいる不安だけでなく、戦後の日本に居場所がない自己の虚無感や戦没者に対する罪責感である。

林芙美子のこの一連の南方作品は、平和を讃えることも戦争を批判することもない。「「晩菊林芙美子文庫」あとがき」（前出）における彼女自身の言葉によれば、「戦後のみじめな庶民の暮らしを、私はやはりどうしても書かずにはゐられな」（『林芙美子全集　第十六巻』二六〇頁）かったのである。

## 4　恋愛小説から見る南方――野性と理性

一般的な南方徴用作品、例えば、第一章で取り上げた北原武夫「カリオランの薔薇」（『うなばら』一九四二年九月）や「嘔吐」（『新生』一九四六年一月）に見られる日本人と現地人の女との恋愛とは異なり、林芙美子の南方徴用作品の特色は、日本人男性と日本人女性の恋愛を描いているという点にある。

なぜ、林の南方徴用作品に現地人が登場しないのか。それは、第一に彼女の南方徴用が「視察」であることが考えられる。一九四二年一一月一六日にシンガポールに到着してから、一九四三年五月七日にマニラを発って日本に帰るまでの六ヶ月間、林はペナン、スラバヤ、南ボルネオ、バンジャルマシン、バタビヤなどを視察のために転々とした。北原や阿部のように同じ場所に何ヶ月も滞在できなかったことから、現地人との接触が少ないのも容易に想像できるだろう。そして第二に、前述したように、林にとって植民地や混血児、敵性国人といった大きな問題は重要ではない。そうした問題よりも、一人の日本人が戦時下で何を経験し、戦後をどのように生きているかということが大事なのである。

本節では、「ボルネオ・ダイヤ」から「荒野の虹」、「浮雲」における恋愛という視点から、林が描いた南方の一側面を浮かび上がらせてみたい。

「ボルネオ・ダイヤ」には兵士と慰安婦の恋愛が二例描かれている。一つは澄子とある兵士の恋愛であり、もう一つは球江と眞鍋の恋愛である。球江と連れ立って川辺で小舟に乗った翌

日の未明に、澄子は自殺する。自殺の原因は、澄子が客の兵士と愛し合い、二人で逃げて土人に化けようとするほどにまで関係が深刻化したことに起因する。兵士は「重営倉」でモロンプダックに送られて死んでしまう。澄子は兵士の死は自分に責任があると考え、罪責感で自殺したと思われる。ここから、戦時下の南方では、兵士の恋愛は軍部によって禁じられていたとまでは言えないにせよ、堂々とはできないものであることが推測される。

一方、球江と眞鍋は頻繁に寄り添って眠るが、まだ一度も体の関係はない。林は「ボルネオ・ダイヤ」における二組の恋愛を通して、戦時下の南方に滞在する日本人兵士と女の恋を描いている。球江と眞鍋の恋愛パターンは、後の「荒野の虹」と「浮雲」にも引き継がれている。それは、男が内地に妻を持っているということである。しかし、「ボルネオ・ダイヤ」の舞台は終始戦時下の南方に設定されている。また、澄子の死をもって小説が終わるため、球江と眞鍋の恋が終戦後どうなるかは不明だが、「荒野の虹」は、その疑問に対するの一つの答えと言えなくもない。

「荒野の虹」の龍男は、スマトラで戦地慰問のレビュー団の踊り子・緋佐子と二週間ほど関係を持つ。その後二人が会うことはなかったが、龍男は日本に戻ってからも、繰り返し彼女のことを懐かしく思い出す。セキ子から緋紗子が結婚していることを教えられた龍男は、特に驚くことも悲しむこともなく、かえって緋紗子の「愛らしさがいまはセキ子に乗りうつつたやうにあてはめて」（『林芙美子全集　第七巻』一一九頁）考える。緋紗子への気持ちが、セキ子と会ったあとにすぐセキ子に移ったことから、龍男は彼女たちが共通して持っている「何か」に魅了されたと考えられる。この「何か」は一体何であろう。林の二人に対する描写を見ると、「野性」という表現に注目される。龍男が緋紗子と最初に会ったときの彼女の外見は、次のように描写される。

> あごが張つてゐるのが難だつたが、鼻筋もとほり、紅を塗つた唇が野性的であつた。眼は意地の強さうな光りをたゝへて大きく、時々ちつちつと舌の先を鳴らす癖があつた。（中略）接吻のあと、あゝおいしかつたと云はれた事が龍男の癇にさはつた。十八歳の若さで、男を男とも思はぬ女のすさみかたが龍男には腹立たしかつた。（『林芙美子全集　第七巻』一〇九頁）

ここでは、「野性的」な唇、「意地の強さうな光り」をたたえている眼が強調されている。また、接吻したあとに緋紗子が「おいしかつた」と言ったことに対して、龍男は気に入らなく、

また腹立たしく思ったが、その後は「愛らし」く思うようになる。このように見ていくと、緋紗子の「野性的」な一面に龍男が惹かれたと言っていいだろう。その一方で、セキ子に会ってから、龍男は妻ともう一度あの「つまらないごたごたのむしかへし」を繰り返す勇気がなくなる。妻と別れたあとの一人暮らしを考えるとき、龍男は「いゝひともなく、いまだにごろごろしてるのよと云つた、セキ子の野性な愛らしさを心に強く停めてゐた」（『林芙美子全集　第七巻』一一九頁）。

また、小説の終盤で、酒を飲んだ龍男は次のように思う。

> セキ子の野性的な茶色の眼が、桜の葉の繁みのなかからいくつもいくつものぞいてゐるやうだつた。龍男は南のあの日が恋しいと思つた。六年をかけた兵隊生活のみじめさも、あの緋紗子との思ひ出のためにはつぐなはれるやうな気がした。（『林芙美子全集　第七巻』一二一頁）

このように、緋紗子とセキ子は、ともに「野性的」という共通点を持っている。龍男の緋紗子への気持ちが簡単にセキ子に移ったのも、彼が彼女たちに求めているものが、この「野性」であるからと言ってもいい。言い換えれば、龍男にとって、相手が緋紗子であるかセキ子であるかは重要でない。重要なのは、南方で出会った彼女たちの「野性的」な一面であり、しかもこの思い出が、南方での「兵隊生活のみじめさ」を慰めるものだということである。実際、この思い出によって戦時下の生活の惨めさだけでなく、戦後のいまの生活のつまらなさも慰められた。南方で六年間近く戦い、ようやく日本に戻った龍男は、妻に「復員して来た男も、内地にゐた女も、みんな戦争で変つてしまつたンですのよ。変な話ですけれど、貴方と寝る事が、私苦痛になつて来てゐるンです」（『林芙美子全集　第七巻』一〇四頁）と別れを切り出される。戦争で一度引き裂かれた夫婦関係は、戦後になってやり直すことはできないのである。夫婦関係だけではない。「敗戦のあと、いくぶんかの自由があると云ふならば、人間の心が生活に対して、自棄になり、ぢいつとものに耐へてゆく我慢の心がうせてゐると云ふ事だつた」（『林芙美子全集　第七巻』一〇七頁）と、敗戦は龍男の心にも影響を与えている。

南方から復員した龍男が直面したのは、戦争によって引き裂かれた夫婦関係と敗戦によって壊れた心である。そのとき、電車でセキ子と偶然再会した彼は南方の「野性」を思い出す。龍男にとって南方は単なる思い出ではない。舞台が戦後の東京に移るとともに南方は対象化、内面化され、南方の野性は主人公の戦後生活に影響を与えつづけていく。

戦争で夫婦関係が引き裂かれる点は「浮雲」でも反復される。南方から帰国した富岡は、妻との関係が悪化し、夫婦生活は「不毛荒蕪地に立」って、「お互ひに歩み寄つて、開墾する情熱もなかつた」。これはやはり前述した「野性」と関係する。次は、その具体的な表現である。

富岡にしたところで、かうしたごみごみした敗戦下の日本で、あくせく息を切らして暮す気はしないのである。野性の呼び声のやうなものが、始終胸のなかに去来してゐた。イエスの故郷が本来はナザレであるやうに、富岡は、自分の魂の故郷があの大森林なのだと、時々恋のやうに郷愁に誘はれる時がある。（『林芙美子全集　第八巻』二一三頁）

南方における「野性」の呼び声は、富岡が帰国したあとも彼の耳に響いている。富岡は日本で生まれたが、およそ五年間の南方体験を経て、南方は「故郷」のような存在になっている。また、「浮雲」も「荒野の虹」と同様に、南方の「野性」は女によって表現されている。日本に戻ってからゆき子と旅館で話すとき、富岡は次のように思う。

どんな感情も心にしまつてはおけないゆき子の野性的な性格が、愛らしかつた。家庭を背負つた、重い環境に押しひしがれてゐた気持ちから解放されて，酒の勢ひを借りたせゐか、富岡はゆき子の手の指を唇に噛んだ。（中略）妻の邦子にはない、野性な女の感情が、富岡には酒を飲んだ時にだけ、ぱあつと反射燈を顔に当てられたやうに判然りするのだつた。（『林芙美子全集　第八巻』二一三頁）

戦時下の南方で輝いて見えた富岡は、日本に戻ると仕事はうまくいかないうえに、母親と妻の面倒も見なければならない。暗い生活のなかで、ゆき子と過ごした南方の時間が懐かしくなる。妻にないゆき子の「野性的」な性格も愛らしくなった。ここで注目したいのは、富岡は酒を飲んだときにだけ、ゆき子の「野性の感情」を受け入られることである。富岡の空虚なダンディズムは、ゆき子の「野性的な性格」とは正反対である。ゆき子と初めて接吻したとき、富岡は次のように考える。

南方へ来て、清潔に女を愛する感情が、呆けてしまつたやうな気がした。森林のなかの獅子が、自由に相手を選んでゐた境涯から、狭い囚はれのをりの中で、あてがはれた牝をせつかちに追ひまはすやうな、空虚な心が、ゆき子との接吻のなかに、どうしても邪魔つけ

で取りのぞきやうがないのだ。（『林芙美子全集　第八巻』二〇二頁）

以上の引用を考え合わせると、富岡の南方に対する複雑な気持ちが浮かび上がってくる。一方では、南方に惹かれ、南方を自分の魂の故郷と考えている。他方では、南方は自分を囲う「をり」だと思う。こうした南方に対する富岡の二律背反した感情は、日本に帰ったあとで、南方を象徴するゆき子に移される。日本に戻ってから理性が主導するとき、彼はゆき子から逃げようとしながらも、「お酒を飲んだ時にだけ」ゆき子に愛らしさを感じる。

小説の冒頭には「理性が万物の根拠でありそして万物が・理性あるならば。若し理性を棄て理性を憎むことが不幸の最大なものであるならば……。―シェストフ―」（一六九頁）というエピグラフが置かれ、南方で理性を失った富岡とゆき子の悲劇が暗示されている。ただし、二人の理性の喪失には相違が見られる。ゆき子は日本に戻ってからはじめて富岡と会ったとき、彼に「私、思ひ出すわ。いろんなこと……。あの頃つて、私も、あなたも狂人みたいだつたわね」（二一二頁）と言う。日本に戻って理性を取り戻した富岡とは異なり、ゆき子は死ぬまでずっと「狂人」の状態が続く。ゆき子は何度か「敗戦の底」から自力で這い上がり、豊かな生活ができたが、その都度、生活の意欲をなくした富岡と付き合い、共倒れの状況にはまってしまう。小説の結末で、ゆき子は屋久島まで富岡について行き、結局そこで死んでしまう。

富岡にとってゆき子は南方を象徴していると同様に、ゆき子にとっての富岡も南方の象徴である。彼女の心のなかに、戦時中の南方の思い出があまりにも美しく輝いており、それを消したくないがために、みすぼらしい富岡との関係をずるずると続けていく。ダラットに着いた日、「高原のダラットの街は、ゆき子の眼には空に写る蜃気楼のやうにみえた」（一八三頁）とあるように、ゆき子の南方での生活はまさに「蜃気楼」のようなものだったが、彼女はこうした「お伽話の世界」（一七六頁）から目覚めることを拒絶し、「理性を棄て」ることにしたのである。

一方で、富岡にとっての理性喪失は、軍隊による独裁政権下での被抑圧感からくるものである。小説の結末部分で、屋久島へ向かう途上でゆき子は突然体調を崩す。富岡はゆき子の手を取って仏印のことを冷静に振り返る。

〔仏印での生活は〕死刑を宣告された人間が、その時から、誰にでも、物優しくなるやうな、そくそくとした淋しさで、人の心を恋ひしがつてゐたやうなものだつた。日本軍隊の、独裁政権のなかで、何一つ、自由な孤独を許されなかつた、精神の乾きを、ゆき子の体に

よつて求めた自分の身勝手が、今日、こゝにその結果をもたらしたのだ。（『林芙美子全集　第八巻』三八六頁）

富岡からみると、ゆき子との恋は軍隊による独裁政権下の寂しさと被抑圧感を慰めるために生じたものであり、彼が冷静に選んだのではない。そうした閉塞感と、ゆき子が理解している「狂人」の状態との間の相違は明らかである。ゆき子が「私も、あなたも狂人」だったと言うのは、理性は本能の前では一溜まりもないという意味であり、仏印では理性から解放されて本能が主導するようになっていたという意味である。ところが、富岡は、仏印に行った自分を森林から狭い檻のなかに囚われた獅子に譬えている。それは、仏印での自分が本能に主導されるどころか、逆に抑えられてしまっていたのだと思っているからである。それゆえ、日本に戻ってから富岡はゆき子と距離を置こうとする。ただし、南方で富岡が考えていなかったのは、南方が彼を囲う「をり」だとすれば、「ごみごみした」敗戦後の日本では「をり」という名の身を寄せる居場所がなく、のっぴきならない不幸に追い込まれてしまうということである。小説の結末部分はそのことを象徴している。

富岡は、まるで、浮雲のやうな、己れの姿を考へてゐた。それは、何時、何処かで、消えるともなく消えてゆく、浮雲である。（『林芙美子全集　第八巻』四二〇頁）

理性を捨てて、「蜃気楼」のような戦時中の仏印を理想化し、そのなかでしか生きることができなかったゆき子と、仏印で理性を失って被抑圧感を抱え、戦後の日本社会で居場所をなくして不安に苦しめられる富岡の悲劇は、まさに林がエピグラフで書いた理性喪失による最大の不幸だと言えよう。

## 5　おわりに

本章では、戦後の南方が登場する林芙美子の小説を取り上げ、三つの方面から考察した。戦後まもなく書いた「ボルネオ・ダイヤ」や一九四九年一一月から連載を始めた「浮雲」の主人公はいずれも女性であり、彼女たちは新しい人生を始めるために南方へ行くことに決心した。『放浪記』（一九三〇年七月、改造社）が認められたあと、本格的に作家活動を始めた林は、自らの東京放浪体験を踏まえて、東京で一人生きていこうとする若い女性を主人公にした小説をいくつも書いている。「浅春譜」（『東京朝日新聞』一九三一年一月～三月）、「帯廣まで」（『文

藝春秋』一九三五年七月号）などがその例である。こうした若い女性の生き方に関心を持っていた林が、終戦後に自らの南方体験を題材として小説を書くときに、女性の〈自分探し〉を作品に取り入れることは容易に想像できる。

さらに、ボルネオで未来が見えない球江と屋久島で死んでしまったゆき子が、作品のなかで明るい解決が得られない点も戦前の小説に通じている。十八歳で上京し、下宿だけでなく、職業をも転々としていた林にとって、確かな明るい未来などはまやかしに過ぎなかったであろう。それゆえ、戦前・戦後を問わず、彼女は底辺に生きる人たちを見つめ続け、「麗しき脊髄」「荒野の虹」「浮雲」では戦没者、引揚者、戦争未亡人などの底辺に生きる人々を登場させている。

南方は「自然と人間がたはむれ」るだけの楽園ではなく、時に不安や惨めさ、罪障感などをもたらす空間である。戦争が終わり、多くの作家が明るい未来に思いを馳せ、また、戦前と戦後の大きな断絶に喪失を感じているとき、林芙美子は時代の明るさに背を向け、喪失感に浸ることなく、戦前と同じように社会の底辺で暮らす庶民に関心を持ち続けていた。庶民の生活の暗さと未来の見えない不安が、彼女の戦前から戦後までの作品を貫いているのである。

# 第六章

## 佐多稲子における南方徴用――一作家と一国民の間で揺れる――

### 1　はじめに

佐多稲子は、戦時下の一九四〇年代に三度にわたって戦地を慰問した。一回目は、一九四一年九月一六日から二九日までである。「朝日新聞」に大きく予告が出た「銃後文芸奉公隊」の一員として、大仏次郎、林芙美子、横山隆一とともに、中国東北部（満州）で慰問と講演を行った。二回目は、翌一九四二年五月である。軍当局の計画で新潮社の『日の出』特派記者として、約一ヶ月間、上海、南京、蘇州、杭州、漢口、宜昌を慰問した。三回目は、それから四ヶ月後の一九四二年十月から一九四三年五月にかけてのことである。陸軍の徴用による報道班員として、林芙美子、小山いと子、水木洋子とともに、南方のシンガポール、スマトラ、メダンに赴いた。

敗戦後、佐多稲子は戦地慰問による「戦争協力」の問題と向き合い、自身の戦争責任を剔抉することを課題とした。そのため、従来の佐多の戦地慰問に関する研究も「戦争責任追求」の視点から論じたものが多い。例えば、長谷川啓は一連の論考[49]を通して日中戦争前後における佐多の屈折した内面を追及し、夫婦生活の破綻と自己崩壊の過程を明らかにしている。また、北川秋雄[50]や小林裕子[51]も佐多の戦争責任について論じているが、これらの先行研究は戦地慰問全体を一つの問題として扱っているきらいがあり、中国慰問と南方慰問を分けて個々の特徴や位置づけを具体的に論じていない。北川秋雄は「若き妻たち」の初出（『婦人公論』一九四二年九月号～一二月号）と単行本（葛城書店、一九四四年六月）

49　長谷川啓「『くれなゐ』から『灰色の午後』への屈折――昭和十年代をめぐって」（『日本文学』第二六巻第一号，一九七七年一月）；「屈折のゆくえ――戦争中の作品について」（『日本文学』第三〇巻第六号、一九八一年六月）；「太平洋戦争期の佐多稲子・1」（『くれなゐ』第五号、一九八五年四月）及び「太平洋戦争期の佐多稲子・2」（分載＝『独立文学』第八号、一九八五年七月／『近代文学研究』第四号、一九八七年八月／『くれなゐ』第七号、一九九〇年四月）。

50　北川秋雄『佐多稲子研究』（双文社，一九九三年十月）など。

51　小林裕子『佐多稲子――時間と体験』（翰林書房，一九九七年五月）など。

の異同を検討し、「佐多稲子自身が「聖戦」完遂を至上目的とする戦時共同体に埋没するのみならず、国民を「聖戦」に積極的に動員する御用作家として、機能していることが明らかになってくるのである」[52]と述べているが、同じ戦地慰問とはいえ、中国慰問と南方慰問は当時の戦争状況や作家自身の思想の変化などによって、作中で異なる様相を呈している。佐多の戦地慰問や女性解放思想は中国慰問を経て、南方慰問時に本当の意味での屈折、変質を遂げた。

そこで本章では、佐多稲子の戦時下から戦後にかけて発表された小説及びエッセイの分析を通して、戦地慰問の屈折や女性解放に対する態度の変化と南方慰問の関係性、そして、南方慰問に行った「プロレタリア作家」としての佐多が戦後に受けた戦争責任追求の問題を考察する。

## 2　戦地慰問の屈折と南方慰問

プロレタリア作家である佐多稲子が、戦地慰問という戦争協力的な行動に踏み出していく原因については、すでに多くの研究がなされているが、この問題を扱う場合、何よりも作家自身の言説を看過してはならないだろう。佐多は戦地慰問に赴いた直接的な動機について、「戦争中に辛いと感じたのは、この、戦争による不幸を背負った隣り組の視線であった。私自身が周囲の不幸に涙を感じていて、それに対して私は負けたのである」[53]と述懐している。つまり、佐多は民衆の不幸や悲しみに触れて、彼らに対する共感を強めていたのである。

一方で、佐多はそうした民衆との一体感を潜在的に求めていたともいえる。それは当時の佐多が抱えていた二つの孤独による。ひとつは、「夫婦狎れあいの果ての陥没」である。一九三八年に夫である窪川鶴次郎と田村俊子の不倫を契機として夫婦関係が悪化しはじめる。佐多自身が回想しているように、当初満州各地へ戦地慰問に赴いたのは「夫婦狎れあいの果ての陥没にも違いなかった」[54]。これは別の捉え方をすれば、当時の佐多は破綻した

52　北川秋雄「佐多稲子　南方派遣と『若き妻たち』のこと」（神谷忠孝・木村一信編『南方徴用作家』世界思想社，一九九六年三月）二八〇頁。

53　「（あとがき）時と人と私のこと（4）」（『佐多稲子全集　第四巻』講談社、一九七八年三月）四四六頁。

54　「（あとがき）時と人と私のこと（3）」（『佐多稲子全集　第三巻』講談社、一九七八年二月）四〇三頁。

夫婦生活によって現実感を喪失し、戦時体制への批判力を失っていたということである。いまひとつは、プロレタリア文学に対する弾圧である。佐多の文学人生は雑誌『驢馬』から始まり、そこで中野重治やのちに夫となった窪川鶴次郎と知り合う。そして、一九二八年に発表した「キャラメル工場から」でプロレタリア文学の新しい作家として認められる。このプロレタリア文学集団のなかで佐多の作家としての文学観だけではなく、一人の人間としての人生観が形成されたといっても過言ではない。しかし、一九三四年にプロレタリア文学が弾圧を受けて停滞すると、佐多は自らの拠り所を失ってしまう。

こうした家庭と社会における二重の孤独感により、佐多は民衆との一体感を求めて戦地慰問へと流されていく。中国慰問について佐多は、「戦争の本質も私なりに知っていた」が、「行く先々の印象に溺れて、自分の果たしている意味に目をふさいだ」[55]と述べている。実際、中国慰問の報告文、例えば「最前線の人々」（『日の出』一九四二年七月）や「作戦地区の空」（『日の出』一九四二年七月）では、兵隊の苦労と寂しさを描き、民衆に味方する姿勢を明確に示している。当時中国戦線は膠着状態にあり、そうした危険な場所まで慰問に赴くことが、佐多により一層「民衆との一体感」を抱かせたのだろう。中国慰問は佐多にとって戦争協力というより、「むしろ自分を危険なところまで運び、そこで兵隊と共に泣いてくるという経験の上で、ひとつの成すべきことを果したかの感じさえあ」[56]るものだったのである。

このように、中国慰問時は前線の危険を感じながら兵隊たちの苦労や寂しさに寄り添うことが佐多の「自己瞞着」の口実になっていたが、南方慰問時になるとその口実は通用しなくなる。佐多が中国へ赴いた一九四一年九月は日本軍による東南アジア各地への侵入が拡大している時期だったのに対して、シンガポールに発った一九四二年十月末はすでに軍政が敷かれており、情勢は安定していた。それゆえ、物資が豊かな南方への慰問は甘い汁を吸いに行くためではないかと周囲から批判の目を向けられることもあった。佐多はその時の心情を次のように述べている。

国内が南方熱に煽られ、木綿だ、砂糖だ、と、直接的な欲さえ、あからさまにしてい

55「（あとがき）時と人と私のこと（3）」（『佐多稲子全集 第三巻』講談社、一九七八年二月）四〇三頁。

56「自分について」（『佐多稲子全集 第十七巻』講談社、一九七九年四月）二一三頁。

るとき、その「南方」へ行くのはまさに戦争協力であった。その意味と、この情勢のゆえに、私は「中支」行きのとき以上に動揺した。（「（あとがき）時と人と私のこと（4）」『佐多稲子全集 第四巻』四四八頁）

中国慰問時のように自己を瞞着する口実を持たない佐多にとって、南方への慰問は「戦争協力」を強く意識せずにはいられなかった。のちに佐多は、戦地を慰問する「自分に、ふっと疑問を感じたのは、アメリカとの戦争へ入って、いわゆる南方へまで行くことになったときである」[57]とも振り返っているが、結局当時は南方に向かった。自身の懐疑と周囲の批判を振り切ってまで、南方に赴いた背景については、先に触れた長谷川啓が詳細に論じている[58]。そのため、ここで改めて考察することはせず、以下に氏の論点を整理して示す。①中国慰問とそれに続く戦争協力的な作品の発表によって加速度がついてしまっていたとすれば、やめることはできなかったのではないか。②南方徴用は強制的ではなかったが、プロレタリア作家として断ることはできなかったのではないか。③今後の戦争を見通すうえで役に立つかもしれないという作家としての野心があったのではないか。④すでに夫婦は関係悪化していたが、同居する窪川鶴次郎が積極的にそそのかしたのではないか。

南方での体験について佐多は、「当時の「マレー半島」とスマトラ北部を廻った私の場合、中国で出会ったような辛いおもいをすることはなく、まるで旅行者の見物に過ぎなかった」[59]と述べている。それは南方慰問をもとにした文章が、それ以前の戦争協力的なものと異なっていることからも窺える。南方について書かれたものは中国慰問時より少なく、戦意高揚もほとんど見られない。「旅の日記――昭南にて――」（『婦人日本』一九四三年三月）、「南の女の表情」（『文芸』一九四三年六月）、「マライの旅」（『日の出』一九四三年七月）などの随筆は、題目からも分かるように気楽な旅行記である。ただしここで注目したいのは、「挿話」（『新潮』一九四三年七月）と「髪の嘆き」（『オール読物』一九四三年九月）という二篇の小説である。これらはともにメダン滞在中の見聞を踏まえたもので、

57 「自分について」（『佐多稲子全集 第十七巻』講談社、一九七九年四月）二一三頁。

58 「太平洋戦争期の佐多稲子・2」（分載＝『独立文学』第八号、一九八五年七月／『近代文学研究』第四号、一九八七年八月／『くれなゐ』第七号、一九九〇年四月）。

59 「（あとがき）時と人と私のこと（4）」（『佐多稲子全集 第四巻』講談社、一九七八年三月）四四八頁。

中国慰問時のような戦場の感傷が見られない代わりに、日本人としての優越感がインドネシア人の肌と髪の色を強調することで表現されている。

「挿話」は日本人に没収されたサンパリ農園の元支配人ルマ・ブッサール家で過ごした体験を下敷きにしている。農園の近くに住む矢島という日本人は一二歳のときマレーに渡って来て、そのまま一度も日本に帰ったことがない。マレーで商売をしていた矢島は戦争中に軍の通訳としてスマトラへ渡り、現在はゴム組合の仕事をしている。一六歳のインドネシア人妻がいる矢島は、妻の皮膚の黒さを気にかけて次のように語る。

大東亜共栄圏になりまして、このインドネシヤも日本人と同じになると聞きましたものですから、それならよかろうと思いましてですね。これでちゃんと宗教も回教に入りまして正式に結婚したんでございますよ。しかし何です。もう少し色でも白いといいんですけど、なにしろ、まっ黒なんですから。（『佐多稲子全集　第三巻』三八八頁～三八九頁）

矢島が妻の皮膚の色を気にかけているもう一つの理由は、生まれてくる子供のことである。日本人として育ててやりたいと思う反面、皮膚の黒い妻と子供を人前に出すことにためらいを覚えている。「私」は矢島の言葉を次のように解釈する。

まっ黒だ、と矢島さんが言うとき、それは人間の皮膚の色を指しているのだとはおもえない突っ放した響きで聞こえるのだが、この地で今こそ晴々と働ける日本人として、自分の生活の全てを何はばかりなく人前にも出したい矢島さんの、それは渇するような切ない愛憐の情のもつれかとも聞こえたのであった。（『佐多稲子全集　第三巻』三九〇頁）

「突っ放した響き」で「真っ黒」にも関わらず、その「真っ黒」な人を「なにはばかりなく人前に」出したい矢島を通して、インドネシア人に対する人種の違いを超えた「切ない愛憐の情」を寄せる日本人のイメージを描こうとしている作者の姿勢が窺える。ただし、戦時下で「東洋の心」を強調する他の南方徴用作家（例えば、阿部知二など）と比べれば、皮膚の色を気にかけながらも受け入れようとする日本人の姿を描く佐多の捉え方は、いかにも安易だといえる。そこには、皮膚の色を気にかけること自体に、無意識の差別、自覚

されざる日本人としての優越意識が潜んでいるのである。

佐多は「挿話」の二ヶ月後に発表した「髪の嘆き」でも、こうした優越意識を描いている。日本の新聞社に勤める少女ペエは父親がオランダ人と英国人の混血で、母親がフランス人とマレー人の混血である。タバコ会社に勤めていた父親は戦争で行方不明になり、ペエは母親とともに捕虜収容所に収監されたが、母親にマレー人の血が混じっていたために二人は釈放される。新聞社には支局長吉川のほか、インドネシア人男性の事務員タリプ、中国人とマレー人の混血児で小間使いのアミイがいて、ペエは没収された自分の持ち物を取り返してくれた吉川に好意を抱いている。この小さな支局で働く人々の身分がそれぞれ異なるという設定はまさに大東亜共栄圏の縮図である。

ある日ペエは、原住民のタリプが電話を取れ、お茶を汲めと命じるのは、白系の混血児である自分に対する侮辱だと吉川に訴える。吉川はペエに命じる権利はないとタリプを責め、支局のすべての権利は支局長の自分にあるとペエに言う。支局における指導者としての吉川の存在は、大東亜共栄圏における日本を象徴していると言える。

ここで注目したいのは、ペエ自身も自分は日本人に劣ると思っていることである。小説中で鏡を見つめるペエは次のように描かれている。

> ペエは、ふと自分の髪の色に目をとめると、何故か悲しい気がした。アミイは黒い髪をしてゐる。タリプも黒い色だ。ペエは赤い髪。今まではその赤い毛が町を歩くのにもひとつの権利を表はしてゐた。隠しやうもない髪の毛の色。街で兵隊さんにはたくさん逢ふのだがペエはその度に、自分の赤い髪の毛に肩身をすぼめなければならない気におそはれる。この頃ではそれだけではなかつた。ミスタ吉川の前で、自分の髪の毛が黒かつたら、どんなにいゝだらうと思ふのであつた。（『オール読物』文藝春秋、一九四三年九月号、八八頁）

ペエにとってオランダ支配時にはひとつの権利を象徴していた赤い髪が、今では隠したいと思うほど劣等感になっている。こうした意識の変化の直接的な原因は吉川に好意を抱いているからだが、「自分の髪の毛が黒かつたら、どんなにいゝだらう」と思うペエの姿を描くことは、間接的に日本人の人種的優越性を描くことにもなっている。中国慰問時には「戦争の感傷性に溺れ」る描き方が可能だったのに対して、すでに戦況が落ち着き、気楽な見物感覚で赴く南方慰問ではそうした描き方はできない。そこで佐多は視点を変え、

矢島のインドネシア人妻の黒い皮膚、混血児ペエの赤い髪など、直接ではないものの、日本人の人種上の優越性を描く方法を採ったのである。

佐多は戦後に発表した小説「虚偽」（『人間』一九四八年六月）でも、「日本人としての優越意識」を描いている。主人公の年枝が暮らすサイザル農園で所長を務める三七、八歳の男は、もともとゴム林で働いていたが、戦争で思いがけなく広大な農園の所長になった。戦争における「日本人成功者」である彼は「この生活を、一度、妻や、子どもにさせてやりたいとおもいますな」[60]と言う。彼はマレー人の女中に年枝のことを「メン」と呼ばせ、女中が忘れると激怒する。年枝とともに農園で働くある青年は戦争の本質――「この戦争そのものが盗みでしょう」――を知り、「あの人はなんか仕合せです。僕たちの苦しみを知らないから」[61]と呟く。ここには、「挿話」の矢島に対する好意的な描き方には見られない、やや批判的な態度が表れている。

敗戦後に佐多が自身の戦争協力について考えるとき、「挿話」と「髪の嘆き」で描いた日本人の優越意識が思い出されただろう。これら二つの作品の収録状況を見ると、「髪の嘆き」が佐多のどの作品集にも収録されていない一方で、「挿話」は『佐多稲子全集　第三巻』（講談社、一九七八年二月）に収録されているが、佐多自身が執筆した「あとがき」には、この作品に関する言及はない。そのように考えると、「虚偽」に見られる批判的な眼差しは、戦争協力を自覚しながら作品を書き続けた自己に対する自戒を込めた批判とでも言うべきものだったのである。

### 3　女性解放思想の屈折と南方慰問

佐多の文学人生を辿ると、彼女は生涯をかけて女性の自立と解放に取り組んでいたことが分かる。先にも言及したが、一九二六年に雑誌『驢馬』の同人たちと出会った佐多は、一九二八年二月号の『プロレタリア芸術』に発表した「キャラメル工場から」でプロレタ

60「虚偽」（『佐多稲子全集　第四巻』講談社、一九七八年三月）三三六頁。

61「虚偽」（『佐多稲子全集　第四巻』講談社、一九七八年三月）三三九頁。

リア文学作家として出発した。結婚によって出世する道を絶ち、[62] 文学創作に自らの存在価値を見出そうとするこの一歩は、佐多が女性の自立と解放について考える最初の契機になったと思われる。

佐多が考える女性の自立と解放については、エッセイ集『女性の言葉』（高山書院、一九四〇年十月）と『続・女性の言葉』（高山書院、一九四二年一二月）から読み取れる。『女性の言葉』では、女性の恋愛と結婚、職業婦人の悩み、子育ての問題、夫婦関係など、今日から見ても示唆的な内容が語られている。一方で、刊行時期が日中戦争開始三年後の一九四〇年であるため、女性と戦争の関係についても触れざるを得なかった。佐多は日中戦争開始直後に発表した「明日を自らの手で」（一九三七年七月）において、女性の戦争に対する覚悟について論じている。そのなかで、「現実を現実として見究め、そこに処してゆく自分の覚悟が自然に流されてゐた」と語り、また、女性作家として「この困難な時代に処してゆきつゝ尚婦人全体の成長を自分の目前の仕事に結びつけて希つてゐる」[63] と述べている。

この文章は、女性が戦争という困難な時代のなかで、どのように成長していくべきか伝えることを目的としているが、佐多は次のような危惧も表明している。

> 周囲の甘やかしにも妥協してゐた。周囲の甘やかしが結局には女を以前の位置のまゝに押しとゞめ、或ひは侮蔑的な女性の取り扱ひに女自身が陥つてゆくのに彼女たちは気づかないでさへゐることがあつた。（『女性の言葉』高山書院、一九四〇年十月、一二八頁）

62 一九〇四年に佐多が生まれたとき、両親はいずれも学生であった。佐多は早くに母親を結核で亡くし、小学校修了前に上京して工場で働いた。こうした境遇から逃げ出したい願望があったのか、資産家の息子で慶應義塾大学の学生と結婚する。しかし、夫の親に反対され、二人で図った自殺も未遂に終わり、結局離婚した。

63 「明日を自らの手で」（『女性の言葉』高山書院、一九四〇年十月）一二四頁。

これはボーヴォワールの『第二の性』（一九四九年六月）[64]を想起させるようなフェミニズムの言説で、当時としては非常に示唆的であったと考えられる。佐多は戦争を女性が成長する契機と捉え、困難な時代にこそ自らの手で未来を作り出そうと女性たちに呼びかけている。こうした呼びかけは、地方に住む女性の生きる道について書いた「地方の女性に」（一九三八年）でも見られる。佐多は「生活を直視し、真剣に、積極的に生きる自覚を持つ、といふ、このすべての人に言はれることが地方に生きる女性たちにとつても、唯一の根本的な道なのであらう。具体的にはその人ひとりひとりの生き方を示してくれなければならないのだとおもふ」[65]と述べ、女性は戦争に対して抵抗も協力もせず、ただ戦争という現実を受け止め、自らの能力を活かして積極的に生きていくべきだと主張している。

しかし、こうした主張は中国への戦地慰問を通して変化していく。すでに触れたように、佐多は一九四一年九月一六日から二九日まで中国東北部各地を、翌一九四二年五月には約一ヶ月間かけて上海や南京などの前線を慰問した。慰問に関するエッセイや現地報告の一部は、一九四二年に刊行された『続・女性の言葉』（前記）にも収録されている。そのうち「最前線の人々」では、「内地がしっかりしていてこそ、この山上の兵隊さんの毎日が心安らかなものになるのである」[66]と、前線の兵士から内地に向けられた期待を伝えている。これに対して、「中支の兵隊さん達」（『婦人朝日』一九四二年八月）の章に収められた「女手は希望の門」では、兵士たちの期待に応えようとする女性の覚悟が述べられている。

私たち女性の伴侶である多くの男子の方々が戦場にあつて、私たちの想像も及ばぬ御苦労をしてゐられることを思へば、内地の困苦などは生優しい。戦地の苦労をしのん

64 例えば、ボーヴォワール『第二の性』には「幼いときでも大人になってからも、男の可能性は、一番困難だが一番確実でもある道に身を投じるように強いられることにある。女の不幸はほとんど抵抗できない誘惑に囲まれることにある。あらゆることが安易な方向に従うように女をそそのかすのだ。自分のために闘うように促す代わりに、なされるがままにいけばよい、魅惑的な理想郷を待ちなさいと言われるのである。蜃気楼に騙されたと気づいたときには、もう取り返しがつかない」とある。（『第二の性』を原文で読み直す会・訳、新潮社、二〇〇一年四月）三一九頁。

65 「地方の女性に」（『女性の言葉』高山書院、一九四〇年十月）一二〇頁。

66 「最前線の人々」（『続・女性の言葉』高山書院、一九四二年一二月）二五頁。

で銃後に励む、といふ覚悟は、もはや私たち女性は、みんなの胸にをさめて、毎日その心組みでゐる筈である。（『続・女性の言葉』五八頁）

「明日を自らの手で」や「地方の女性に」と比較すると、「生活を直視し、真剣に、積極的に生きる自覚」が、ここでは「戦地の苦労をしのんで銃後に励む、といふ覚悟」になっていることが分かる。

山川菊栄『日本婦人運動小史』によると、[67]一九三九年に一二歳から二〇歳までの女子の雇入が政府の統制下に置かれた。また従業員移動防止令も出され、軍の命令で技能、体力などに応じて一定の職場に配置されるようになったため、任意に動くことができなかった。さらに一九四二年の工場法によって女子の保護規定や深夜業禁止が廃止され、女性は男性と同じく長時間の労働に服することになった。佐多は同年刊行された『続・女性の言葉』の「婦人の能力の活用」という節で、長期戦に入ったため、婦人の「眠らされた多くの能力を従来のまゝに放置」するのは「社会的に」「大きな損失になる」[68]と述べている。上述した佐多の変容は、彼女自身が言及している「戦場の感傷性に溺れ」ていたこととも関わるが、より重要なのは、女性が自己の能力を持ち出すという点が、当時の国家総動員法下における女性能力活用政策と合致しているという点である。

佐多は『続・女性の言葉』刊行時、すでに出発していた南方慰問を通して、それまでの女性の能力を活用した戦争協力にとどまらず、日本人女性の精神上の優越性を強調することで日本の占領地支配を「正当化」していく。「髪の嘆き」のペエは白人としての優越意識を持っていたが、日本がインドネシアを占領した後、日本人女性のようになりたいと思うようになる。どうしたらいいか吉川に尋ねると、吉川は次のように答える。

〔日本人女性が〕よき妻、よき母になるために修養してゐる。イケバナとかオチャといふ作法があつて、それはしとやかなものであり、日本婦道の哲学をも体得させるものだ。然しそれだけぢやない。ピアノも弾くし、バレエををどる令嬢もあるし、そしてみんな働く。（中略）同等の男の人に対してはいつも女の方から、たとへば朝逢へ

67 山川菊栄『日本婦人運動小史』（大和書房、一九八一年十月）主に一四九頁を参照。

68 「婦人の能力の活用」（『続・女性の言葉』高山書院、一九四二年一二月）二三八頁。

ば、女の方からお早うございます、と挨拶をするね。（『オール読物』九〇頁）

ここに来て『女性の言葉』で唱えていた女性の自立と成長は見られなくなり、女性は何よりもまず「よき妻、よき母」であること、そして女性の地位は男性より低いことが作品を通して示されている。佐多のこうした発言は、一九四二年五月に文部省教育局が編纂した『戦時家庭教育指導要綱』に応えたものだと考えられる。要綱の第二項「健全ナル家風ノ樹立」には、「家長ヲ中心トシテ親子、夫婦、兄妹ノ序ヲ正シクスルコトハ家生活ノ根本ナリ」と書いてある。家長が一番で、子より親、妻より夫、弟より兄が偉いという上下関係をしっかりすることが家族の基本であり、自分より偉い人には奉公し、自分より偉くない人には協力することによって健全な家庭を築くことが、健全な国家のベースになる、と示されている。

「髪の嘆き」の吉川がペエに対して話したのは、この『戦時家庭教育指導要綱』を背景として内地の女性に「良妻賢母」思想を扶植することであったのは言うまでもない。しかし、それだけではない。吉川の発言にはもうひとつのねらいがある。それは、日本人女性に南方現地人女性に対する優越意識を持たせることである。特に後者については、「若き妻たち」[69]においても、南方でタイピストとして働くいと子の同僚芳子が、現地の女に「日本婦人の美徳」について尋ねられ、「日本の女の美点は、一度結婚したら、夫に従順に仕へて、子供をよく育てて、家を守つてゆく、その強さ」[70]だと、「髪の嘆き」の吉川とほぼ同じ内容を答える場面がある。いと子は芳子の発言を聞いて次のように考える。

会社の中で、マライ人や、混血児や、華僑の娘に立ち混つて働いてゐると、いつとなし自然に、自分を意識してゐる。それは、戦争で英国に勝つた日本人の、自づから出

69「若き妻たち」は一九四二年九月から一二月にかけて『婦人公論』に連載された中篇小説である。佐多の南方派遣を挟んで倍の分量にまでのぼる加筆を経て、一九四四年に単行本として発行された。両者の異同については前田広子「佐多稲子　戦争責任への屈折」（西田勝編『戦争と文学者：現代文学の根底を問う』三一書房、一九八三年四月）や北川秋雄「佐多稲子　南方派遣と『若き妻たち』のこと」（神谷忠孝・木村一信編『南方徴用作家』世界思想社、一九九六年三月）で詳細に論じられている。

70「若き妻たち」（『近代女性作家精選集48』ゆまに書房、二〇〇〇年一一月）二三九頁。

来てゆく誇らしい心構へで、それは戦争の建設にたづさはるものの、ひとつの戦ひでもあつた。（『近代女性作家精選集48』二四一頁）

ここで言う「日本女性の美徳」とは、中国慰問時のような女性の能力を活かして銃後に励むことからさらに進んで、外地に進出し、「一つの戦ひ」すなわち日本人女性たちはこうした精神上の優越を自覚して戦争に協力すべきだということであろう。それゆえ、南方でマライ人や混血児や華僑の娘といった外国人のなかで立ち混じって働くときは、日本人女性としての自分を意識するのである。この点について、佐多は「空を征く心――航空記念日に因んで」（『婦人公論』一九四三年十月）というエッセイで具体的な例を示している。例えば、飛行機の「部品」を製作している若い日本人女性たちの姿が「南方の現地人の女たちに驚異の声をあげさせて」[71]いることや、スマトラの映画館で日本人女性が火花の散る作業に従事している姿をスクリーンで見たインドネシア人女性が「おう、と感じ入った声をあげ」たことに、作者が「映画館の中にいる一人の日本の女として誇らしさを感じ」[72]ていることである。ここから、南方現地人女性に対する日本人女性の精神上の優越性を示そうとする作者の姿勢が読み取れる。

佐多の文学作品に「理想的な女性像」があるとすれば、日中戦争以前は恋愛や結婚、子育てなどの問題をうまく解決できる自立した女性であり、日中戦争開始後から戦地慰問に赴くまでは、戦争という現実を直視し、真剣に、積極的に生きる自覚を持つ女性であった。それが、中国慰問時には自分の能力を活かして戦争に協力する女性になり、南方慰問後には、「良妻賢母」で「日本人女性としての優越意識」を持ち、大東亜共栄圏における思想戦の一端を担う女性へと変化していった。このように、佐多の女性解放思想は戦時下において屈折し、変質を遂げたのである。

## 4 「罪」より「恥」

敗戦後、佐多がはじめて戦地慰問の戦争責任を自覚したのは、一九四五年一二月に発足した新日本文学会の発起人に加わることを許されなかったときである。そのことを中野重

71 「空を征く心」（『佐多稲子全集 第十六巻』講談社、一九七九年三月）三七四頁。

72 「空を征く心」（『佐多稲子全集 第十六巻』講談社、一九七九年三月）三七五頁。

治に言い渡された時、佐多は「がく然としながらも、最初の瞬間、私に抗いの気持がなかったわけではな」[73]かったという。確かに、発起人のなかには佐多に南方慰問へ赴くよう唆した元夫の窪川鶴次郎がいたため、なぜ自分だけがメンバーから排除されたのかと思う彼女の悔しい気持ちは理解できなくもない。小林裕子の論に従えば、発起人のなかには「明らかに侵略政策を賛美し、軍に協力する文章を発表している者もあった」が、「結局、彼ら九人と佐多稲子との相違は、報道班員として戦地におもむいたかどうかという一点だけにあ」[74]った。戦地慰問に行ったかどうかよりも、戦争協力的な文章を書いたかどうか、あるいはどの程度協力したのかが問われるべきだが、当時、新日本文学会の創設に携わっていた作家たちはそうではなかった。ここから敗戦直後における民主主義運動の視野の狭さが窺える。佐多は、敗戦から約三年後に発表した「虚偽」（『人間』一九四八年六月）と「泡沫の記録」（『光』一九四八年九月）で、その打撃を正面から受け止め、自己の戦争責任の問題を深堀りする。本節ではこれら二つの作品と戦時下の作品「若き妻たち」を比較しながら、戦後の佐多が南方慰問をどのように振り返ったのかを考察する。

「若き妻たち」のなかに、南方で働くいと子が事務室の窓から外を眺める場面がある。

> その南国らしい派手な並木の下を、艶のある朱塗りの腕車の走つてゆくのが見えてゐる。その車体の模様のやうに打つてある金具が、とき〳〵、陽に光つてゐた。（中略）支那人の車夫は上着に風をはらませてゐる。軍人さんが乗つてゐたり、防暑服の日本人が乗つてゐたり、かとおもふと、腕をあらはに出した支那服の娘が二人相乗りで、更紗模様のだぶ〳〵したヅボンの脚を揃へてゐる。頭に桃色の布を巻いた印度人が、サロンの白い裾をけつて歩いてゐる。（『近代女性作家精選集48』二二二頁）

ここでは、異国情緒溢れる南方の町並みと、そこで暮らす日本人、中国人、現地人の調和した様子が描かれている。戦後の小説「虚偽」にも上の引用と類似した南方の風景が、「まっ赤な花をつけた街路樹の下を、朱塗りに金具で模様を打った人力車が日本人を乗せて走っていた。街一面が海へ向ったここでは、明るい陽をいっぱいに浴びて、かりっと焼

73「（あとがき）時と人と私のこと（4）」（『佐多稲子全集 第四巻』講談社、一九七八年三月）四五二頁。

74 小林裕子『佐多稲子――時間と体験』（翰林書房，一九九七年五月）九二頁。

けながら海からの風で空気をかえていた」[75]と描写されている。続けて、主人公年枝が見る日本人の姿が次のように描かれる。

歩いている日本の男たちの半袖と半ズボンの姿は、港町を見物している田舎者のどこかうろうろしたものを聯想させた。（中略）ここへ来るまえに上海を見てきているというだけの年枝の目にさえ、安物屋としかおもえぬ店の飾窓に顔をすり寄せているのをみると、同胞への悲しみを彼女は感じた。（『佐多稲子全集 第四巻』三二五頁）

年枝の目に映る南方の明るい原色の美しさは「若き妻たち」にも共通して描かれているが、ここでは特に「港町を見物している田舎者」のような日本人同胞への「悲しみ」を感じることに注目したい。日本人は美しい南方から疎外されながら、そうした自覚をまだ持っていないことに年枝は悲しみを感じているのである。日本人が悲しみを感じさせるのと対照的に、「虚偽」で描かれる現地人たちはこの南方の風景と融合している。例えば、土木作業に従事する中国人の婦人労働者たちの仕事帰りの様子は次のように描かれている。

如何にも一日の仕事を終えたというふうに、ゆったり歩いてくる。南の夕陽はどこか憂愁をふくんで大きな幅を持ち、二階建ての木造家屋の並んだこの通りを静かに照らしている。女たちは誰も口をきかず、しかし、疲れたという足どりでもない。揃って、南方の中国人らしくおおらかな顔立ちで、無表情に近かったが、それは太く落ちついていて、まるで、ここの大きな夕陽の色調を人間の顔でしっかり受け止めているというように見えた。人力車で来る日本の女など見上げようとしていない。（『佐多稲子全集 第四巻』三二七頁）

夕陽のなかを落ち着いて歩く中国婦人たちが完全に南方の風景と一体化しているシーンである。これは先の引用で描かれていた南方から疎外された日本人の姿とは対照的である。ただし佐多は、被植民地における肉体労働者の悲惨さについては言及していない。終始「意識的な虚偽」という「隠れ蓑」を着て行動していたと主張しながら、年枝は現地人の悲惨

75 「虚偽」（『佐多稲子全集 第四巻』講談社、一九七八年三月）三二五頁。

さから目をそらしている。換言すれば、「今度の戦争の本質」[76]すなわち日本の侵略という事実を知っているにもかかわらず、その本質に踏み込んで正面から向き合おうとしないところに、主人公年枝ないし作者佐多の限界があるということである。

こうした姿勢は、兄が戦争で行方不明になった中国人の娘との会話からも窺える。「一日一万人近くの中国人が何日か続けて殺されたという話」[77]を聞いた年枝は、彼女の兄が行方不明になったのもそれと関係があるかもしれないと考えるが、何も言えなかった。兄を行方不明にした日本政府の役所で働く娘の辛い心情を察しながら、年枝はそれ以上真相に立ち入ろうとはしないのである。自己を弁解するために書いた作品であるにもかかわらず、ここでは佐多の「反省意識」や日本の侵略によって惨めな生活を強いられた被害者に対する「罪の意識」は希薄である。

結論を先に述べれば、敗戦直後の佐多の戦争協力に対する自己弁解の出発点は、「罪の意識」ではなく「恥の意識」だと考えられる。つまり、佐多が「虚偽」を書いているときに読者として想定していたのは植民地の人々でも日本国民でもなく、プロレタリア文学集団の仲間たちだったのである。自分の戦時中の行動は面従腹背であると仲間たちは理解してくれていると信じ込んでいた年枝は、戦後になってはじめて友人たちが自分を戦争協力者として見ていたことに気づく。仲間たちと一緒にいるとき、年枝はその場の話に入っていけない。

> 年枝はその時までの生涯に、我が手に招いた恥辱に身をさらした経験を持たなかった。年枝にとって言えば、この座敷に集まっている人の他に心底打ち明けるほどの友達を持たなかった。（中略）彼女の主観で、悪いことをしたとおもえないところに、だって、という反問が生じた。彼女のよそおった虚偽について、友達は、知っていたのではないのか。（『佐多稲子全集　第四巻』三四〇頁）

みんな同じだと思っていたが、実際には自分だけが違うという孤独とともに羞恥をも年枝は感じている。五章からなるこの小説は、最後の一章だけ背景を戦後日本に設定してい

76「虚偽」（『佐多稲子全集　第四巻』講談社、一九七八年三月）三二六頁。
77「虚偽」（『佐多稲子全集　第四巻』講談社、一九七八年三月）三二八頁。

る。しかしこの一章においても、年枝の侮辱感の内実や左翼の仲間から受けた批判についての説明はなく、読者には判然としない。そこで、もう一つの作品「泡沫の記録」を取り上げる。

主人公の年枝は、戦中官憲によって虐殺された作家K（小林多喜二）の記念集会で講演する予定だった。しかし、前日に南方へ戦地慰問した作家Hがアカハタ紙で批判されたため、同行した自分には講演する資格がないと断る。集会には参加したが、屈辱に耐えながら自分の「座り場所は他にはない」[78]と年枝は苦痛を感じる。また、翌日には「戦後公職追放になった文壇の大御所K」（菊池寛）の通夜に「敵地に乗り込むような」気持ちを抱きながら出席し、文壇の作家たちから「戦時中やっぱり協力したじゃないですか」と攻撃を受ける。このように、「泡沫の記録」では二つの文学グループのどちらにも居場所がない年枝の辛い立場が描かれている。そして、「恥をたたえた面をじいっと人々の目にさらすことで自分の責任を取ろうとしてい」[79]たという、「虚偽」で描かれていない年枝の対応が、「泡沫の記録」には書かれているのである。

プロレタリア作家における「恥」は転向作家によく見られる。中野重治「村の家」（『経済往来』一九三五年五月）はその好例である。「村の家」は村の生活にしっかりと根づいて揺るぎのない父に対し、転向した息子勉次のみじめさ、頼りなさを描いている。小説の末尾近くで、勉次は自分の弱さを見据えながら新たに出発しようと決意する。貴司山治は『文学者に就いて』（『東京朝日新聞』一九三四年一二月一二日～一五日）で、転向を恥じるあまり第一義的に生きることはできないが、プロレタリア文学としては二義的であっても、ブルジョア作家よりもすぐれた作品を書いていくことができると主張している。これに対して、中野は次のように反論する。

> 僕は、あるいは僕らは、作家としての新生の道を第一義的生活と制作とより以外のところにはおけないのである。もし僕らが、自ら呼んだ降伏の恥の社会的個人的要因の錯綜を文学的綜合の中へ肉づけすることで、文学作品として打ち出した自己批判を通して日本の革命運動の伝統の革命的批判に加われたならば、僕らは、その時も過去は

78 「泡沫の記録」（『佐多稲子全集 第四巻』講談社、一九七八年三月）三五六頁。

79 「泡沫の記録」（『佐多稲子全集 第四巻』講談社、一九七八年三月）三五九頁。

過去としてあるのではあるが、その消えぬ痣を頬に浮かべたまま人間および作家として第一義の道を進めるのである。（「文学者に就いて」について」（『中野重治全集第七巻』筑摩書房、一九五九年七月）九三頁～九四頁）

転向作家への批判を全面的に認める貴司とは異なり、中野は転向したという「過去」を「消えぬ痣」として受け止め、恥じらいを覚えながら、「人間および作家」として転向の社会的責任を自覚し、再起の決意を示している。このように見てくると、佐多と中野のプロレタリア作家の「転向の恥」に対する捉え方は近いように見えるが、実は違う。「彼女のよそおった虚偽について、友達は、知っていたのではないのか」と「虚偽」にもあるように、年枝の左翼仲間に対する反論には、自分に向けられた批判を完全には承服できないという心情が垣間見られる。それは、友達が自分の徴用中の行為は面従腹背であることを知っていたのではないかという反問と、もし彼らがそれを知らなかったのであれば、なぜ止めてくれなかったのかと心の中で彼らを責める気持ちである。

また、彼らの中には明らかに戦争に協力した人もいる。そうした複雑な心情は「泡沫の記録」で次のように描かれている。

自分の恥を恥として受ける覚悟でありながら、その一般的な扱い方には納得の出来ぬものもあり、ときには、戦争責任を追求するものに軽侮をすら感じることもないではなかった。軽侮を感じ、しかしそれを自分が表現する立場はもってはいないじゃないか、と納得のゆかぬものや、一部に対する軽蔑の感情を、自分の傲慢のせいであろうか、と自らに反問した。（『佐多稲子全集 第四巻』三五九頁）

数人（宮本百合子や中野重治など）を除いて、戦時下に戦争協力的な文章を書いた人は多くいるにもかかわらず、彼らが全く責任を感じていないかのような態度に、年枝は軽侮を覚える。しかし、今の自分はその軽侮を表現できる立場にない。こうした考えのなかで、彼らに対する軽侮は自分の傲慢さによるものではないかという疑いが芽生える。佐多が抱えていた「恥」の内実は、反省、後悔、憤懣、混迷がないまぜになった複雑な心情だったのである。

以上、「虚偽」と「泡沫の記録」から、佐多のプロレタリア文学集団に対する帰属意識の深さと、強固な恥の意識が見られることを確認した。ここで着目したいのは、戦時下で

は「周囲の不幸」に「涙を感じ」ていた佐多が、敗戦後自らの戦地慰問を振り返ったとき、民衆に対する「罪」よりも左翼仲間に対する「恥」を強く感じていたのはなぜかということである。

「虚偽」の最終章で友人のM（宮本百合子を思わせる人物）に「なんで行ったの？」と難詰される場面がある。

「私は、見たかったのです」

「しかしね、作家は、ただ、見たいから、って、立場があれば行けないのよ」

「ええ、それならば、わかります」

言って、うなずきながら、年枝は心のうちで、また、それならばわかる、とくり返した。（『佐多稲子全集 第四巻』三四一頁）

年枝は南方へ行った理由を「見たかった」からだとMに説明する。年枝は一人の国民として、戦場における兵士たちの苦痛を自らの目で「見たかった」のであり、彼女は自身の立場を一国民、庶民として位置づけている。作家、なかでも著名な作家の発言は権威性と影響力を持っており、世論をコントロールする力があるため、慎重に行動しなければならないことをMは年枝に気づかせようとしている。年枝の発言「それならば、わかります」から、「作家」という立場を利用してはいけないことは彼女がはじめからわかっていることがわかる。

前にも言及したように、佐多のプロレタリア文学集団に対する帰属意識は非常に深く、共産党を自分の居場所と信じ、「プロレタリア作家」という身分を決して忘れることはない。宮本に自分は一国民として「見たかったから」行ったのだと弁解しようとしながらも、心のどこかには、実は作家として行ったのだという後ろめたさがある。実際、後ろめたさがあるからこそ、「虚偽」などの戦後作品で、軍部に対して面従腹背の態度を取ったと繰り返し強調する。ここから、佐多の矛盾した心理が窺える。

「虚偽」で描かれている主人公とM（宮本百合子）の対話は、あくまで佐多本人の視点から考えたあるいは推測したものである。では、宮本による佐多の戦地慰問に関する発言はどうだろうか。宮本は一九四七年十月に発表した『婦人と文学――近代日本の婦人作家――』（実業之日本社）で、「かつて、プロレタリア文学理論が、文学のもつ社会性、階級性について語つたとき、力をつくしてそれに反対し、芸術主義至上の「純芸術性」を護

ると称した人々が、一九四〇年代には自ら文学殺戮の先頭に立つた」と批判したうえで、次のように述べている。

> 窪川稲子のやうな婦人作家までも、その動員に応じなければならなかつたことは、一部の人々に意外の思ひをさせた。『キャラメル工場から』を書いた窪川稲子、『くれなひ』を書いた窪川稲子が、侵略戦争のために協力するといふことは会得出来ないことであつたから。（『婦人と文学』筑摩書房、一九五一年四月、二三二頁）

ここから、佐多の戦地慰問に対する宮本の失望が読み取れる。さらに宮本は、佐多が一九四六年六月の『評論』に発表した「女作家」に見られる、「隠れ蓑を着たまゝ戦争の実地を見て来」た「それなりの作家根性」があるという言説に対して、次の二点から批判している。ひとつは、婦人作家の戦地慰問作品に小説は少なく、ほとんどが報告文であること。いまひとつは、報告風の文章には、女が飛行機に乗る、弾丸の来るところへ出て行くといった積極的な行動描写と封建風な敬語とが同時に存在するという違和感がある。そのことを指摘したうえで、「いつも上官の前では小腰をかゞめてゐるこれら婦人作家の前線報道は、さういふ環境で「日本の女」といふものに対して何が期待されてゐたのか、推測するにかたくないやうに思へる」（二三三頁）と批判的な態度を取っている。

佐多自身は心のどこかで、自分は一人の国民として行ったのだと考えているかも知れないが、第三者（たとえそれが宮本のような佐多の親しい友人であったとしても）には、「作家」として行ったのだとしか思われない。なぜなら、戦地徴用作家たちが戦後になって戦争責任を追求される際、彼らの政治的身分が深く関わってくるからである。たとえば、前章で論じた、どの文学グループにも属さず、「アナーキイ」を自称していた林芙美子は、佐多と一緒に中国、南方を慰問したが、佐多ほど猛烈な追及は受けなかった。早くに左翼作家と知り合い、左翼運動に身を投じた佐多の戦争責任が追求されるとき、彼女の「プロレタリア作家」という身分は隠されようもなく、また佐多自身も自己逃避せずに世間の批判と正面から向き合った。ここに、先に示した問いに対する一つの答えが出たといえよう。

戦後、ほとんどの人に迷いの時期があったと思われる。佐多にとっても、自らの負う責任が民衆に対するものか左翼仲間に対するものか明確になっていない時期であった。そうした時期に佐多へ向けられた批判のほとんどは、「プロレタリア作家の戦争協力」という方面からきたものである。しかも、その中に彼女の信頼していた仲間たちがいる。そうし

た要因から、自分にとって遠い存在の植民地の人々や日本国民に対する「罪の意識」よりも、身近のプロレタリア文学作家の仲間たちに対する「恥の意識」の方が強くなったのである。戦後何十年のなかで、佐多は如何にこの「恥の意識」から立ち直り、再出発したのかについては別の機会に譲るが、ただ一点、年月が経つにつれて、佐多は左翼側にある権力的支配の構造を批判するようになり、旧左翼仲間たちに対する「恥の意識」も薄らいでいくことを記しておきたい。

## 5　おわりに

本章では、佐多稲子における南方慰問の位置づけについて、戦地慰問の屈折と女性解放思想の変容という二つの視点から考察してきた。中国慰問時には自身の行為を戦争協力だと見なしていなかった佐多は、南方慰問を決意したときにはじめて自覚せざるを得なかった。一方、彼女の女性解放思想も南方慰問を経て、国家総動員法下に巻き込まれる形で大きな変容を見せていく。日中戦争以前は女性の解放を熱望していた佐多が、南方慰問後は、良妻賢母でも外地進出でも国の役に立てば「日本女性の美徳」であると変わる。敗戦後間もない時期に佐多が自身の戦争協力について振り返るとき、プロレタリア作家集団への帰属意識の深さや戦後社会の混乱から、民衆に対する「罪の意識」の方よりも、左翼仲間たちに対する「恥の意識」の方が強い。しかし、この「恥の意識」には左翼仲間の批判に対して承服できないような心情も垣間見られる。それゆえ、「佐多稲子は、戦争協力の九割を自分の責任ととらえているのだが、あとの一割をどうしても他者に押し付けたいのである」[80]との批判がある。とはいえ、敗戦後長らく自らの戦争協力の問題を主題として作品を書き続け、戦争責任の追求から逃げることも責任転嫁することもない佐多の姿勢には、一人の人間としての「誠実さ」が見られる。多くの作家が避けようとした戦争責任の問題を主体的に引き受け、自己追求と自己反省を通して、佐多は作家としてだけでなく、人間としても成長した。戦後、再出発した佐多は社会的な活動に積極的に関わり、松川事件の被告の救援にも活躍した。最晩年までそうした関心は衰えず、社会的な発言も続けた。一九六九年五月に発表されたエッセイ「長崎の非情」の冒頭は、佐多の戦後の心境を語ってい

80　前田広子「佐多稲子――戦争責任への屈折」（西田勝編『戦争と文学者：現代文学の根底を問う』三一書房、一九八三年四月）二〇五頁。

るといえよう。

傷あとというものは、それが深ければ深いほど、いっときは立ち上り難く呆然とただずんでしまうほどのものだろう。しかし生きてゆく以上、いつまでもそこにとどまってはいられない。えいっ、とばかりわが身を振り起して歩み出すとき、忘却という力にすがろうともする。（中略）わが性格と、わが過ぎてきたつづきの道に立つしかないのであり、いわば傷痕をふんまえるとき、立ち直りというものが地につくのであろうか。（『佐多稲子全集　第十八巻』三一一頁）

## 第三部まとめ

第三部では、南方視察のために徴用された女性作家・林芙美子と佐多稲子を取り上げ、両者が自身の南方徴用体験をどのように受け止めたのか、それぞれの南方徴用作品及びエッセイを通して考察してきた。彼女たちが徴用中どのように戦争を表現しているのか、そして戦後になって自らの戦地慰問をどのように振り返っているのかといった問題に、作家の政治的立場が関係していることが窺える。言い換えれば、政治的立場の違いによって、作家の戦時下の行動と戦後の振り返り方は異なるということである。

第五章でも言及したが、林は南方滞在期間を含む戦時下において、南方体験を小説化することはなかった。最初に書かれた南方徴用作品は、敗戦からほぼ一年後の「ボルネオ・ダイヤ」であった。ここで見過ごすことができないのは、林が戦時下で南方体験を小説化しなかったのは意図的ではないということである。今川英子が作成した年譜（『林芙美子全集　第一六巻』三〇三頁）によれば、一九四四年から一九四五年までの二年間、林は疎外地の信州で「狐」などの童話を書いて村の子供たちに聞かせたりするほかは、作家活動のほとんどを停止している。この二年間の沈黙は何によるのだろうか。『放浪記』から作家人生を出発した貧しい庶民の林は、元来政治や社会に興味を持っておらず、戦時下は一人の国民として戦争に巻き込まれ、戦争という不自由な時代にあって無力感にとらわれたのではないかと考えられる。

どの文学グループにも依らない林は、「「放浪記Ⅱ」あとがき」で「私は左翼にも右翼にもなる事ができない。貧しいプロレタリヤでありながら、私はプロレタリヤ運動なぞにははいつてゆけなかつた。私は私の道を歩いた。いかなる集団党派にも縁がない。私はそんなものを必要としなかつた」（『林芙美子全集　第十六巻』二七〇頁）と、自身が各文学集団と一線を画していた理由を述べている。政治的立場を持っていない林は戦後の南方徴用作品のなかで、戦没者、戦争未亡人、復員兵といった社会の底辺で生きている人たちを取り上げているが、それを社会問題として捉えるのではなく、あくまでもその時代を生きる一人ひとりの人間の姿を描くだけである。

この点において、佐多稲子と林芙美子は対照的だと言えるであろう。一九二八年二月号の『プロレタリア芸術』に「キャラメル工場から」を発表して以来、佐多には「プロレタリア作家」という肩書きが一生付いて回る。それゆえ、彼女の中国慰問、南方慰問に対する批判は林のそれよりも厳しかった。しかし、佐多はこの肩書きを脱ぎ捨てようとはせず、

代わりに、戦後何十年という時間をかけて自らの戦地慰問の問題と向き合い、考え続けた。確かに、本論文で見てきたように、佐多が南方で書いた「虚偽」や「挿話」のなかで、日本人の南方における指導者としての絶対的地位を強調したり、日本人女性に南方現地人女性に対する優越意識を持たせたりするといった戦争協力的な姿勢は否定できない。しかし、こうした協力は当時の状況では一般的であり、むしろ武田麟太郎などの大半の作家と比べれば、協力していない方だと言っていい。にもかかわらず、「左翼」という政治的立場のために、佐多はほかの作家よりも厳しく批判され続けた。

無論、アナーキイを自称しても、林は完全に戦争責任の追及を免れることはできなかった。林が批判を受ける点は、佐多とは対照的に、戦後になって「反省意識」を見せないところにある。たとえば、渡辺澄子は「続・再発見 近代の女性作家たち」（『東京新聞』二〇〇二年二月一九日夕刊）で、戦後の林は「自己の戦争協力に何の痛痒も感じないかのように猛然と活動開始」したと批判している。確かに、中国従軍の体験を題材に書いた「戦線」と「北岸部隊」には「兵隊賛美」の言説が随所に見られる。また、南方視察の体験を戦後になってはじめて書いた「ボルネオ・ダイヤ」「麗しき脊髄」「荒野の虹」「浮雲」では、自らの戦争責任に言及していない。戦後何十年にもわたって小説やエッセイで自らに戦争責任を問い続けている佐多と比べれば、林には自分の戦争責任を逃れようとするきらいがあるように見える。

しかし、このことを問う前に、彼女が自らの戦争責任をどの程度自覚しているか問う必要がある。本論文では中国慰問は考察の対象外であるため、「北岸部隊」は取り上げていないが、いわゆる「兵隊賛美」は、兵士たちが米に塩をかけた粗末な食事をしている姿に胸打たれるといったようなことである。これは佐多の、中国慰問の自分は「戦争の感傷性に溺れ」たという心情と同じだろう。佐多は中国慰問時、自身の行為を戦争協力とは思っておらず、「むしろ自分を危険なところまで運び、そこで兵隊と共に泣いてくるという経験の上で、ひとつの成すべきことを果したかの感じさえあ」[81]ったと述べている。この気持ちは当時の林にも共通していたであろう。ただし、佐多が南方徴用中から帰還後にかけて「髪の嘆き」と「挿話」を書いているに対し、林は徴用中に数篇の報告文を書いたほかは、敗戦まで執筆活動が停止されている。このように見てくると、林は戦後、自身の戦時下に

81「自分について」（『佐多稲子全集 第十七巻』講談社、一九七九年四月）二一三頁。

おける戦地慰問を戦争協力だと思っていない可能性がある。

林と佐多はともに地方から上京してきた貧しい文学少女であり、時代の変化に敏感である。早くにプロレタリア作家と知り合い、左翼運動に身を投じた佐多が、戦後になってプロレタリア作家として自らの中国慰問と南方慰問にこだわっているのに対し、自伝的小説「放浪記」から出発し、貧しさを身に沁みて知っている林は、地に足をつけた現実主義者である。林芙美子と佐多稲子の南方徴用が、戦後の彼女たちの文学創作のなかで異なる様相を呈しているのは、こうした点によるところが大きいのではなかろうか。

# 終　章

本論文では六人の南方徴用作家に関する考察を通して、彼らが南方で何を見、何を感じたのか、そしてその体験を戦後どのように振り返り、創作に反映させたのか（あるいは反映させなかったのか）を論じてきた。大東亜戦争下における文学者の営為を論じる場合、戦争責任の追求は避けられない問題であるが、本論文では南方徴用作家としての仕事や日本文学報国会での活動よりも彼らの作品に注目し、そのテクスト分析を主な研究方法とした。

本論文で取り上げた六人は、同じ「南方徴用作家」という肩書きを持っているため、彼らに対する評価は、戦争に「協力した」か「協力していない」かといった安易な判断に陥りやすい。しかし、彼らは「南方徴用作家」である前にひとりの人間であり、それぞれに生い立ちや政治的立場がある。それゆえ、彼らの文学的営為をテクストに即して分析し、南方徴用体験が当該作家にとってどのような位置づけにあったのか考察することにこそ意味がある。そうすることで、彼らの知られざる一面を窺い知ることができると同時に、彼らの文学人生における南方徴用体験の問題を全面的に把握することにもつながるのである。

こうした問題意識から、本論文では「陸軍報道班」「海軍報道班」「占領地視察」の三部構成として、それぞれ二人の作家を対象に、戦時下と戦後の作品を取り上げて考察した。序章でも述べたように、本論文の最終目的は徴用形態の違いに基づく作品間の偏差を明らかにすることではない。しかしながら、徴用形態の違いを見ることで浮かび上がる重要な視点もある。例えば、陸軍報道班の北原武夫と阿部知二はひとつの場所に長く滞在できたため、現地の人と文化を描くことが多い。海軍報道班の海野十三と久生十蘭は軍艦で各地を転々としたため、現地人に対する描写がほとんど見られない代わりに、海戦の描写が多い。占領地視察の林芙美子と佐多稲子は、南方訪問時にはすでに戦闘が終わり、情勢も安定していたため、戦時下で創作した南方作品は極めて少ない。また、これら六名の作家を文学傾向という視点から見ればどうなるだろうか。例えば、北原武夫と阿部知二は純文学作家、海野十三と久生十蘭は大衆文学作家、林芙美子と佐多稲子は女性作家といった分類をすることも可能である。

このように、ひとくちに「南方徴用文学」と言っても、作品に反映されているものはそれぞれの作家が抱えた問題ごとに異なっている。さらに、戦後における改稿の問題は、南方徴用文学が戦前にとどまらず、戦後文学のなかでも追求されるべき課題を内包していることを物語っている。本論文では、こうした南方徴用文学が持つ多様性を、戦後における南方表象の問題を軸に一人ひとりの作家を通して明らかにしてきた。以下、各章の内容を振り返っ

たうえで、本論文の結論と今後の課題と展望を示す。

第一章では北原武夫を取り上げた。彼が徴用中に感じた「想念」に注目し、小説「カリオランの薔薇」の戦中版と戦後版における改作について考察した。戦後版では、「私」が夜中に赤ん坊の泣き声と赤ん坊をあやす女の靴音を聞く場面を加筆することで、カリオランの「薔薇」に深い意味を与えている。戦前版では、女の好意といった不透明な印象しか残さなかったが、加筆によって「薔薇」が赤ん坊と女の影を揺曳させることになった。さらに、戦後版では「私」が内地で女と子供を捨てた私秘的な過去についても加筆している。これら二つの加筆は、北原による戦時下の文学論「薔薇について」を受け継ぐ一方で、それを破産させてもいる。この「破れ」ができたからこそ、戦後版「カリオランの薔薇」は北原が「戦争文学論」で主張する、読者を「考えさせる」ものになったのである。

第二章では阿部知二を取り上げた。『火の島』の分析を通して、彼が戦時下において軍部の要請を意識しながらも、オランダ人学者に関心を寄せていたことを明らかにした。この関心は戦後の小説「死の花」の主題となり、徴用中にオランダ人学者の友人と軍部規定の板挟みになった主人公の苦しみとして描かれている。さらに、「猿踊」という題材の戦前版と戦後版について考察することで、阿部が南方で敵性国人学者だけではなく、現地人にも目を向けていたことを明らかにした。戦後版における猿のようなみすぼらしい男が村で生き生きと踊る対照的な光景や、小説末尾に見られる夢の描写には、戦後における阿部の反省の姿勢が表れているといえる。

第三章では海野十三を取り上げた。海野と海軍省の外郭団体くろがね会との関わりから、彼の南方徴用には必然性があった。徴用前の海野は愛国者と科学者の二つの〈顔〉を持っていたが、前線でアメリカの新兵器を目の当たりにし、日本の科学力不足の現実を心の底から認めざるを得なくなったことで、科学者と愛国者という二つの立場が分裂していった。戦後、海野は徴用中に捨てた科学者の〈顔〉を取り戻し、軍国主義者の「海野十三は死んだ」と宣言して、科学技術の普及と科学小説の執筆を続けた。「火星兵団」「地球発狂事件」「火星探検」といった作品を通して、海野が描く地球外知的生命は戦前の「敵」から戦後の「友人」へと変化していった。

第四章では久生十蘭を取り上げた。「内地へよろしく」と「風流旅情記」の分析を通して、戦時下の非日常を日常化する十蘭の南方徴用作品の特徴を明らかにした。一般的な徴用作品に見られる「戦争の悲痛」がほとんど見られない代わりに、前線の兵士たちとその生活をユーモア溢れる筆致で描いている。無論、徴用作品である以上、戦争協力的な言説が全く見られない

わけではない。しかし十蘭は、自身の作風と軍部の要請のあいだでうまくバランスをとっていた。戦後、「内地へよろしく」を「風流旅情記」として改作したのも、戦時色が強い小説を主人公ひとりの「風流」な旅行記に書き直すためだったと考えられる。

第五章では林芙美子を取り上げた。「ボルネオ・ダイヤ」と「浮雲」の分析を通して、林が描く女たちにとって、南方が現実逃避の場所として捉えられていることを明らかにした。しかし結局のところ、南方へ来た彼女たちは以前よりも悲惨な状況に陥ってしまう。また、林の戦後作品における「自然と人間がたはむれ」る楽園としての南方イメージと南方体験がもたらす不安という二面性を、「ボルネオ・ダイヤ」「麗しき脊髄」「荒野の虹」「浮雲」の分析を通して考察した。この不安は戦後まで続き、日本に居場所のない虚無感や戦没者に対する罪悪感へと変わっていく。さらに、これら一連の作品に描かれている恋愛から、南方は理性喪失の場所として捉えられていることも明らかにした。本章での分析を通して、戦前と同様に、社会の底辺で生きる庶民の生活に目を向ける林の姿を確認することができた。

第六章では佐多稲子を取り上げた。ここでは「戦地慰問の屈折」と「女性解放思想の屈折」という二つの視点を設定して、従来の佐多研究で看過されてきた南方慰問について考察した。佐多の戦地慰問は一九四一年の中国慰問から始まったが、彼女自身がそれを「戦争協力」と意識しはじめたのは南方慰問時であったといえる。また佐多の女性解放思想も、南方慰問を経て、国家総動員法に巻き込まれる形で大きく変容した。佐多はプロレタリア作家だったため、戦地慰問による戦争責任の追求から逃れられなかった。「虚偽」「泡沫の記録」及び戦後のエッセイから、敗戦直後の佐多は自らの戦地慰問を振り返っているが、民衆に対する「罪の意識」より左翼仲間に対する「恥の意識」の方が強かったことが窺える。佐多の戦争責任をめぐっては多くの批判があるが、敗戦後長らくこの問題を主体的に引き受け、自己追求や自己反省する佐多の姿はもっと評価されるべきだと考える。

以上、六人の南方徴用作家における文学的営為を本論文の内容に即して簡潔にまとめてみた。南方徴用体験を戦時下の出来事としてのみ捉えることは、南方徴用文学研究を矮小化することにつながりかねない。それゆえ、本論文では南方徴用体験が戦後に与えた影響まで視野を拡大した。戦後の改作によって戦時下で忘却されたものを読者に考えさせる北原武夫、文化という視点から敵性国人学者や南方現地人を度々作品に登場させる阿部知二、戦時下に捨てられた科学者の〈顔〉を取り戻し、科学の普及や科学小説の執筆に注力する海野十三、敗戦に対する態度を見せずに戦時下の作風を保ちながら作品を改作する久生十蘭、南方から帰還し、戦後の日本社会を懸命に生きる庶民を通して南方を描く林芙美子、何十年も自らの戦争責任問題にこだ

わる佐多稲子。彼らの文学的営為は決して画一的に論じることはできない広がりを持っている。本論文が彼らの戦争責任を追求するのではなく、個々の作品に着目したのはそのためである。〈南方徴用体験の戦後〉をめぐる言説とその問題系は、作家研究の領域にとどまることなく、昭和文学史を検討する際の新たな視点を提示しているように思われる。

一方で、本論文では十分に考察できなかった問題もいくつかある。第一に、南方徴用文学全体像の把握である。本論文では陸軍報道班員、海軍報道班員、占領地視察の三つの立場から、それぞれ二人の作家を研究対象とした。しかし、神谷忠孝「南方徴用作家」によれば、戦時下の南方徴用作家は百人を超えるという。本論文では六人の南方徴用作家に限定したため、南方徴用文学の全体像を把握するためには、対象とする作家の幅を広げていく必要がある。[82] 第二に、徴用文学以外の南方作品に対する把握である。本論文では「南方徴用文学」に限定したが、実際「徴用」ではなく、南方を「体験」し、表象する作家も少なくない。例えば、南洋庁教科書編集書記として南方へ赴いた中島敦や、南洋へ放浪旅に出かけた金子光晴、森三千代などが挙げられる。日本近現代文学における南方表象の全体像を明らかにするためには、これらの作家も含めて考察する必要がある。第三に、南方以外の徴用文学に対する把握である。本論文では南方に軸足を置いているが、南方徴用作家の戦後における言説、とりわけ作家自身による言説には、南方以外の戦地徴用も関わってくる。本論文でも言及したが、久生十蘭、林芙美子、佐多稲子はいずれも、南方へ赴く前に中国に戦地徴用されていた。そのため、南方以外の地域に徴用された経験がある作家の戦後についてより精確に捉えようとする場合、当該地域に関する作品、活動、言説を含めて考察する必要がある。最後に、本論文ではテクストの分析を基本的な方法としたため、当時の南方各地域における日本の占領政策など、歴史学的な資料に基づく考察が不足しているきらいがある。一例を挙げると、佐多稲子の「髪の嘆き」のなかで、ペエの母親にマレー人の血が混じっていたため、彼女たちは釈放されるという描写がある。この描写と、当時蘭印で軍政を敷いていた日本軍の敵性国人の逮捕と釈放に関する政策とのあいだに相関関係があるか否かについては検討する余地がある。今後はこうした問題を視野に入れ、同時代の時局を把握しながらテクストの分析を進めていきたい。

82 本論文で取り上げていない作家には、例えば、大東亜共栄圏を信奉していた武田麟太郎や、徴用先のシンガポールで日本語教育に邁進した記録『昭南日本学園』（愛之事業社、一九四三年八月）を書いた神保光太郎が挙げられる。

## 参考文献

### 〈文学作品〉


木村一信編『南方徴用作家叢書4〈ジャワ篇〉阿部知二』龍渓書舎、一九九六年十月

木村一信編『南方徴用作家叢書5〈ジャワ篇〉阿部知二』龍渓書舎、一九九六年十月

木村一信編『南方徴用作家叢書11〈ジャワ篇〉大宅壮一・郡司次郎正・北原武夫』龍渓書舎、一九九六年十月

木村一信編『南方徴用作家叢書12〈ジャワ篇〉北原武夫』龍渓書舎、一九九六年十月

北原武夫『雨期来る』文体社、一九四三年八月

北原武夫『北原武夫文学全集　第二巻』講談社、一九七四年一二月

北原武夫『北原武夫文学全集　第二巻』講談社、一九七五年二月

阿部知二『死の花』新文芸社、一九四七年九月

海野十三『海野十三全集　第3巻』三一書房、一九八八年六月

海野十三『海野十三全集　第5巻』三一書房、一九八九年四月

海野十三『海野十三全集　第6巻』三一書房、一九八九年九月

海野十三『海野十三全集　第7巻』三一書房、一九九〇年四月

海野十三『海野十三全集　第8巻』三一書房、一九八九年一二月

海野十三『海野十三全集　第11巻』三一書房、一九八八年一二月

海野十三『海野十三全集　別巻1』三一書房、一九九一年十月

海野十三『海野十三全集　別巻2』三一書房、一九九三年一月

海野十三『赤道南下』中公文庫、二〇〇三年七月

海野十三『ペンで征く』十三舎、二〇一一年七月

阿部正雄（久生十蘭本名）『村の飛行兵』翼賛国書刊行会、一九四三年三月

久生十蘭『定本　久生十蘭全集　第五巻』国書刊行会、二〇〇九年一一月

久生十蘭『定本　久生十蘭全集　第七巻』国書刊行会、二〇一〇年七月

久生十蘭『定本　久生十蘭全集　第十巻』国書刊行会、二〇一一年一二月

久生十蘭『久生十蘭「従軍日記」』二〇一二年八月

久生十蘭『久生十蘭全集　Ⅲ』三一書房、一九七〇年二月

林芙美子『林芙美子全集　第六巻』文泉堂、一九七七年四月

林芙美子『林芙美子全集　第七巻』文泉堂、一九七七年四月

林芙美子『林芙美子全集　第八巻』文泉堂、一九七七年四月
林芙美子『林芙美子全集　第十巻』文泉堂、一九七七年四月
林芙美子『林芙美子全集　第十六巻』文泉堂、一九七七年四月
佐多稲子「髪の嘆き」（『オール読物』一九四三年九月号）
佐多稲子『佐多稲子全集　第三巻』講談社、一九七八年二月
佐多稲子『佐多稲子全集　第四巻』講談社、一九七八年三月
佐多稲子『佐多稲子全集　第十六巻』講談社、一九七九年三月
佐多稲子『佐多稲子全集　第十七巻』講談社、一九七九年四月
佐多稲子『佐多稲子全集　第十八巻』講談社、一九七九年六月
佐多稲子「若き妻たち」（『近代女性作家精選集48』ゆまに書房、二〇〇〇年一一月）
佐多稲子『女性の言葉』高山書院、一九四〇年十月
佐多稲子『続・女性の言葉』高山書院、一九四二年一二月

〈評論・研究書〉

復刻版『ジャワ年鑑』ビブリオ、一九七三年
くろがね会『日本海軍の話』四方木書房、一九四三年七月
矢野暢『「南進」の系譜』中央公論社、一九七五年十月
芦谷信和・上田博・木村一信編『作家のアジア体験――近代日本文学の陰画――』世界思想社、一九九二年七月
復刻版『赤道報・うなばら』龍渓書舎、一九九三年九月
川村湊『南洋・樺太の日本文学』筑摩書房、一九九四年一二月
桜本富雄『日本文学報国会――大東亜戦争下の文学者たち』青木書店、一九九五年六月
神谷忠孝・木村一信編『南方徴用作家――戦争と文学――』世界思想社、一九九六年三月
綾目広治『倫理的で政治的な批評へ：日本近代文学の批判的研究』皓星社、二〇〇四年一月
木村一信『昭和作家の〈南洋行〉』世界思想社、二〇〇四年四月
音谷健郎『文学の力』人文書院、二〇〇四年十月
浦田義和『占領と文学』法政大学出版局、二〇〇七年二月
土屋忍『南洋文学の生成――訪れることと想うこと』新典社、二〇一三年九月
河西晃祐『大東亜共栄圏――帝国日本の南方体験』講談社、二〇一六年八月

西原太輔『日本人のシンガポール体験』人文書院、二〇一七年三月
竹松良明『阿部知二論:「主知」の光芒』双文社、一九九三年一一月
水上勲『阿部知二研究』双文社、一九九五年三月
森本穫『阿部知二原郷への旅』林道舎、一九九七年二月
竹松良明『阿部知二：道は晴れてあり』神戸新聞総合出版センター、二〇〇六年三月
伊藤秀雄『昭和の探偵小説』三一書房、一九九三年二月
江戸川乱歩『江戸川乱歩全集　第29巻　探偵小説四十年（下）』光文社文庫、二〇〇六年二月
山下武『「新青年」をめぐる作家たち』筑摩書房、一九九六年五月
『ユリイカ　久生十蘭特集:文体のダンディズム』青土社、一九八九年六月
前坂俊之『太平洋戦争と新聞』講談社、二〇〇七年五月
森英一『林芙美子の形成――その生と表現』、有精堂、一九九二年五月
高崎隆治『戦場の女流作家たち:林芙美子，佐多稲子，真杉静枝，豊田正子』論創社、一九九五年八月
川本三郎『林芙美子の昭和』新書館、二〇〇三年二月
高田理恵子『学歴・階級・軍隊――高学歴兵士たちの憂鬱な日常』中公新書、二〇〇八年七月
望月雅彦『林芙美子とボルネオ島――南方従軍と『浮雲』をめぐって』ヤシの実ブックス、二〇〇八年七月
桐野夏生『ナニカアル』新潮社、二〇一〇年二月
高山京子『林芙美子とその時代』論創社、二〇一〇年六月
清水正『林芙美子と屋久島』星雲社、二〇一一年四月
宮本百合子『婦人と文学――近代日本の婦人作家』筑摩書房、一九五一年四月
中野重治『中野重治全集　第七巻』筑摩書房、一九五九年七月
山川菊栄『日本婦人運動小史』大和書房、一九八一年十月
西田勝編『戦争と文学者――現代文学の根底を問う』三一書房、一九八三年四月
長谷川啓『佐多稲子論』オリジン出版センター、一九九二年七月
北川秋雄『佐多稲子研究』双文社、一九九三年十月
小林裕子『佐多稲子――体験と時間』翰林書房、一九九七年五月
小林美穂子『昭和十年代の佐多稲子』双文社、二〇〇五年三月

小林裕子・長谷川啓『佐多稲子と戦後日本』七つ森書館、二〇〇五年一一月
北川秋雄『佐多稲子研究（戦後篇）』大阪教育図書、二〇一六年三月

**〈新聞・雑誌論文〉**

「歳末の対話（1）　時局と文学との関連」『東京朝日新聞』朝刊、一九三七年一二月三〇日
「くろがね会愈発足」『東京朝日新聞』朝刊、一九四一年八月一七日
「報道班員：海の実戦座談会（1）」『東京朝日新聞』朝刊、一九四二年五月二二日
「文学報道班員帰還講演会」『東京朝日新聞』、一九四二年七月九日
「探偵小説界」『日本読書新聞』、一九四〇年三月一日
神谷忠孝「南方徴用作家」『北海道大学人文科学論集』二〇号、一九八四年二月
都築久義「作家の徴用」『愛知淑徳大学論集』一一号、一九八六年三月
竹松良明「南方徴用作家考――ジャワ敵前上陸」『大阪学院大学通信』三〇号、一九九九年十月
河西晃祐「徴用作家北原武夫・浅野晃・武田麟太郎の「インドネシア」――戦時期「南方」観の一考察」『紀尾井史学』二一号、二〇〇二年三月
木村一信「北原武夫の「ジャワ徴用」体験――薔薇を描くこと」『論究日本文学』六八号、一九九八年五月
林円「北原武夫『ジャワ従軍記　雨期来る』」『芸術至上主義文芸』二六号、二〇〇〇年一一月
水上勲「阿部知二とジャワ徴用体験」『帝塚山大学紀要』二三号、一九八六年一二月
木村一信「阿部知二とインドネシア体験（一）：その事実を巡って」『立命館言語文化研究』三号、一九九二年一月
木村一信「阿部知二の徴用体験――「死の花」の背景――」『昭和文学研究』二五集、一九九二年九月
和田典子「阿部知二　ジャワ戦争体験と文学：「敵のうしろへ」を軸に」『阿部知二研究』二三号、二〇一六年四月
新藤謙「海野十三の戦中日記：殉国意識と庶民意識」『季報唯物論研究』一二五号、二〇一三年一一月
趙蘂羅「海野十三の科学小説観：一九三〇年前後の「科学小説」と「探偵小説」、そして

ラジオ雑誌」『九大日文』二四号、二〇一四年十月
須藤勲「海野十三の作品における「他者」としての地球外知的生命体像の変遷――大戦期を挟んだ作品注目して――」『千葉工業大学研究報』六三号、二〇一六年一月
関英雄「児童文学の展望――その新たな出発――」『新日本文学』第一巻第三号、一九四六年六月
武井孝文「久生十蘭と戦後――「ハムレット」と「だいこん」を中心に」『文芸研究』六号、二〇〇九年三月
谷口基「敗戦と怪談　久生十蘭「黄泉から」を中心に」『文学』一五号、二〇一四年七月
渡辺澄子「続・再発見　近代の女性作家たち」『東京新聞』二〇〇二年二月一九日夕刊
羽矢みずき「2つの「仏印」／2つの「屋久島」――林芙美子「浮雲」論」『立教大学日本文学』八一号、一九九八年一二月
今川英子「日本近代文学のアジア林芙美子のアジア――日中戦争と南方徴用」『アジア遊学』五五号、二〇〇三年九月
加藤麻子「南方徴用作家林芙美子の足取り：『浮雲』の仏印行程」『武蔵野大学人文学会雑誌』三六号、二〇〇五年
山下聖美「林芙美子の南方従軍についての現地調査報告（3）」『日本大学芸術学部紀要』五七号、二〇一三年
鳥木圭太「女性作家の見た〈南方〉：林芙美子と佐多稲子のスマトラ」『論究日本文学』一〇六号、二〇一七年五月
矢澤美佐紀「敗戦後の佐多稲子についての一考察：「虚偽」を視点」『日本文学誌要』六三号、二〇〇一年三月
長谷川啓「戦後の佐多稲子：内なる戦争責任の凝視」『城西評論』一号、二〇〇三年三月
北川秋雄「佐多稲子「虚偽」その後：「ある夜の客」のこと」『姫路獨協大学外国語学部紀要』二二号、二〇〇九年三月

## 初出一覧

第一章　『九大日文』二七号、二〇一六年三月、二〇～三八頁

第二章　『COMPARATIO』二〇号、二〇一六年一二月、一一～二三頁

第三章　『九大日文』三一号、二〇一八年三月、一五～二八頁

第四章　『COMPARATIO』二二号、二〇一八年一二月、四七頁～五七頁

第五章　『近代文学研究』三〇号、二〇一七年一二月、四九～六二頁

第六章　『跨境／日本語文学研究』七号、二〇一八年一二月、一四九～一六六頁